
Dolls

夕凧秋香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dolls

【Nコード】

N4834R

【作者名】

夕風秋香

【あらすじ】

成績は中の中、運動はまあまあな、高校1年生。樹新きまきい 零香れいかの得意なことは、裁縫と指先を使う事。趣味はアンティークドールや色々な人形を一から作る事。

ある日、中学から作り続け3年の人形を、ようやく完成させることが出来た零香は、深夜だったこともあり、その人形を放置して眠る。だが、次に目を覚ましたとき零香は何故か森の中で眠っていて、傍には完成させたばかりの人形が置いてあるだけだった。

迷子

部屋で寝ていたはずなのに、なぜか木にもたれかかって眠っていた零香は、傍に落ちていた昨日完成させたばかりのビスク・ドールを持って辺りを歩き回っていた。

部屋で眠っていたはずなのに、目を覚ましたらいきなり森の中で頭の中が混乱していた。

だけど、座ってるままだとセーターを着ているとはいえ寒いから、動くほうがマシだろうと森の中を歩いている。素足で寒いけど。

「……ここ、どこなんだろうっ」

草を掻き分けたり、小さな川を渡ったり、時々休憩を入れながら歩く。だけど、ここがまだどこなのか特定できていなかった。

「……さむっ……」

冷たい風が体に当たると、震えだす。寂しさも加わり、気分がものすごく落ち込んできた。思わず、その場に座って体を縮みこませた。

「…私、どうなるのかな…」

持っていたビスク・ドールを抱きしめながら、心を落ち着かせようとする。でも、反対に落ち着かなくなり、心細さから涙が零れた。手で拭いても、どんどん溢れてくる。何回拭いても、止まる様子がなかったので諦めた。

「ぐすっ、誰か…いないの…っ」

零香は、どこか分からない場所で一人、泣き続けた。持っている人が腕から抜け出していることに気づくこともなく。

金髪に碧眼、見た目はかつこ良く、愛想もいいという典型的な「イケメン」の部類に入る男。リュナミス・アルトバーンは、血の繋がっていない義妹、カミィラと一緒に森の街道から自宅へと徒歩で帰っていた。片手に色々な荷物をまとめた袋をそれぞれ一つずつ持って、たわいもない話をしながら。

「でね、あの人いきなり机ひっくり返したんだよ？おかしいよね」

「ああ、そうだな」

自分とは違って、純粹で無垢なカミィラの話聞きながら、日頃なかなか出来ない話を心の中で楽しんでいた。カミィラ自身は、「話つまらないのかな？」と心配するぐらいいつもより、リュナミスの反応が薄い。そんなことはいつもの事だったから、無視しながら話をする。

「今度の遠征が終わったなら、隊の皆で食事に行こう！って提案したの、あの人なんだよ」

「グスッ」

「ん？」

小さな音だったが、それが泣き声だと気づいたリユナミスは立ち止まり、聞こえたほうへと顔を向ける。カミイラは「どうしたの？」
といいながら、同じ方向を見てみる。遠くてよく見えないが、黒い髪を持った女性が地面に座っているのが見えた。

「あの人、どうしたのかな」

「分からないが、…ちょっと行ってみるか」

「うん」

二人そろって街道から逸れ、森の中へと入る。近づいたたびに、声が大きくなっていく。そして、彼女の姿がくつきりと見えた。

長い髪を頭の上で結び、白い服を一枚だけ身に着け、長いベージュ色のスカートを着いて彼女は地面に座っていた。その体は、小刻みに震えていた。

「ねえ、どうしたの」

「ッ」

カミイラの言葉に反応して顔を上げた彼女は、顔がひどい状態だったが、声はピタリと止んでいた。そして、カミイラとリユナミスの

顔を交互に見て、黒い瞳に涙を溜めた。

「
x
」

口を開いて、何かを伝えようとしているのは分かったが、何を言っているのかさっぱり分からない。こちらも、「どうしたの?」「何があった」と声をかけたが、彼女には伝わっていないようだった。彼女は、困惑した顔で胸元を握り締めて下に俯いていた。

「どうしたものが……」

「彼女、今まで見たことないような人だし…言葉も通じないし…」

困り果てたその時、彼女の後ろからピヨコンツと小さな女の子が出てきた。紫色の瞳に金髪の長髪、黒いワンピースと白いエプロンを身につけ、頭に小さな紫色のコサージュをつけているその少女は、二人の前に彼女を挿んで立つと、優雅な礼をした。

その光景に驚き、こちらも礼を返す。カミイラも礼を返したが、そのままポケーンとその少女を見つめていた。義妹は、かわいい物が大好きなのだ。

少女は後ろを振り返り、彼女の手を掴み、何かつぶやいた。彼女は、手を掴んできた小さな手を見て驚き、うれしそうに頬を染めた。その顔は、幼い頃の面影を残した女性の笑顔だった。その顔に、少し心が惹かれた。

少女は、彼女の手のひらに魔方陣のような物を描き、その手を彼女の首に当てた。すると、小さな紫色の光が生まれ、彼女の首に集まる。訓練をしないと使うことの出来ない『魔法』を簡単に使っていることに驚いた。カミイラも同じ事を思ったらしく、二人で顔を見合わせ、彼女の結果を見た。

彼女は、首を擦りながら、少女に「どうしたらいいの?」といった顔を向けていた。少女はそれに笑顔で答える。そして、彼女は口を開いた。

「…あつ、あぁー」

彼女の声は、とても綺麗だった。どうやら魔法を使い、言語変換魔法を使っただけらしい。

彼女は、こちらを見つめて「私の声、判りますか?」と言ってくる。戸惑いながらも、二人はうなづいた。

「よかつた。今さっきはとても落ち込みました…」

彼女は、安堵した顔で立ち上がり、スカートについた土を払う。そして、傍に居た少女を軽々と抱き上げる。

「ねえねえ、その子妹さん?」

カミイラが興味津々な顔で彼女に問いかける。普通はそこで彼女の名前を聞くところだと思っただが、彼女の答えに二人そろって驚愕した。

「その子…? ああ……、エリミアの事ですか。エリミアは……私が作った人形ですよ?」

「ねえ、エリミア」と名前を呼ばれた少女は、彼女の胸に体を預けながら、はつきりと言った。

「はい。私は、^{マスター}零香によって作られた人形です」

少女だと思っていた子供が少女の形をした人形だったことに、カミ
イラは声を上げながら喜び、リュナミスはというと

「何で、気づかなかつたんだ……」

何故か、頭を抱えながら落ち込んでいるのだった。

変わった人物

「……………で、お前は何でここにいたんだ？」

何故か落ち込んでいたリユナミスは、気を取り直して問いかけた。
本人というと、

「ねえねえ、エリミアってどうやって動いてるの？この子から魔力を感じるんだけど……」

「魔力……？…エリミアがどうやって動いてるのかは私にも……。つ
いさつき動いてビックリしたぐらいですから……」

「私にもそれは判りません。ただ、私はマスターの魔力を少し頂い
ているのは、確かです」

「へえ〜。ゴーレムと一緒になんだ！なるほど〜」

「ゴーレム……？」

「うん、ゴーレム！いろんな種類があるんだよ？人間タイプとか精
霊タイプとか」

「精霊……ファンタジーですね」

「ふぁんたじー？何それ」

「えっ、知らないんですか？ファンタジーって言うのは……」

何故かカミイラとふぁんたじー（？）という物について語り合っていた。リュナミスのは、完全に無視して。リュナミスは、わざと大きくため息をついた。

「……カミイラ、いい加減に話を止めてくれないか。聞きたいことがあるんだ」

カミイラは渋々と話を止め、リュナミスの斜め後ろに下がる。リュナミスは、真剣な顔で問いかける。

「で、お前は何者だ。何故こんな場所にいた」

本人は困った表情になり、おずおずと話し始めた。エリミアは、リュナミスを睨み付けているが、そこは無視する。

「私は……ただの一般人です。私も何故ここにいたのかわかりません。自分の家で寝ていたはずなのに、起きたら何故かこの森の中で……エリミア以外見覚えのない場所だったので、せめて人がいる所に行こうと思ったんですが、ずっと歩いていたら寒くなってきていたのと、その……寂しくなって……ここで泣いていました……」

話が最後になるにつれて、顔を真っ赤にして俯いた彼女に、カミイラとエリミアは心配そうな顔で何故かそわそわしていた。リュナミスは、少し罪悪感があったが、すぐに次の質問を問いかける。

「こんな場所に一人でいたのか。ここは街道が近いとはいえ、魔物が頻繁に出てくる危険な場所だ。一人でいたら、襲われるはずだろ」
当然の推測であった。

最近、この森では頻繁に魔物が出没して、街道を通る商人や一般人を無差別に襲っているのだ。そこまで強い魔物ではないが、武器や戦い方を知らない者にとっては脅威なのだ。
まして、何も戦うすべを持っていないこの女性は格好の獲物だ。
だが、本人はというと、元の顔に戻り呑気に話す。

「やっぱりここは日本ではないのですね。だから、あれがいたんですね」

「ニホン？そこはどここの村だ。今までに見たことも聞いたこともないぞ。それにアレとは…魔物のことか」

「やっぱり異世界ですか……。あれは魔物と言えるのかもしれませんが、おとなしい子達でしたよ？かわいかったですし」

その言葉に度肝を抜かれる。まさか、魔物のことを「かわいい」とか「おとなしい」とか言ったのは今までで誰もいなかったのだ。そして、「異世界」と言ったという事は……

「お前、別の世界から来たのか？」

「日本という国がないのなら、そうです。私が住んでいるのは、地球の日本って所ですから」

「……マスター、軽いノリで言われては、相手が反応に困りますよ」
「まさしく、その通りだ。これは本当にどうすればいいのか……」

リユナミスは、色々と考えていた。

まず、この人が本当に信頼できる人物なのか。周りに危害を加える様子はないし、なおかつ性格がおとなしいため、信頼できそうである。だが、これは偽りなのかもしれない。本性は悪人なのかもしれない。

次に、扱いをどうするかである。彼女は今見慣れない土地にいるのだ。保護するか、そのまま一人にしておくか。カミイラは「絶対、家に来てもらうー!!」と言いそうだが。

そして、これが一番重要なのだ。

それは、彼女が少なからず、魔力を持つていることだ。あまり、魔力を感じることは出来ないが、集中すると彼女の中に膨大な量の魔力が秘められているのが、判った。

彼女は当然気づいていないが。これを王に伝えるべきか、それとも黙秘しておくか。いずれ、我らの所為でバレルことになるのだ。これは、カミイラと相談しなければ……。

「カミイラ、少し「ちょっと、ねえ!どうしたの?!大丈夫??」

その声に、ハッと気づいた。リユナミスが考えている間、集中しすぎていつの間にか倒れた彼女に気がつかなかった。カミイラは、彼女が倒れたことに驚いて、混乱している。エリミアも同じだった。

「カミイラ!少しどいている」

混乱しているカミイラの腕から彼女を離す。彼女の体は、異様なほどに軽かった。そして、彼女が胸を押さえ、苦しそうに息をしている

るのがわかった。手を額に当てると、熱がある。

「チツ、カミイラ！急いで村に戻るぞ」

「う、うん！」

リユナミスは、苦しそうな彼女を姫様抱っこの要領で持ち上げ、荷物とエリミアをカミイラに任せる。そして、凄まじいスピードで街道から故郷「クロツカス村」へと向かう。

カミイラも、リユナミスに劣らないスピードで彼の後ろを走る。エリミアは、平静を取り戻し、カミイラに頼らず、自分で走っている。その光景は、まるで嵐が通り過ぎたような光景だった。

クロツカス村1 - 1

「……………んっ……………」

零香が目を覚ましたとき、目に入ってきたのは白い天井だった。最初まだ頭が目覚めていないのかぼーっとしていたが、自分の左手が誰かに握られているのに気づいた。横を向くと、手を握り締めていたのは、カミイラだった。眠っているのか、寝息が聞こえる。零香はカミイラを起こさないように、上半身をあげ、左手を抜く。そして、カミイラの頭を自分の膝に乗せ、零香に掛けられていたシーツを体に掛けてあげる。

「……………ここ、どこなんだろう」

カミイラの頭をやさしく撫でながら、周りを見渡す。

周りにあったのは、タンスや窓にドアに蝋燭立て。小さな机に二つの椅子、机の上にはパンと水差しのようなものがあった。

「…怪しい場所じゃないよね、でもエリミアにあの人はどこに…」

「お呼びですか、マスター」

「ひゃあっ！びっ、ビックリした…」

いきなり目の前に出てきたエリミアに驚きつつも、少し安心した。エリミアは、机の上の水差しとパンの乗っている皿を零香の前に置く。

「お腹が空く頃だと思って、用意しておきました」

「あつ、ありがとう」

零香はパンを受け取り、半分に割って、一口サイズにしてから口に入れる。

「……………普通だね……………」

やっぱり異世界とはいえ、味はあまり変わらないことに少しがっかりしながら、一つ目のパンを食べ終えた。食べ終えると、エリミアがグラスに注いだ水を渡してくれた。その水を少しだけ飲み、エリミアに返す。

エリミアは、皿と水差しを机に置くと、零香の膝の上で幸せそうに眠っているカミィラの頭を

「……………ていつ」

どこから取り出したのか判らない、小さなハンマーで叩いた。叩かれた瞬間、カミィラがバツと体を起こした。そして、まだ眠そうな目を手で擦る。

「…ふあゝ…まだ眠いよ……………」

「おはようございます、カミィラさん」

「うん、おはよ……………って、目が覚めたの!？」

カミィラは、零香の体のあちこちを触りながら「どこも変じゃない?」「もう大丈夫?」「もう熱とかないの??」と質問攻めにしてくる。そして、またエリミアのハンマーで叩かれる。

「痛いよ、エリミアちゃん！」

「まだマスターは体調が優れていないのです。そんなにされてはマスターがまた倒れてしまいます」

「倒れた…？私、倒れたんですか？」

「いきなり熱が出て、急に倒れちゃったんだよ」

そういつて、零香が倒れた後のことを二人は話し始めた。

カミィラの兄、リユナミスと二人は自分達の故郷、クロツカス村に着くと、自分達の住んでいる家に向かい、すぐにベットに体を横にしたらしい。熱があるようだったから、薬草を煎じた薬を飲ませ、一応一段落したらしい。カミィラは、また急変するかもしれないから、とずっと傍にいてくれたそうだ。その言葉を聞いて、すぐに零香はお礼を言う。

カミィラは照れて「どういたしまして」と言ってくれた。

「で、これからの事なんだけど、その前に自己紹介だね。アタシは、カミィラ・アルトバーン。で、アタシの隣にいた男の人は、アタシのお兄ちゃん、リユナミス・アルトバーンだよ。この家は、お兄ちゃんにアタシともう一人、パルおばさんの3人で住んでるんだ」

「わっ、私は樹新零香っていいいます」

「レイカっていうんだ…何歳？あつ、待って！予想するから……18！！」

「ぶぶー、外れです。正解は、15歳でした」

「嘘っ！アタシと2つしか離れてない！アタシ、13歳なんだ」

「えっ、私同年か少し上かと思ってました」

「うわー、今まで周りに年齢が近い女の人って、いなかっただけ。ものすごくうれしい」

そういって、カミイラは零香の両手を握って満面の笑みを見せる。その表情が、零香にとっても大切だった妹と重なって、思わず彼女の頭を撫でる。彼女はうれしそうにまた笑みを浮かべた。零香も思わず笑みが零れた。エリミアは少し拗ねていたが、同じように頭を撫でてあげると、機嫌を直した。

「ねえ、よかつたら、お友達になってくれない？アタシ、友達って言ったら男の子ばかりで…あつ、でもお姉ちゃんって言った方がいいのかな？」

「お姉ちゃんは遠慮したいです…お友達なら大歓迎」

「やった！それじゃあ、これからレイカと私はお友達だね！よろしくね」

「よろしくお願いします、カミイラさん」

「お友達なんだから、これから敬語はなし！これ、約束ね？」

「はっ、うん、分かったわ。カミイラ」

「よしっ、それじゃあアタシ、お兄ちゃんとパルおばさん呼んでく

るね」

「それじゃ、また後で」と言っただけで何故か右手にエミリアを抱えて、扉を出て行くカミイラに手を振る。パタンと、扉が閉まるのを確認した後、ここがどんな場所なのか知りたくて、ベットを抜けて窓から外を見た。太陽が出ていて、とても明るい。窓から、この家の下に小さな広場があるのが見えた。そこで子供達が元気に遊んでいる。皆、男の子ばかりだ。他の家の前で仕事をしている人も畑仕事をしている人も、井戸の前で話し合っている人も、年齢はバラバラだったが、皆、男性ばかりだった。女性は2、3人ぐらいしかいない。

(髪の色が赤や黄色、緑に青色とカラフルで面白い…)

考える事が的外れをしている零香は、広場から目を離すと、遠くで何かが光っているのが見えた。

「……………」

光はふよふよと動きながら、広場の外れにある家の後ろに消えた。色々な色をした光が、その家の後ろで姿を消す。そこには何があるのか気になって、思わず窓を開いて

「ふよ、と」

5 m以上もある家の2階から、飛び降りた。

クロツカス村 1 - 2

外に飛び出して、以外に高いのが分かった零香は、瞬時に後悔したが、それはもう遅すぎると判断して、足にくる痛みを待った。だが、地面に落ちる瞬間、体が浮かび上がり、そのままゆっくり地面に足が着いた。

零香は目を丸くして、自分の足元を見ていたが、どこからか視線を感じてその方向へ顔を上げた。その視線の正体は、広場で遊んでいた子供達のものだった。まだ10歳にも満たないような子供達は、「いきなり女の人が落ちてきた…」「騎士さまのおうちから降ってきたよね」「誰なんだろう、髪がとても黒いし」とこちらを見ながら、子供達だけで話あっている。零香は、苦笑しながら子供達のほうへ近づき、子供達の目線まで自分の体を下げ、ニコリと微笑む。

「こんにちは」

「「こんにちは」」

「ねえねえ、あの奥のお家って誰のかわかる？」

そう言いながら指を指したのは、2階から見えた、光が消えていった家だ。子供達の内、一人の男の子が元気な声で言った。赤い短い髪に青い瞳を持ったその男の子は、見るからに活発そうで、いつでも外で遊んでそうな元気な子だった。

「あそこ、俺の家だよ！お姉さん、俺の家になにか用事？」

「そうなの。正確には、君のお家の裏に用事があるんだけど……」

「あつ！もしかして、あそこの事？それならいいよ、案内する！」
そう言つて男の子が手を引つ張つて家に連れて行つてくれることになつた。さすがに、エリミアと同じような身長の子に手を握られたまま歩かれると、すこし体勢がきつかつた。周りには、広場で一緒に遊んでいた子供達（10人以上）が一緒にいてくる。先頭に、零香と男の子、その周りにたくさんの子供達を引き連れて、男の子の家の裏に回る。すると、そこには幻想的な風景が広がっていた。思わず、

「綺麗……」

とつぶやいた。そこにあつたのは、小さな紫色の花やピンク色の薔薇のような花、シロツメ草のような花が一面に生え、その上を色とりどりの光の球が飛んでいる。紫色にピンクに白の花びらが風で舞い上がり、まるで光と球と踊っているような光景だつた。

男の子はそのまま零香の手を引いて、花畑の中をどんどん進んでいく。零香は途中光の球に頭を打つたり、足が引つかかつて転げそうになりながら、ついて行く。男の子は、花畑の中心にあつた、緑色の芝生が生えている場所につくとそこで足を止めた。

「お姉さんが言つてたのつてこの事だよね、でも、よくあそこから見えたね。家とかで隠れてるから村の中からだとかわかんないのに」

「いや…光がここに来るのが見えたから、気になつただけだ」

「光？なにそれ」

「今も、ほら。飛んでるよ」

今も近くを飛んでいる光の球を指差すが、男の子は「何言ってるの？お姉さん。そんなものどこにもないよ」と言って笑った。零香は、自分にしか見えていないのかと周りを見た。その証拠に他の子たちも、この光に気づかず、花で何か作っている。

「ここ、ね。俺達がんばって育てた花を、荒地に植え替えて作った場所なんだ」

「…すごいね、こんな綺麗な場所を作れるなんて」

「父さんとか村のおじさん達とかも手伝ってくれたから、すぐにできたんだ」

えへつと笑いながら、頬を染めてうれしそうにしている男の子の頭を撫でてあげる。男の子は顔が真っ赤になりながらも、うれしそうに撫でられている。その仕草がかわいいなと思う零香だった。

「お姉ちゃん！」

子供達に呼ばれた零香は、「なに？」と言って返事をする。子供達は零香に座るように促す。零香は芝生の上に座ると、頭の上にふわっと何かが乗るのが分かった。手にとると、それは不恰好だが、花輪だった。

「いいの？もらっても」

「うん！がんばって作ったんだよ」

子供達が同時に頷く。零香は、一人一人にお礼を言った後、軽く抱きしめた。子供達はそれぞれ反応が違ったが、皆最後には満面の笑

みになって零香に色々な物を渡してきた。紫色の花で作った花輪、白とピンクの花で作った花輪、全部の花をまとめて零香の周りに散りばめてくれた子もいた。色々な物を貰って、零香は何かお礼をしないといけないなと思う。だが、ここでできる事は少ない。そこで零香は昔習っていた日本舞踊を見せてあげる事にした。基本の型しか覚えていないので、ほぼうる覚えだったが、子供達は楽しそうに見てくれた。零香は、もっと喜ばせようと貰った花を一輪持ち、踊り続けた。所々、アレンジを加えて。踊るのに夢中になっている零香に子供達はいろんなことを言った。

「お姉ちゃん、綺麗…」

がほとんどだったが。そして、零香が踊り終え息を整えると、子供達が一斉に抱きついてきた。思わず、零香は背中から倒れた。

「いたたたっ…どうしたの、みんな」

「お姉ちゃんすごかったよ！綺麗だった」

「僕、もっと見たい！」

「俺ももっと見たい！」

色々と感想を言うてくる子供達に、戸惑いながら「ありがとう」といった。そして、

「お願いだから…もうそろそろ…おりてっ…」

子供達につぶされそうになりながら、言った。子供達はあわてて、零香から降りて

「「じゅめんなさい！」」

とそろって言う。体勢を直し、その場に座って苦笑する。そして、踊りの代わりに歌じや駄目か聞いてみる。正直、踊り続けて体力があまりなかった。これ以上すると、絶対に倒れると確信している零香は、音楽の歌のテストで、先生に褒められていたのを思い出し、代わりとして提案する。子供達は、大賛成してくれた。零香の隣に一番小さい男の子と今さつき案内してくれた男の子が座り、零香の前に他の子供達が並んで座った。零香はそれを確認すると、日本に伝わる童謡や外国の有名な歌を歌っていった。

「よつやく、見つけた…こんなところにいたのか」

聞き覚えのある声に、零香は閉じていた目を開ける。そして、声のするほうをみる。そこには、ラフな格好になっているリュナミスが立っていた。

「リュナミスさん…」

「なんで家から出たのかは、家で聞こう。その前に…」

そう言っつてリュナミスが零香の膝の上を指差しながら、言う。

「なんで、こいつはお前の膝の上で寝ているんだ」

それは、数十分前。零香がまだ歌っていたときのことだった。ずっと聞いていて眠くなってきたのか、数人の子供達が寝てしまったのだ。零香はそんな子供達の頭を自分の膝に乗せてあげた。他の子たちも眠そうにしていたが、大半は「家に帰って寝る」と言っつて家に帰っつていった。残っつていた子達も、父親らしき人たちが来て、それぞれの家に帰っつていった。今、零香の膝の上で眠っつていたのは、「父さん、今日は遅いんだ」と言っつて最後まで帰らなかつた、ここに案内してくれた男の子だつた。今も気持ちよさそうに、眠っつている。零香は男の子の頭を撫でながら、リュナミスの問いかけに答える。

「今日、この子のお父さん帰りが遅いらしくつて…まだ眠いから寝る」と言っつて、この状態です」

リュナミスはその言葉に目を丸くした後、苦笑した。だが、うれしそうな顔だつた。リュナミスは零香の隣に座ると、肩に自分の着ていた上着を掛けてくれた。リュナミスの顔を見ると微妙に赤い。

「また熱を出されても、困るからな。もう夕刻だから、体が冷える」

その態度と行動にまた笑い出した。まるで、昔付き合っていた男の子とそっくりだったのだ。リュナミスは真顔で「何がおかしいんだ？」と聞いてきた。

「だって…ふふふ、付き合ってた人と似てるんです、リュナミスさん」

「似てる？どこが似てるんだ？」

「性格です。とても判りやすい…くすくす、態度でわかつちゃうんです」

「俺は、そんなに態度に出やすいのか？訓練してるんだが…」

「ええ、そうですねよ？」

そう言つて、零香はリュナミスの頬に軽く触れた。そのとたん、リュナミスの顔は真っ赤になった。その変わり様に、また笑い出した。リュナミスは「いつか同じ思いさせてやる」と拳を震わせた。

「あの人、元気かな……」

零香は、付き合っていた男の人を思い出していた。3年ぐらい前、2歳年上の男の子と付き合い始めた。その男の人は部活の先輩で、向こうから告白してきたのだ。零香も気になっていたので付き合い始めたのだが…意外な性癖の持ち主だった事は覚えている。

そんな彼と付き合い始めて一週間のある日、いきなり先輩の同級生に襲われた。先輩と零香との仲を引き裂こうとした、零香の同級生の仕業だった。その同級生は、普段から零香のことを毛嫌いしてきて、よく集団で虐められていた。先輩の同級生と付き合っていると

聞いていたから、まさかと思った。そのまさかだった。その先輩は何回も同級生の名前を言いながら、言い訳を言ってきたのだ。その時はなんとかその先輩の隙を着いて、逃れる事ができたが、それ以降同級生の虐めが過激になった。その虐めに体が耐えられなくなつて体を壊したとき、彼は一人暮らしの零香のために学校を休んで看病してくれた。顔を真っ赤にしたり、いきなり真顔になつたりと、性格は本当にリユナミスと一緒にいた。彼の親の転勤で、外国に行く事になって、彼の親に別れさせられてしまったが、彼とはこちらに来るまではメールを交わすほど仲の良い友達だった。

「いきなりメールが来なくなつたら、心配するかな……」

「…向ここの家族や知り合いの事を心配しているのか？」

零香は素直に「はい」と頷いた。リユナミスは少し悲しそうな顔をした。そして、言った。

「お前は、向ここの世界に帰れたら、帰りたいか？」

「いいえ」

きつぱりと否定した零香にリユナミスは目を丸くした。普通、「帰りたい」というところだろうが、零香には帰りたいくない事情があったのだ。それを明かすのはまだ早いと感じ、リユナミスには「まだ、こちらの世界を全て知ったわけではないですから。全部判るまで帰りたいくないです」と伝えた。その言葉に、リユナミスは安堵の表情を浮かべる。そして、村の入り口付近に立っていた男性に気づくと、まだ零香の膝の上でスヤスヤと眠っていた男の子の体を揺さぶる。

「リック、起きろ。父さんが探してるぞ」

その言葉に、リックと呼ばれた男の子は勢いよく起き上がると、リユナミスを見て

「騎士様！」

と言った。零香は「騎士？」と頭にハテナマークを浮かべながら呼ばれた本人を見る。本人は苦笑を浮かべながらリックの頭を撫でると、その背中を押して「ほら、早く行って来い」と言った。リックは満面の笑みのまま父親と思われる男性のほうへ走っていった。零香はリックをある程度見送った後、立ち上がった。が、いつのまにかリックが目の前に戻ってきていた。それに驚いていると、いきなりリックに腕を引かれる。

「うわっ！」

そのまま倒れるのかと思ったが、それはリックが阻止した。倒れかけていた零香を抱きとめると、戸惑っている零香の頬に口付けをした。それには零香も驚いて、すぐにバツと体を離すと口付けられた頬を手で触り、困惑した顔になった。リックはそんな零香に

「お姉さん、俺、お姉さんの事大好きだ！また明日、遊ぼうな！」

そう言って後ろへ方向転換して走り去っていった。走る前に意味ありな笑みをリユナミスに見せて。リックのいきなりの行動に、後に残された二人は啞然とするだけだった。リックが家の中へ入っていたのが見えると、零香は思わずポツリと呟いた。

「…こちらの世界では、リック君みたいな子が多いんですか？」

「いや、反対に少ない……と思う。リックは親の影響を受けてるからな……」

「リック君のご両親って変わった方なんですな」

「ああ、それも俺の幼馴染夫婦なんだよ……」

頭を抱えながら「今度会ったら、説教でもしよう……」と呟くリュナミスだったが、零香はそれ以前に「俺の幼馴染夫婦」という言葉が気にかかっていた。

「ちなみに、リック君のご両親の年齢って……」

「どちらとも俺と同じ21だ」

「リック君の年齢は？」

「……今年で6歳だ」

「……えっ？」

(えっと、逆算をすると、それって……、14歳の内に妊娠して、15歳で生んだ……ってことに)

「完全に犯罪じゃないですか!!!」

「お前の世界での結婚の定義は知らんが、こちらでは15歳で大人と認められ、結婚できるんだ。あいつらは家同士で決めた婚約者同士だったし、小さい頃から一緒だったからな。結婚する前に、子供が出来ただけだ」

「15で大人…でも、早すぎるような…。こちらでは20歳が大人って言われてましたよ？」

「この国が法で定めているからな。隣の国ではお前と同じく20歳が大人として認められている」

「この世界って何カ国あるんですか？」

「まあ、そういう話は家でしよう。もう、日が落ちる」

そう言っただけ先に歩いていくリユナミスの後を、追いかけてやろうとした零香だったが、いきなり足が痛くなり、その場に座ってしまった。足を見てみると、足裏に無数の傷が出来ていて、そこから血が出ていた。今まで素足で行動していた所為だと思っ

「痛…」

「…はあつ、先に手当てだな。見せてみる」

零香はリユナミスに足裏を見せる。すると、リユナミスは右足に手を当て、目を閉じると「癒しよ、ここに…」と呟いた。そのとたん、周りで飛んでいた光の球の内、赤い球がその手のひらに集まったと思うと、強い光を放った。その光が消えると、そこには傷一つない足があった。零香はそれを見て

（魔法…だったんだよね？でも、あの光…もしかして私にも出来るかも…）

と考えていた。リユナミスはそれに気づかず、左足も同じように直

そうとしていたが、それを零香は手で止める。リユナミスは、零香が何がしたいのか解らなかったが、何か試す気なんだろうと気づいてくれた。零香は「すいません」と謝った後、自分の足に右手を当て、

「癒しよ、ここに……」

と呟いた。すると、自分の掌から緑色の光が溢れ、傷が癒えていく感じがした。光が消えると、そこにはリユナミスが直してくれた足と同じく、傷のない左足があった。零香はそれに喜び、リユナミスは驚いていた。

「お前、今の魔法だよな」

「はい、見よう見まねでやってみました」

「何てことだ…最初から魔力を制御できるなんて…制御するのに数年掛かるのに」

「お前は驚かせてくれるな」と苦笑しながら頭を撫でられた。零香は解らなかったが、魔法を扱うためには、ある程度魔力を制御しなくてはならない。制御しなければ、他の場所やモノにまで影響が及ぶからだ。たとえるなら、暖炉に火をつけようとして魔法を使つて、制御できずに家を燃やしてしまった、という感じだ。この魔力制御をするのには、仕官学校に通い数年掛けて訓練をするか、王都にある魔法学校で魔力制御をしながら、生活をするしかないのだ。それに魔力を持っている人なんて、自分で学んで身につけるか、生まれる前から素質があつた者しかいない。まして、最初から膨大な量の魔力を持っているのは、その内の数人だろう。それを簡単に制御してみせる零香に、リユナミスは驚いたのが半分、ちよつと自分の中

の何か折られて、悲しいのが半分心の中を占めていた。そんな感情、表にはまったく出さないが。零香は、そんな事も知らず「明日から、いろんなこと試してみよう」とご機嫌だった。二人はそれぞれ違った事を考えながら、リック達の花畑を抜け、そのままカミイラが「アタシたちの家」だと言っていた、家に帰っていくのだった。

クロツカス村 1 - 3

リユナミスと零香が家に戻って来て、最初に出会ったのはエプロン姿のカミィラだった。カミィラのピンク色の髪と同じピンク色のエプロンには、たくさんのフリルがついている。零香はそれを見て

(もう少しフリル減らして、リボンをアクセントにしたほうがかわいいと思うな…)

ともし、自分だったらこうする、というアイデアを頭の中で考えながら家に入った。リユナミスがカミィラに「ただいま」と声を掛ける。するとカミィラはこちらを見ながら、暖炉で鍋の中身をかき回していた。鍋からとてもおいしいそうな匂いがする。

「あつ、お帰り。パルおばさんが「帰ってきたらすぐにおいで」って、言ってたよ？ エリミアちゃんも一緒だから、お話終わったら、皆で晩御飯食べよ」

「わかった」

リユナミスは「お前の事で話があるんだろう」と零香についてくるように促した。零香はそれに従ってついて行こうとしたが、

「それにしても……女性嫌いなリユナ兄が、アタシ達以外にあんなに話してるの初めて見たよ」

その言葉に、二人そろって硬直した。カミィラは

(あれ…？リユナ兄は固まるだろうと思ったけど、レイカも…ということは…)

「何かいやらしい事でもやったの？」

と言った。間を開けず、すぐに

「「やって」「ない！」「ません！」

二人が顔を真っ赤にして反応を返すモノだから、カミイラは(絶対何かやったな…後でリユナ兄に追求してみよう)と心の中で決めるのだった。

二人が真っ赤になっているのは、リックという少年の行動の事を思い出した所為だという事には気づかず。実際、カミイラは二人が会話しているのの一部見ただけだったのだ。

「はいはい、そこらで話は終わりにしといてくれないかい？」

後ろからいきなり聞こえた女性の声にビックリした零香は、声のしたほうに顔を向けた。声の持ち主は、髪が青く、青い瞳を持った30代ぐらいの女性だった。身長は零香と同じぐらいで(ちなみに、零香の身長は167cmである)少し顔にしわがあった。

「パルおばさん、エリミアちゃんの事わかった？」

カミイラにそう呼ばれた女性は、カミイラに

「さっぱり解ないねえ、魔力で動いている事はわかったんだけど、意思を持った人形なんて初めてだからね」

と肩ぐらいまである髪の毛を手で梳きながら、答えた。彼女は零香の傍に近づくと顔をまじまじと見つめた。

「ふむ、あんたがあの人形を作ったのかい？」

「は、はい」

「そうかい、あたいはパルサーシャ。この子達の保護者って所さ。宜しく頼むよ」

そういうと、零香の手を握って握手をしてきた。零香は苦笑いで「こちらこそよろしくお願ひします、パルサーシャさん」と答えた。パルサーシャは20秒程度手を握り締めた後、手を離し、カミイラに

「先に晩御飯にしよう。話が長くなりそうだからねえ、用意しとくれ」

と言った。カミイラは「はい」と返事した後、かき回していた鍋を持って、奥の机と椅子が置いてある場所へ歩いていった。零香はパルサーシャが「あんたはいったんこっちにおいで」と言われたので、パルサーシャが入っていた部屋についていった。パルサーシャはそこでダンスの中をあさっていた。

「ん〜…これでもないし、これは…派手だから似合わないねえ…」

「あ、あの…?」

「ん〜…おっ、あった!あんたこれ、着とくれ」

「わっ」

パルサーシャツが投げてきたのは、白を基本として作られた、ゆつたりとしたワンピースだった。袖は長袖だったが、肩と胸元と背中の半分が出るデザインだった。背中には茶色の紐が網目状に通っていて、これで微調整するようだ。裾が膝ぐらいの長さで、生地は薄そうに見えて意外に見えない。

「あんだ、どうせ服の替えないんだろ？下着もあるから、サイズが合うか判らないけど良かったら貰っておくれ。いらぬ物だしね」

「ありがとうございます。あの、それと…」

「ん、なんだい？他に必要な物があるなら、言うておくれ」

「裁縫道具を貸していただけないでしょうか。ちょっと袖がほつれてるみたいで…直したいんです」

「ああ、それかい。それなら……」「マスター、どうぞ。裁縫道具です」

いきなり目の前に現れたエリミアに零香とパルサーシャツは驚いた。エリミアはコンパクトサイズの裁縫道具を持って反応を待っていた。零香はそれを受け取って「ありがとう」とお礼を言った。すると、エリミアはどこからともなく大きなカバンを持ってきた。そのカバンに見覚えがあった。

「エリミア、それ…」

「マスターのお部屋から拝借してきた物です。マスターが必要としそうな物を持ってきました」

その言葉に、零香は衝撃を受けた。

「ねえ、それって魔法で持ってきたの…?」

「はい、そうです」

「それは、複数の人に対しても使えるの…?」

零香はおそろおそろ聞いてみた。元の世界に戻る事が出来るなら、零香はこの世界に用が無くなってしまふ。そして、あの恐怖の日々に戻ってします。それだけは嫌だった。

「……現状では、無理です。私の魔力では、私以外を連れてマスタ―の世界に戻るにはまだ足りません」

エリミアのその言葉に、安堵した。そして何か引つかかった。

「……現状、ってことはいつか戻れるの…?」

「はい、可能性はあります。魔力を他者から貰う事ができれば…難しい問題ですが、可能です。戻る事は難しいですが、こちらに来ることは簡単にできます。それに、現状一回行くと2ヶ月ほど魔力を溜めておかないと私だけでも、行けません」

零香はこれで、自分の世界に帰れるという事実がわかった。そして、またこの世界に戻ってこれる事も。それは、零香を安心させた。

「そう、わかった、ありがとう。それで何を持ってきてくれたの?」

エリミアはカバンをズルズルと引き摺って、零香の足元に立つとそのカバンをおもむろに開いた。バツと中から出てきたのは、色々な道具とエリミア用に作っていた服などだった。

「今回持ってきたのは、マスターの服を数着と私の服を数着。それと、櫛や髪留め。薬に携帯食料、後は布とかです」

エリミアはカバンの中から色々な物を見せた後、「これは後でお部屋のほうへお持ちしますね」と言っておき、エリミアはいきなりカバンをどこかへ放り投げた。カバンはそのまま床に落ちずに空気の中へと姿を消した。これには零香も今まで見ていたパルサーシャも啞然とした。

「えと…どこにいったの？あのカバン」

「空間の狭間に保管しました」

エリミアは「こうやって、また取り出せますよ」と言っておき、床からいきなりカバンを取り出した。エリミアいわく、これはエリミアにしかできない事で、魔法を応用して空間の狭間で物の保管と取り出しを行えるらしい。

「それじゃあ、これからエリミアに荷物とか預けようか」

「承りました」

エリミアは小さく礼をすると、「晩御飯の準備を手伝ってまいります」と言っておき、部屋を出て行った。零香は、近くにあった木の椅子に座り、一分で服のほつれを直し、着てみた。パルサーシャはその様子を見て、近くで眺めていた。

「着てみましたが…胸が少し余りますね…」

そう言つて零香は自分の小さな胸を見た。今は上のキャミソールやブラは外していて、素肌が見える。零香の胸はCカップなのだが、着てみると少し胸の部分の布が余る。自分の胸とパルサーシャの胸を見比べてみる。音で表現すると、

零香：ポンツ、キュツ、ボンツ

パルサーシャ：ボンツ、キュツ、ボンツ

零香は少し涙目になった。

零香は余っている部分を少し切り取り、それをリボンにして胸元につけることで一応自分にぴったりとなったが、腰が強調されるのが少しだけ恥ずかしい。

パルサーシャは

「そのほうがかわいいよ、今さつき着てた服より似合ってる」

と言つて褒めてくれた。が、正直言つとパルサーシャのほうを見ると、落ち込むばかりであった。

「はあ……わひゃあっ!?!」

いきなり後ろから胸を掴まれた零香は、驚いて奇声を上げてしまった。掴んでいる本人は

「あら、以外にいい形ねえ。少し小さい感じだけど」

と胸の感想を言った。

「なななななっ！いきなり何するんですか！」

「ん〜、ちよつと実験？」

「実験つて…！やあつ、いきなり揉まないでくださいっ！」

「いいじゃないの、減るもんじゃないんだしねえ」

「減ります！あつ、ちよつと止めてくださいっ」

「ふふふ これはいい人材を見つけたねえ」

激しく抵抗する零香に対して、パルサーシャは満面の笑みで零香の胸を揉み続けた。

扉が開いたままな事を忘れて

「
っ…」

「向こう、楽しそうだねえ」

隣の部屋では、椅子に座って何かに耐えているリュナミスと、そんな兄の反応を見て楽しんでいる、カミィラの姿があった。

クロツカス村 1 - 3 (後書き)

最後のほうはノリで書きましたw

クロツカス村 1 - 4

それから10分後……

「はあっ、はあっ……っ、疲れた」

ずっと胸を揉まれ続けて汗だくと涙目になっている零香に対して、パルサーシャは「ごめん、ごめん。ちよいとやりすぎたねえ」と言っ
て手を差し出してきた。零香はその手を掴んで立ち上がると、涙
目のままパルサーシャをじっと見つめた。パルサーシャはそれを無
視して慌てて零香をつれて、元の部屋に戻った。戻る前に零香はリ
ユナミスから借りていた上着を羽織る。元の部屋に戻ると、机の前
に座っていたカミィラが

「遅いよ、二人共。シチュー温めなおしたから、早く食べよ」

と言ってきたので二人そろって謝った。そして、パルサーシャはカ
ミィラの隣に座り、零香は何故か顔が真っ赤なりユナミスの隣に座
った。エリミアは机の上に座っている。

それぞれの目の前には白い深めのさらにシチューが入っていた。皆
が座つたのを確認したカミィラは「それじゃあ、どうぞ。頂いてく
ださい」と言った。すると、零香以外の4人はそのまま食べ始めた。
零香も「いただきます」と手を合わせて、スプーンで一口シチュー

を食べる。

「……おいしい」

零香の料理の感想に、カミイラは満足そうな笑顔を見せた。パルサーシャはシチューを食べながらいろいろな事を話し始めた。

「カミイラは料理だけは得意だからね、これ以外は駄目駄目だよ」

「ちよつ、パルおばさん。それ内緒って約束だったのに」

「昔は料理も駄目でねえ、こんなおいしい物が作れるようになったのも最近なんだよ」

「しょうがないじゃない、パルおばさんなかなか料理教えてくれないんだもの」

「教えようって思ったときに限っていないんだから、しょうがないだろう?」

「む〜…まあ、それはしょうがないけど…」

「いつも家にいてくれたら助かるのに、仕事でいなくなるじゃないかい」

「それはパルおばさんにも言えるんだけど」

会話の内容についていけない零香はただ苦笑いをするだけだった。

皆がシチューを食べ終えたとき、カミイラはみんなの皿をまとめて「ちよつと外の川で洗ってくるね」と言つて鍋などを持って裏口から出て行つた。他の4人はお茶を飲みながらこれからの事について話し合うことになった。

「さてと、これからあなたの事についてなんだけど…」

「はい」

「あなた、できる事を言つてみておくれ」

「えつと、炊事、洗濯、掃除、裁縫や手先を良く使う仕事は得意です」

「ふむふむ、なるほどね……昼間のあれもあるし……よし、決まりだねえ」

「決まり？」

「ああ、あなたの事を保護してあげるよ」

「本当ですか！？」ただし「

そう言つてパルサーシャが机の下から取り出したのは、小さな袋と小さな剣だった。零香の前に置くとパルサーシャは真剣な顔で言つた。

「3つ条件を出すよ。それを守ってくれるなら、あたいは満足さ。まずー」

パルサーシヤは袋の中から小さな金色のコインを取り出した。

「これはこの国のお金さ、名前はエルド。これ一枚で1エルドだ。理解したかい？」

零香は短く頷いた。

「1エルドでパンが1つ買える。あんだ、このクロツカス村でこのエルドを貯めて、ある物を3日以内にある人物から買って、あたいに見せな。エルドを得るための手段は選ばないよ」

「その、ある物とある人物って？」

「この村の特産品、アクウのネツクレスき。デザインとかは気にしないで、好きなもんを選んでおいで。アクウっていうのは、この村で取れる宝石をまとめて言った名前なんだ。で、その宝石を装飾品に加工して売っているのが…」

「リックの父親で、俺の幼馴染のアラトエル・トーニヤだ」

「えっと、あのちなみに一つ何エルドですか？」

「そうだねえ……」

パルサーシヤは小さな袋から何枚もエルドを出してきた。

「普通のサイズのものだと大体、150エルドだよ。宝石が大きいほど、値段も価値も上がってくる。150エルドあると……そうだねえ、あんたの着ている服が2着ぐらい買えるかな？少しお釣りが出るかもしれないけどね」

「なるほど」

「わかったかい？わかったら、次にいくよ」

零香は短く頷いた。

「それじゃあ、二つ目の条件はこの剣を、この村の外れにある洞窟の中の台座に挿してきてほしいんだよ」

そう言っつてパルサーシャは剣を零香に投げた。零香はそれを上手に取ると、指で刀身をなぞつてみた。ほのかに温かい。

「それはね、この村の守り神が宿ってる剣なのさ。まあ、本当なのが気になって色んな学者とか鍛冶屋に見せてみたけど、ただの剣っつて言っつてたからね。さっさと戻しておきたいのさ」

零香は剣を触りながら、小さい声で「これが、ただの剣？」と呟いた。パルサーシャはそれを聞き逃さなかった。

「あんた、それがただの剣じゃないっつて言っつのかい？」

零香は独り言が聞かれていた事に驚いて、すごく小さい声で「はい」とだけ答えた。パルサーシャは何か難しい事を考えている顔になっていた。そして、そのままの顔で話を続ける。

「もしかして、あんた。この村で色々な色の球が飛んでるの、見た事あるかい？」

「はい、昼間見ました」

パルサーシャは納得したような顔になって、どこで見たのか訊ねてきた。零香は昼間の事を（歌った事や踊っていた事を除いて）話し、剣とそれがどういう関係があるのかきいてみた。リユナミスの視線が何故か痛かった。

「あんたが見たのはね、精霊って言われてる物さ。この世界を作った神様の代理人って言われてて、魔力の源でもあるのさ。あんたが見たのは一番下の下級精霊だけど、その他にも上級精霊とか、神様が一番最初に世界に送り込んだ始祖精霊達とかがいるわけさ。色々な精霊がいるおかげで、色々な魔法が使える。で、その剣には守り神として、何か精霊が宿ってるって言われてるのさ」

「だから、この剣は温かいんですか？」

「それはあんたにしか分からないよ。あたい達はそれを触っても、ただの冷たい剣でしかないんだからね」

「それは、なんでですか？」

「そりゃあ、精霊を触ったり見る事が出来る人ってのは少ないんだよ」

パルサーシャはリユナミスを指差して、「魔法を使えるのに、見えない例」と言った。

零香は目を丸くして、リユナミスを見つめた。リユナミスはその視線に耐えられなくなったのか、お茶をすすりながら目を背けた。パルサーシャはまた笑みを浮かべる。

「くふふ、まあ精霊に好かれていないと、魔法は使えても見えない

人とか魔法は使えないのに見える人とか、一番ひどいのは使えないし見えないって人さ。個人差が激しいのよ」

「…なるほど」

「あんたは、魔法も使えるし精霊も見ることができるとし、触る事もできる。で、いろんなことができる。昼間のあれもあるし………いいこと思いついた」

パルサーシャはまるでおもちゃを見つけた子供のようなあどけない笑みを浮かべた。その顔の意味に気づいたりユナミスは、ため息をつけて片手で顔を隠していた。零香はその笑みに気づかず、ずっと剣を触ったり振ってみたりしていた。

「三つ目の条件はここに世話になってる間の食事を作るってやつだったけど、変更！あんた、一週間後の祭りで精霊の踊り子をやんなさい」

「……………はい？」

零香はパルサーシャが何を言ったのか意味が分からず、思わず剣を手から落としてしまった。剣は床に突き刺さる前に、エリミアがキヤッチした。零香は慌てて剣をエリミアから受け取り、机の上に置いた。

「大丈夫ですか、マスター」

無表情だが、心配している様子のエリミアに「大丈夫」とだけ答えておく。

その前に、変更前の「お世話になっている間の食事を作る」はなんとなく理由は分かる。

なぜなら、帰ってきたときは別のことが気になってそっちに意識を向けていたが、カミイラのかき混ぜていた鍋の横にジャガイモのような物が、皮に実が大量に残ったまま無残な形でカゴの中に入っていたのを思い出したから。それも数十個は剥いたような皮の量だった。

でも、シチューはカミイラとエリミアがおかわりしたのも数えると8人前ぐらいしかなかったはず……。ジャガイモのような物は少し小さいかなってぐらいだったし。

カミイラは料理ベタだというのがまるわかりだった。

だけど、変更した後の条件の方は意味がわからなかった。踊り子なんて、自分よりもっと綺麗な人がするべきだ。そもそも

「精霊の踊り子ってなんですか？」

パルサーシャは外を指差しながら、わかりやすく説明をし始めた。

「精霊の踊り子って言うのは、年に二度、それぞれの町とか村でこの世界の神様と精霊達に祈りを捧げるんだけど、数人の女達が代表して祈りの代わりに踊りを捧げるのさ。まあ、実際はただのお祭りさ。皆で飲み食いして、わいわい騒ぐ。だけど、神様と精霊には感

謝するんだよ、悪人でもね」

「なるほど」

「で、年で二度ある祭りの一回目が一週間後の今日、この国一斉に行われるのさ。今年は王子がこの村に来るらしいからねえ、女達は気合を入れて準備してるよ」

「ふむふむ」

「で、ちょうどいいから、あんたも参加しな」

「出来れば、お断りします」

きつぱりと断った零香にパルサーシヤはキョトンとした顔になっていた。零香は「あんまり目立ちたくないですし、私綺麗じゃないし、正直見てるほうがいいです」と早口でしゃべった。だが、パルサーシヤは大きなため息をついた。

「あんたねえ、子供達のおかげであんたの事を知らない人は、この村には誰もいないんだよ。昼間の事、子供達が皆話してたよ。『黒い髪の綺麗なお姉ちゃん』の事をね。この村には黒髪の女なんて、あんたぐらいしかいないよ。いや、国中探してもあんただけさ。それでも目立ってないって言うのかい？」

「それは、大げさなんじゃ…それに、私綺麗じゃないですよ？髪が短いと胸を隠すだけで男に見られた事がありますし」

「あのね…自覚がないのかわかんないけど……いや、これは言わないほうが面白いかな」

小さい声でぶつぶつと独り言を言い始めたパールサーシャを無視して、零香はリユナミスに話しかけていた。

「私って、この国だと地味なほうだと思っんですが」

「いや、反対に目立つ。この国で黒髪の女なんて今まで見た事はない」

「なんで、黒髪の方はいないんですか？帰る途中で見た女性は茶色だったし、黒もいてもおかしくないと思うのですが」

「さあ、な。俺は隣の国にも行ったことがあるが、その人たちもどちらかといえば黒じゃなく、青だったしな」

「ん〜……変わったところですね、ここって」

「お前が変わってるんだよ」

「そうでしたね、私が変わってるんですよ」

零香はエリミアを抱きしめながら、少しだけ悲しいと思った。そっだ、この国では自分が変わっているんだ。この世界では、自分だけ違う。

エリミアが手を握ってきたのがわかった。もしかしたら、気持ち

わかってしまったのかもしれない。零香はエリミアの小さな手を握り返した。その手は剣を触ったときと同じく温かった。

「ありがとう、エリミア」

小さくエリミアにだけ聞こえるように囁いた。エリミアは返事の代わりに微笑み返してくれた。普段は無表情なのに、相手を安心させる時だけ笑ってくれるエリミアに感謝した。

「私は、マスターの傍にずっといます。だから、安心してください」

「うん…本当にありがとう。だけど、マスターって言うのはちょっと止めてほしいな」

エリミアはその言葉に困惑したような表情を見せた。

「ですが、私はマスターによって作り出された人形です。だから、マスターの事をマスターと呼ぶのは普通だと考えるのですが」

「だけど、私はエリミアに名前と呼んでほしいの。マスターって呼ばれるとちょっと…」

エリミアはそれから1分ぐらい考えて、ようやく「零香、でよろしいでしょうか」と言った。本当は敬語もいらなかったけど、それはもっと仲良くなってからでいいだろう。零香は頷いて微笑んだ。エリミアは「気をつけないと、マスターと呼んでしまいますね」と苦笑していた。零香はエリミアの頭をゆっくりと撫でた。

「よしっ、あんた。これを受け取りな」

考え事が終わったのか、パルサーシャは零香の目の前に、エルドの入った小さな袋をさしだした。零香はそれを受け取ると、中身を少しだけ確認する。沢山の金貨が入っていた。

「本当は、最初の条件はある女の子から頼まれたものでねえ、王都に住んでるんだけど、今度の祭りで最後の精霊の踊り子をやるらしいんだよ。で、その時に好きな男子に告白するっていうもんだから、アクウのネックレスをプレゼントしようと思ってたんだよ。最初はあの子の分だけだったけど、どうせならあんたもつけて参加しな。あの子の分の150エルドと、お詫びとして100エルド追加で入ってる。後の50エルドは自分で稼いでおくれ」

「あつ、あの、私参加するより見てるほうが……これはあんたを保護するための条件さ」

「忘れたのかい？」とパルサーシャは零香の前で指を振った。零香は見学するのをあきらめて、参加する事にした。さすがに見知らぬ世界で一人でいたら、何をするかわからないから。

「……わかりました。条件を全てのみます」

「よし、それじゃあ明日からがんばっとくれ！リユナ坊、部屋に案内してあげな」

「いい加減リユナ坊って呼ぶのやめてくれないか？俺はもう21だ」

「あんたは、あたいから見ればまだ坊やだよ。坊やを坊やと呼んで何が悪いのかい？」

「……もういい」

リユナミスはまたため息をついて、二階に続く階段を上っていった。零香も慌ててパルサーシャにお礼を言っつて、エリミアに剣とエルドの入った袋を預け、リユナミスの後を追った。エリミアも零香の後について歩く。零香は自分がリユナミスの上着を借りたままだった事を思い出した。

「あの、リユナミスさん」

先を歩いていたリユナミスが部屋の扉の前で止まり、こちらを振り向いた。

「なんだ」

「上着、ありがとうございました。助かりました」

零香は脱いだばかりの上着を綺麗に折りたたんで、リユナミスに渡した。リユナミスはそれを受け取ると、部屋の扉を開けた。

「ここが、お前の部屋だ。向かい側の部屋が俺、その隣がカミィラの部屋だ」

「わかりました」

零香はリユナミスの横を通り、エリミアと共に部屋に入る。そこは今朝の部屋と同じような作りだった。零香はリユナミスに「おやすみなさい」と言っつて、ゆっくりと扉を閉めた。

「…ふー…今日は色んな事があつたな…」

零香はポニーテールを解き、髪の毛を軽く梳く。エリミアはその間に、空間の狭間からカバンを取り出して、寝間着や私服などを机の上に置き始めた。零香はエリミアから寝間着を貰い、手早く着替え、ベットの中に倒れこんだ。エリミアも着替えを終えて、ベットの中に入ってきた。

「…明日から、頑張らないと…」

「無理はしないでくださいね？何か手伝える事があれば、私も手伝います」

「うん、ありがとう。明日は試したい事が沢山あるんだ。エリミアも手伝ってね？」

「はい、喜んで」

そういうと、エリミアはシーツを零香の体にかけて、自分も中に入った。

零香は明日やることを考えながら、目を閉じた。

疲れがたまっていたのか、すぐに眠りについたら零香を見ながら、エリミアは眠る前に小さく呟いた。

「……お休みなさい、お姉ちゃん」

クロツカス村1 - 4 (後書き)

評価&お気に入り登録、ありがとうございます
とても嬉しいです

早く続きの話が書けるよう、頑張ります

クロツカス村 2 - 1

まだ日が昇っていない薄暗い時刻に起きた零香は、まだ眠っているエリミアを見た後、こっそりとベットから抜けた。

(人形でも体温があったり、食事をしたり、睡眠も摂るんだ…)

不思議に思いながら、机の上に置かれていた櫛で軽く髪を梳き、寝間着から昨日貰ったワンピースに着替える。少し着るのが恥ずかしかったが、自分の私服を着るよりもこちらの方が目立たないと思っただの。目立たないためだったら、恥ずかしさは我慢できる。

いつものように膝まである髪をポニーテールにして、ゴムで結ぶ。うまく出来たか鏡で確認すると、零香は足音を消しながら、部屋の外へ出た。

そのまま、少し遅く歩きながら階段から一階を覗く。一階にはまだ誰もいなかった。

(…さすがに、起きてないか…それじゃあ、今のうちに…)

零香は自分の部屋に戻り、カバンの中から下着とタオルを取って、カバンの中に黒いパンプスが入っていることに気付いて、それを履く。そして、一階に戻り裏口の扉を開けた。

家の裏には川流れていた。遠くには木製の水車小屋が見える。まだ日が昇っていないため、少しだけ肌寒い。

零香は目の前の小川を辿りながら、村のそばにある森の中へと入っていった。

「奥に行けば、たぶん人いないよね…」

奥へ奥へ進むうちに、徐々に沢山の水がぶつかり合うような音が聞こえてきた。その方向へ歩いていくと、小さな滝と池があった。池の中の水は澄んでいて、魚達が気持ちよさそうに泳いでいる。

零香は池の水を手ですくうと、ゆっくりと飲んだ。とても、おいしく冷たかった。

零香は周りに誰もいない事を何回も確認すると、身に着けていた物を全て脱いで、池の中に入っていった。あまり深くなく、水が少しだけ冷たいと感じたが、慣れると気持ちよかった。髪を濡らさない様にお団子へアーにして、肩まで水に浸かる。

「はあ……、ん？」

零香は水の中で何か光っているのに気付いた。立ち上がり、池の中心部まで行くとそこで何かキラキラと光っていた。おもむるに、それを掴む。掴んで詳しく見てみると、形が歪だったが、綺麗なエメラルド色の石だった。ビー玉ぐらいの大きさだ。

「うわあ、綺麗……持って帰ろっ」

とてもいい物を見つけた零香は、他にもないか水中を探し、同じような石を3つほど見つけた。4つの石を自分の衣服の上に置き、また水に浸かる。

目を閉じて、周りの音で零香は癒された。

風の音 木の葉の音 鳥の鳴き声 水の落ちる音 ガシャント音が落ちる音

(…………ん？何かおかしかったような……)

零香は目を開けて、立ち上がりながら周囲を確認しようとして

「っ！？」

腰から上が出た状態で硬直した。その原因は

「……………」

上半身裸で、タオルと着ていたはずのシャツを持ったまま、こちらを見たまま硬直している人物だった。彼の足元には、長剣が鞘ごと落ちていた。最後に聞こえた音は、彼がこの剣を落とした音だろう。

「……………」

二人とも、沈黙したままきっかり1分

頭の中が活動を再開しただしたこと、今の状況を把握した零香は、顔を真っ赤にして、片手で体を隠しながら、迷わず底の石を拾い、力を込めながら彼に向かって投げた。ここまでの動作、約5秒。見事に石は、彼の頭にクリーンヒットした。バタツと彼が勢いよく倒れる。

「はあっ、はあっ……………」

零香は涙目になりながら、池から上がり、急いでタオルで体を拭きながら髪を整え、下着や服を着る。

そして、自分が気絶させた彼の傍にゆっくりと腰を下ろす。

「……大丈夫、だよね……？」

零香の目の前で気絶していたのは、昨日零香に上着を貸してくれた、リユナミスだった。

「本当に、すまない」

謝ってきたリユナミスに、零香はそっぽを向いていた。

零香は、あの後リユナミスの頭から血が出ていた事に気付いて、治療し服を着せて、気絶していた彼と荷物を持って家に戻ってきたのである。

家に戻ると、もうすでにカミイラとパルサーシャも起きていて、二人の姿に驚いて皿を落とした。零香は二人に朝の挨拶をした後、すぐに二階に上がり、彼の部屋に入ってしまった。

本が大量にある部屋の中を進み、彼をようやくベッドの中に寝かせた零香は、自分の部屋に戻るとすぐにエリミアに抱きついた。いきなり抱きついて来た主に、エリミアが「何があったんですか？」と困惑しながら聞き、零香が朝の出来事を話すと

「……少し、行つてきます」

と、満面の笑みで部屋を出て行つた。30秒後、彼の部屋からものすごく大きな音が聞こえた。零香は急いで彼の部屋の扉を開くと

「あつ」

エリミアがリユナミスに向かつて、身長以上ある大きさのハンマーを振り落としていた。

リユナミスはそれを剣で受け止めていた。

その後、音に驚いて入ってきたパルサーシャとカミィラにエリミアが連れて行かれ、今、部屋に二人だけの状態だった。

「本当に、申し訳ない」

「……本当に、そう思ってますか？」

そっぽを向いたまま、零香は遠くを見つめ、小さい声で呟いた。正直言つと、零香が異性に裸を見られたのは、アレが初めてではない。前にも見られたことはある。指で数えられる数だけ。

だけど、好き好んで見られたい人などいないだろう。いるかもしれないけど。

「本当に、そう思ってる」

「……信用なりません」

その言葉にリュナミスが肩を落としたのがわかった。さすがに、もうこの事を引き摺っても駄目だと判断した零香は、リュナミスと向き合い、少しだけ微笑んだ。

「……もう、いいです。この事を引き摺ってたら、死ぬまで引き摺りそうですから」

「ありがとう、今度何かで償おう」

「いいです。その代わり、あの時のことを記憶から消し去ってください」

リュナミスは何回も頷いた。零香はその反応に満足して、近くの椅子を持ってきて、彼のいるベットの横に座った。

「怪我、大丈夫ですか？頭に当たってましたけど」

「ああ、全然平気だ」

「それならよかったです。手加減とか出来なかったので、綺麗な顔に跡が残ったかなって……」

その言葉にリュナミスの表情が固まった。零香は彼の反応に気づかず、話を続ける。

「リュナミスさんって本当に綺麗ですよ。髪を長くしたら、女性と見間違えるぐらいに」

グサツと何かが無視に刺さった音が聞こえた気がした。が、無視する。

「今のままでも男性って事を言わないと、女性にしか見えないと思います。初めて会った時も、声でようやく男性ってわかりましたから。人を観察するのは得意なのにな……」

グサツグサツグサツと追加で刺さる音が聞こえた気がした。が、それも無視する。この様子をカミイラやパルサーシャが見たら、後でリユナミスに慰めただろう。

「それに、昨日リック君が騎士様って呼んでたのに今朝のアレ。少し……想像より弱いなって思っちゃいました」

今までの零香の発言に何も反応を返さなかったリユナミスが、最後の言葉に反応を示した。

「……ほう、そこまで言うのか……」

表情は笑っているはずなのに、リユナミスの背中から黒いオーラが見える。

突然、背筋に寒気を覚えた零香は、

(何か…悪い事でも言ったかな?)

と、内心慌てた。

「あの、私悪い事……」

言いましたか?と言おうとした零香。だが、言えなかった。いきな

り剣を抜いて、自分に向かって振り落としてきたのを、瞬時に近くの燭台で受け止める。そのまま剣を受け止めながら、零香は慌ててリュナミスに声をかける。

「いきなり、何するんですか！？危ないじゃないですか」

「俺は騎士だ。いきなり弱いと言われて、許せるほど俺は心が広くない」

「あつ、そこに怒ったんですか」

その言葉に、怒りをあらわにしたリュナミスは剣に込める力を強くした。零香はピクリともしない。

「男としてのプライドも傷つけられた。それも年下の女にな」

「私は事実を述べただけです。それに褒めたんですよ？」

「俺には褒め言葉に聞こえなかった」

事実、リュナミスは男性も女性も虜にするような美貌の持ち主だった。それに加え、体一つ一つの仕草は色香を纏っている。それに昨日の帰り、見かけた女性全員は頬を染めながらリュナミスに悩ましげな視線を向けていた。男性も似たような視線だったのを覚えている。自分に向けられた視線の事には気づかずに。

朝、零香が硬直したのは、そんなリュナミスの姿に見惚れていた事と、いきなり現れた異性に驚いたのが重なっただけだった。

なかなか剣に込める力を弱めてくれないリュナミスに、零香はため息をつきながら、賭けをする事にした。

「よつと」

燭台で剣を受け流し、彼の腕を自分に近づける。そのまま、燭台から手を離し腕を掴んで、

「はっ？」

彼が驚いているうちに、彼を抱きしめた。零香は彼の背中をポンポンと優しく叩きながら、駄目だったかな、と思った。

よく、妹と喧嘩したときはこうやって仲直りしたのを思い出して、それを実行したのである。実際、妹にこれをするとおとなしくなってくれたし、あの人と喧嘩した時はこれで仲直りできたのである。

零香は少し心配になりながら、背中を擦ると、彼の肩から力が抜けたのがわかった。

「……………落ち着きました？」

零香がそういうと、リユナミスの頭が零香の肩に乗った。零香はホツとしながら、体を離そうとしたが、反対に抱きしめられて動けなくなった。零香は驚きながら、顔を真っ赤にした。

(うわ、リユナミスさんっていい匂いするな…って違う！何でこんな事に！？心臓が痛いっ)

やった後で後悔した零香だった。

「…リユナミスさん？」

おそろおそろ彼の名前を呼ぶが返事が返ってこない。落ち着いて、

彼から体を離そうとすると簡単に腕から抜けられた。

「……………」

様子がおかしいのに気づいた零香は、とりあえず手で彼の体を押し
てみた。簡単に体はベットに倒れた。数秒待っても、ピクリとも動
かない。零香はリュナミスの顔を覗き込んだ。

「…蒼白…口から血出してるし」

ふむふむと顎に手を当てながら、零香は冷静に

「カミイラとエリミア呼んで来よう」

と言つて部屋を飛び出した。

その後、カミイラ達と戻ってきた零香は事情を説明して、リュナミ
スの治療をしてもらった。事情を説明した時、エリミアが勢いよく
零香の肩を揺さぶつて

「それ以外は何もされなかつたんですよね?! 本当に、何もされな
かつたんですよね?!」

と取り乱して何回も聞いてきて、零香は困りながら頷くしかなかつ
た。カミイラは、横で小さく「お兄ちゃんの悪い癖が…」と呆れな
がら、リュナミスに治癒魔法をかけた。

その後、リユナミスが零香の傍に行こうとしたり、話しかけようとした時、必ずエリミアが睨みつけてくるようになったのは、その日の朝御飯からだった。

「零香をあんな男に軽々しく渡すつもりは、全くありません。最初から渡す気などありませんでしたけどね」

零香は、決意表明したエリミアの姿を見て、ただ苦笑いを浮かべるだけだった。

クロツカス村2 - 1 (後書き)

兄からの提案で、王道パターンを真似てみましたw

クロツカス村2 - 2

朝御飯を食べた零香は、昨日考えていた事を実行するため、自分の私服を3着と今朝手に入った4つの石を持って、家を出た。エリミアもエルドの入った袋を持ってついて来る。彼女と同じぐらいの大きさの袋を軽々と片手で持ち上げて歩く姿に、愛らしさから零香は少しだけ癒された。

二人は村の広場を抜け、目的の場所へと向かう。

昨日零香が見つけた、可愛い看板のお店が最初の目的地だ。

丁度よく、店の中から女の人が出てきて看板の位置を直していた。キラメル色の髪を一つに結んで、背伸びをしながら看板を直しているのを遠くから二人は眺めていた。

傾いていた看板の位置をようやく直した女性は、こちらに気づくと優しく微笑んで声をかけてくれた。

「もしかしてお客さんかしら？」

ゆつたりと話しかけてきた女性に二人は返事の代わりに頷いた。

女性は店の扉を開いて「どうぞ、お入りください」と言ってまた微笑んだ。零香とエリミアは礼をしながら、店の中へと入っていった。以外に店の中は広く、中には沢山の変わったデザインの女性物の服や男性物の服、小さい子供が着るような服のほかにも色々な小物や雑貨品が置いてあった。

「ごめんなさいね、お待たせしちゃったみたいで」

「いえ、そんなに待ってませんから」

女性は扉を閉めながら、零香達の横を通り抜けカウンターを挿んで

話しかけてきた。

「少し品揃え悪いけど、ゆっくり見て行ってね」

「はい、わかりました」

零香はカウンターに荷物を置くと、エリミアを腕に抱えて店の中を見て回った。

奇抜なデザインのドレスや色々な角度から見ると色を変えるピンを見たり、髪につけると色が変わる髪飾りを着けてみたり、装飾が沢山施されているのに羽の様に軽い衣装を着てみたりと零香は違う世界の文化に興味津々だった。

零香はここに来た目的を忘れて、心から楽しんだ。

30分ほど店の中を見て回ると、零香は満足してカウンターで本を読んでいた女性に声をかける。

「あの、すみません」

女性は零香の声に本を閉じてカウンターの上に置くとまた微笑む。

「ほしい物決まった？」

「あつ、それもあるんですけど少し聞きたいことがあって」

「何？」

「買取とか…できますか？」

「ええ、服に関係している物なら大丈夫よ」

零香はそれを聞いて、カウンターに置いていた服を女性の目の前で広げた。エリミアもそれを手伝う。

女性は服を見るなり、すぐに手にとって伸ばしたり全体を確認した。

「この3着を買取してもらいたいんです」

女性は3着を丁寧に確認すると、綺麗に畳んでカウンターに置いた。

「生地も頑丈だし、保温性も高そうね…全部買い取れるわ」

女性はカウンターの下から小箱を取り出すと中から白い小さな袋を4つ取り出した。

「とてもいい物だから、3着合わせて800エルドでいいかしら？
この袋に200エルドずつ入ってるわ」

予想外の金額に零香は驚いた。女性は「これじゃあ、ご不満だったかしら」と言ってもう一つ袋を取り出そうとしたが、零香は「いえ！もう、十分です。多すぎるぐらいです」と言って断った。

零香は大体1着50〜100エルドぐらいで予想して余裕を持って3着しか持ってこなかったのだが、予想外の買い取り価格の高さに驚いた。

「こんなに貰っていいんでしょうか…」

「いいのよ、私も珍しい服を見ることが出来て少し嬉しかったわ。
それに昨日のお礼をさせて？」

「？私達初対面ですよね、お礼って…」

その言葉に女性は少しだけ驚いた表情になって手を頬に当てた。

「あら、あの子っいたら紹介してないのね」

そういうと女性は立ち上がり、零香に軽く会釈すると

「初めまして、私はリックの母親のアミュエル・トーニャ。昨日は息子と遊んでくれたそうで…ありがとうございます」

そう言つて笑みを浮かべた。

零香は昨日会つたリックと今日の前にいるアミュエルの顔を頭の中で見比べてみた。考えてみると、リックの瞳は彼女と同じ青色で彼女の大人しそうな面影がリックにあるのがわかった。

零香は彼女がリックの母親である事に納得したが、その名前に聞き覚えのある単語があることに気が付いた。

エリミアも気づいたらしく、彼女が質問をした。

「もしかして、貴方はアラトエル・トーニャさんの奥さんでしょうか」

「ええ、そうよ」

「じゃあ、ここは…アミュエルさんとアラトエルさんのお店なんですか？」

アミュエルは奥にある扉を指差して

「裏がアラトの店兼工房。少し場所があればいいからって、狭いほうの部屋を使ってるわ。私は余った部屋の壁を壊してもらって、趣味でこの店をやってるの。家は別だけどね」

と説明をしてくれた。

「今ならお客さん誰もいないと思うから、ゆっくりと選べると思うよ」

「普段は沢山女性のお客さんが来てうるさいのよねえ……」とため息を付きながら、彼女はカウンターに置いていた小箱と零香の持ってきた服を下に置いた。

少しエルドを受け取る事に戸惑っている零香にニコリと微笑みながら、アミュエルは零香の手のひらにエルドの入った袋を乗せた。

「私達はいつも仕事であの子と遊んであげられないから……仲良くしてあげてね」

「…はい」

零香は頭を少し下げたまま袋を握り締めると、今さっき店の中で見つけた物を持ってきてカウンターに置いた。買おうか悩んでいた物だったのだが金銭的に余裕が出来たので買うことに決めた。零香が持ってきたのは、少し分厚い生地で作られたベージュ色のフード付きコートと二つの赤いリボンだった。

「これ、買います」

「もう使うの？アラトの方で使うのかと思ってただけど」

「お金はまだ十分あるはずですから」

少し自信なさげに答える零香にアミュエルは苦笑しながら「全部で

「240エルドね」と答えた。零香は握っていた袋を一つ置いて、エリミアが40エルド置いた。アミュエルはエルドをきちんと数える
と「確かに」と言っつてコートとリボンで零香に渡した。

零香は渡されたコートを腕にかけ、リボンを持つとエルドをまとめて腕に抱えているエリミアを腕に抱えた。エリミアは大人しく零香の体に寄りかかった。

「それじゃあ、今日はこれで失礼します」

「今度は家の方にも来て頂戴。歓迎するわ」

そう言っつて手を振るアミュエルに零香は礼をして外に出た。

そのままアラトエルの店に行こうかと思っつたが、その前にやる事があるのを思い出した。

「エリミア、ちょっと降りてくれる？」

零香が腕を地面に下ろしながら言っつと、エリミアは不思議そうな顔で見つめてきた。

零香はエリミアの背中に回るとその金髪を二つに分けて、買っつたばかりの赤いリボンでツインテールに結んだ。エリミアは驚いた表情で自分の髪を持ちながら振り向いた。

「エリミアに似合うかなっつて思っつて買っつたんだ。かわいいよ」

笑顔でそう言っつと、エリミアは少し照れながら「…ありがとう、ございます…」と小さな声で呟いた。心がキュンツとした。零香はエリミアにコートを保管してもらっつと、また腕に抱えて歩き始めた。時々横を過ぎていく村の人や子供達に挨拶をしながら、零香達は村の中を色々と歩き回った。途中お腹が空いたから色々な食べ物を買

っている店で4つほど小振りのパンを買って二人で食べた。
村の中を歩いて観察してよくわかったことがある。

女性が数人しかいない。

そして、やけにイケメンな人や美女が多い。

「……………どこかの本とかゲームの世界ですか…？」

零香は小さな声でポツリと呟いた。

零香は昔から変わり者の親友に色々な物を教えてもらっていて、なんとなくそう思った。

その親友はよく家にゲームを持ってきて一緒にやったり、内容が大
人向けの本を持ってきてそれを無理やり目の前で音読し始めたりす
る人だった。

ある時は泊りがけで零香に無理やりホラーゲームを暗闇でやらせて、
本人は布団の中で震えながら見て朝まで過ごしたり、ある時は俗に
言うBL本やGL本を持って家に押しかけてきてその本の事につい
て語ったりと少し迷惑だった。

だけど、彼女と過ごす時間はとても楽しかった。

変な知識を植えつけられていた様な気もしたが少し面倒だなと思っ
た事もあるが、彼女が楽しそうに話している姿は零香にとってとて
も眩しく見えた。

彼女の兄と妹が親の車で迎えに来るたびに、彼女の事を羨ましく思
った。

自分が昔に失った「家族」と幸せそうに話す彼女を見るのが少し怖かった。

同じように彼女から幸せを奪ってしまうのか、自分の存在が怖かった。

「…おねえちゃん！」

自分の名前を呼ぶ声に零香はハツとなると軽く頭を振って、自分を呼んだ子供に手を振る。

この子供は昨日零香の近くに座っていた一番齡の低い男の子だった。その子はパアツと顔を明るくして大きく手を振り返した。その子の横には親だと思つ男性が軽く会釈をしながら微笑んでいた。零香も慌てて会釈を返し、微笑んだ。

何故か周りの音が途絶えた。

歩く音や話す声がピタリと止んだ。

「……えっ？」

零香は驚いて周りを見渡す。皆、ある方向に視線を向けていた。零香は同じように視線の先を辿って見ると、遠くから馬に乗って数人の男が来るのがわかった。

もう一度村人のほうを見ると、皆怯えたような目を男達に向けていた。

「……誰……？」

「その人！早く隠れなさい！！」

目の前の男性からいきなり悲鳴に近い声で呼ばれた零香は戸惑い思わず体を硬直させてしまった。腕の中にいたエリミアが何度呼びかけても自分では動こうとしていないのに、足が動かない。

「騎士様やパルさんがいない時に来るなんて！！早く、見つかったしまっわー！」

「あっ……」

混乱するばかりで何がなにやらわからない零香は女性に引き摺られるようにして家の影に隠れた。他の人たちも店の中に逃げ込んだり家に戻った。数分後には村人たちは広場からいなくなった。

「……あの、これはどういっ……」

「しっ。気づかれるから喋らないで」

そういわれて零香は口を手で塞ぎながら、広場のほうに顔を出した。広場にいたのは数人の男と小さい男の子。男達は零香と同じ年ぐらいいに見えた。

男達は馬に乗り綺麗な服を着て腰に豪華な装飾品のついた剣をつけているのに対して、男の子はぼろぼろの衣服を纏い体はやせ細っていた。

その首には茶色い首輪のような物が見えた。

「あいつらはこの領主様の息子とその友人達とかわいそうな奴隷。領主様はとても優しい人なのに、あいつらはこの村に来るたびに物を壊していつたり何か奪っていくんだ。ある時は妻を目の前で攫われた人もいた。返してもらおうとしてあいつらに逆らおうとするとその場で首を落とされた人もいた……。たぶん今回はあんたの噂を聞いて来たんだろう。見つかったらどうなる事か……。騎士様がいればあいつらは来ないのに……」

そう言ってお守りのような物を手で握りながら、悲しそうにそして悔しそうな表情を浮かべた女性を見ていた時、突然ドサツという音が聞こえた。

続いて聞こえてきたのは男性の怒声だった。

顔を広場に戻すと、男達の内3人が倒れた男の子の周りを囲んでいた。

「おいっ！いきなり倒れるんじゃないよ！！」

男の内一人がそう言いながら男の子の体を踏みつける。男の子は直に受け、口から軽く血を出しながら震えていた。その光景に思わず腕の中のエリミアをきつく抱きしめた。目を背けようとしたが何故か目が離せなくなっていた。

「…もうし、わけあ、りません…」

か細い声で謝りながら立ち上がりかけた男の子に男が蹴りを入れ、男の子の体が飛ばされた。零香は思わず小さな声で悲鳴を上げた。

(ひどい……っ)

「ちっ、使えないやつが」

「おい、そろそろあの女探そうぜ」

「ああ、そうだな」

男達は馬に戻ると男の子を放置して村の奥の方へと馬の向きを変えた。村の奥にはパルサーシャ達の家がある。そして、今その家にはカミイラしか残っていない。他の二人は「近くまで来ている王子を迎えに行く」と言って朝御飯の後出かけていったのだ。

「カミイラちゃんが危ないよ！あいつらあんたがカミイラちゃんの家にいるっていう事を知ってるんだ」

隣の家の裏に隠れていた村人がそう叫んだ。

「なんでっ」

「子供達さ。子供達があんたがあの家から降りてきたって大声で言っていたんだ。その時ちようどあいつらのうち一人が村の近くに来ていたんだ！！俺は見たぞ！」

零香は恐怖を感じた。だけど、恐怖より先に体が動いていた。

「あなた！今行ったら危ないよ！」

そう言ってきた女性を振り切り、零香は広場に出た。広場から男達の姿が遠目でわかる。

「エリミア、あの子をお願い」

「零香はどうするのですか！？」

エリミアを地面に下ろしながら、零香はそういうとすぐに男達を追いかけた。エリミアに後ろから名前を呼ばれたが、それどころではなかった。零香は途中で店先に置いてあった丁度いい太さの棒を掴んで走った。ある程度の距離で止まり、体が隠せるところにサツと移動して家のほうを見る。

「あの女はどこだ！！さっさと見え」

「そんな女の人なんてこの家にはいません。どうぞお帰りください」
カミイラは家の前で手を震わせながら、だが表情だけは凜として男達と向き合っていた。男達は一人を除いて馬から下りていて、今さつき男の子を蹴った男がカミイラの首に剣先を当てていた。

「俺は知ってんだよ！この家に黒い髪の女が住み始めたってな！！」

「だから、そんな人はこの家にはいません。さっさと帰って」

「いい度胸だな…隠し立てするなら容赦しねえぞ！！」

そう言つて男が剣を上振り上げた。零香は物陰から出てその男の頭に向かつて持つて持っていた棒を投げた。棒は見事に男の後ろ頭に当たり、男は剣を手から落としそのまま倒れた。

「誰だ!!」

一斉にこちらを向いてきた男達は剣を抜いて臨戦態勢をとつていた。零香は恐怖より怒りを覚え、男達に向かつて冷たい声で話しかけた。

「貴方達が探していた人です」

「レイカ…なんで？」

目に涙を浮かべながら震えているカミイラに零香は「もう大丈夫だからね」と優しく声をかけ、男達に近づいた。

「私に用があるんでしょう？」

零香はカミイラに剣を向けていた男の目の前で止まり、笑みを浮かべた。

その笑みは男達を魅了するには十分すぎたようで、男達はそのままの体勢で目だけは零香を見つめていた。零香は右手に拳を作り笑みを深めた。

「その前に一発殴らせてくださいね」

「はっ？」

返事を聞く前に零香は右足を後ろに下げ、勢いよく目の前の男の鳩

尾に拳をめり込ませた。

男はその拳を受け止めれず、家の壁に背中をぶつけズルズルと座り込んだ。

「カミイラに剣を向けたお礼と村の人たちの分を、お返しします」

零香は手を払いながら、カミイラを背で守るようにして男達を睨みつけた。

カミイラは零香の背中を見つめながら心の中で思った。

普段大人しい人を怒らせたら怖い…と。

クロツカス村2 - 2 (後書き)

零香は普通の人より筋力はあるほうです(わずかですが)

色々和本を読んで見よう見まねで護身術も覚えていきます

前回のお話でリュナミスの剣を受け止められたのはこれのおかげです

その代わりに体力は少ないです。

クロツカス村 2 - 3 (前書き)

・最初シリアスなのに、後半ギャグです

「先ほども言いましたが、私に用があるのでしょう？カミイラには用は無いですよね」

零香は壁に倒れていた男を啞然としたまま立っている男達の方へ投げて、表情は笑みを浮かべたまま言った。男達は無言で頷く。

「カミイラ、家の中へ」

「でもっ」

「大丈夫だから安心して。今日の晩御飯でも作って待ってて、楽しみにしてるから」

零香が優しく微笑みながらそういうと、カミイラは「…わかった。待ってるからね？」と言って家の中へ入った。零香は扉が閉じるまでカミイラに手を振る。扉が閉まると零香は男達を睨んだ。男達はその視線にビクリツと肩を震わせたが、すぐに怒りの表情になった。倒れて気を失っていた男も目を覚まし、零香の首元に剣先を突きたててきた。内心驚いたが、顔には出さない。

「お前、俺達が誰かわかってやったのか」

「貴方達のような人なんて知りませんし、知りたくもない」

そういうと剣先が皮膚に触れて少しだけ痛い。血が出ているのかもしれない。だけど視線は目の前の男を睨んだままだった。

「生意気だな。アイツみたいに体に教えつけてやるうか？」

男の子を踏みつけ、蹴った男がいきなり零香の腕を掴み顔を近づけてきた。あの子供の顔が頭に浮かび、零香は掴まれた腕を払い落とす。

「アイツとはあの広場の子供のことですか」

男達はニヤニヤと不快感を与えるような顔を浮かべながら「そうだと答えた。」

「何故あんな小さな子供にあんな事をするんですか」

「アレは俺達の所有物だ。所有物をどう扱おうと勝手だろう？」

「あの子にも意思はあります」

「意思なんて関係あるもんか。アレは物だ」

男は笑いながら零香に「お前もアイツと同じ俺達の物になるんだよ。光栄に思え？」と耳元で囁いた。背筋が冷たくなり、零香は首に深く傷がつくのを無視して男達から離れた。首を右手で押さえながら零香は笑い続けている男達に凜とした表情で答えた。

「貴方達の物になるなんて、死んでも嫌です。権力を私利私欲のため
に使う人は嫌いです。」

……それ以上に……奴隷だとしてもその人の意思を無視する人の
物になど、なりたくない」

その言葉は男達の怒りを爆発させるには十分だったようだ。

男達は腰につけている剣を抜き、いきなり襲い掛かってきた。零香
はそれを避け、広場の方へ全速力で走った。後ろを時々振り返ると、
男達は馬には乗らず走って追いかけてきていた。男達が馬に乗って
追いかけてきてない事と足が遅い事に心の中で感謝すると、零香は
広場の中心にある井戸の目の前で止まった。周りを確認してあの男
の子がいないのに気が付くとエリミアに心の中で礼と謝罪の言葉を
思い浮かべる。そして、昨日考えていた事を実行する。
まず、瞳を閉じて頭の中で『あるモノ』を思い浮かべる。
すると、自然と体から力が湧き上がって来るのがわかる。ここまで
は思っていた通り。零香は瞳を開け手を追いついてきた男達の方へ
向ける。そして、唱えた。

「束縛せよ」

瞬時にそれは現れた。

地面が一瞬揺れたかと思うと、男達と零香の目の前に土色の巨体の
人形が地面から現れた。体長は10m以上はあるだろう。零香が思
い浮かべたのは、ある話では脅威の怪物、ある話では遺跡の守護者
『ゴーレム』と呼ばれる人形だった。

ゴーレムは自分を創った零香に視線だけ向けるとゆっくりと歩き出
した。男達はいきなり目の前に現れたゴーレムに怯え、腰を抜かす
者もいた。ゴーレムは自分に一番近い男の体を片手で簡単に持ち上

げると、恐怖で涙を流す男の顔をまじまじと見つめた。

「なっ、なんでお前なんか魔法を使えるんだよ！俺でさえ出来ないのに」

ゴーレムの傍で懸命に仲間を助けようとしている男は零香にそういった。零香はその言葉にただ何も答えず、ゴーレムに次の命令をだした。

「他のやつも捕まえて」

ゴーレムは命令を聞くともう片方の手でもう一人捕まえる。じたばたと暴れる男の襟を掴むと零香が予想していなかった行動をとった。

「えっ？」

ゴーレムはそのまま自分の顔の上まで男の体を持ち上げ、口？を開いて男を飲み込んだのである。その行動にその場にいた全員が硬直した。

ゴーレムは男を綺麗に飲み込むと、最初に捕まえた男も飲み込んだ。男はなすすべなくゴーレムの体の中へと姿を消した。

「うっ、うわあああああ！」

腰が抜けた男が悲鳴を上げる。そして体を震わせながら持っていた剣でゴーレムを切った。だが、ゴーレムには傷一つ付かなかった。男はその場に剣を落とし、恐怖が感情を埋め尽くし逃げ出した。零香は混乱し後ずさりしながら体を震わせていた。

（なんでっ…！）

自分で自分の体を抱きしめながら零香はその場に座ってしまった。何も考えられない。零香は残っていた男達に視線を向ける。男達はゴーレムを見ていた。その表情に恐怖というものはなかった。

「へえ、珍しい。魔術師でそれも女か。魔力も俺以上有るようだし……いいな」

そう言ったのは男の子に暴力を振るい、零香を同じようにするといった男。

「久しぶりに刃向かう奴が出てきたな。これは楽しめそうだ」

そう言って笑ったのは、零香の首に剣先を突き刺してきた男。

「……」

今まで一言も話さず、状況を遠目から見ていた男。

零香はゴーレムよりもこの男達のほうが恐ろしいと思った。

仲間をゴーレムに食べられてなお、恐怖ではなく興味を示した男達を。

「グオ」

「やつ……」

零香はゴーレムが自分の傍に来ていたことに気づかず、不意をつかれて捕まってしまった。しまったと思つて、手から逃れようと必死に体を動かそうとするがビクリともしない。

「やめて！」

そう言ってもゴーレムは止まらず、その口を開き零香の体を高く持ち上げた。

零香は自分もあの男達と同じ様に食べられてしまうのかと思うと、自然と目から涙が出た。だが、ゴーレムの口の奥に見えた物に零香は驚いた。そして、零香の体から手が離れた。

零香は驚く男達を見ながら、綺麗にゴーレムの口の中へと消えていった

その表情に恐怖はなく、ただ優しげに微笑んでいた

一方その頃

リュナミスとパルサーシャは村で今何が起きているのか知らず、王子を迎えに行くために馬を走らせていた。リュナミスにとって自分で走るほうが速いのだが、魔力をあまり消費すると何日間も眠らなくてはならないため、仕方なく馬に乗っていた。

「もうそろそろか？パルサーシャ」

もう一頭の馬に乗っているパルサーシャのほうへ目線だけ向けながらそういった。

パルサーシャは片手に王子からの手紙を持って手綱を引いていた。

「ああ、あと少しで騎士団のテントに着くよ。久しぶりだねえ、リュナ坊の部下を見るのわ」

パルサーシャがそう言って前を指差した。リュナミスはそのほうを

目を凝らしてみた。遠くに白いテントのような物が3つほど見えた。

「あそこか」

二人は歩ける距離まで馬で走ると、木に手綱をつなげテントのほうへと歩いていく。

テントの入り口では沢山の騎士と兵士達が訓練をしているところだった。

二人は邪魔をしないように横を通り過ぎようとしたが、

「あっ」

兵士の一人に気づかれてしまった。

「おい、皆！！副隊長が戻ってきたぞー！！！」

そこが大変だった。

王子のいるテントに向かおうと歩き出すたびに兵士達が群がり、

「副隊長！お帰りなさい！」

「村、どうでしたか？変わってなかったですか？」

「副隊長の住んでる村って初めて行くんです！！それで聞きたいことが」

「副隊長！かわいい女の子っていますか！？できれば独身がいいんですが！」

「カミィラちゃん置いてきたんですか、残念だなあ」

「カミイラちゃんをお嫁にくださいー!!」

と色々と質問を投げかけてくるのだ。答えられる限り答えるが、女関係は「知るか」と言っただけでやり過ぎ、カミイラ関係の質問をしてきた奴には睨むか頭に拳で一発殴る。

妹は誰にもやらん。

こう言うと以前「妹馬鹿だー」とか「シスコンだ!」とか最終的には「副隊長ってロリコンなんですね〜」と言われたため、その言葉だけは胸にしまっておく。

その時は怒りで隊の半分以上の兵士を素手でボコボコにしてしまい、怪我を負わせてしまいその後の任務に支障がでてしまったため、自分でも少し反省しているのだ。

パルサーシャもリユナミスと同じ様に兵士達からの質問に答えていた。

パルサーシャはこの兵士達と、とても仲がいいのだ。この隊の兵士達と騎士達は大体が10代から30代で、青年が多い。3人ほど回復役として女性魔術師がいるが、それ以外は全て男達だけだ。パルサーシャは「リユナミスがお世話になってるんだから…」と昔から物資を自分で送り届けてくれる。男達には特に優しいパルサーシャは隊の人気者だった。

「パルサーシャさん、少し聞いてもいいですか?」

「ん、なんだい?」

兵士の一人に引き止められたパルサーシャは、真剣な表情で何故かこちらを見てくる兵士に子供のような好奇心溢れる目で見つめていた。

(……嫌な予感がする)

「あの、パルサーシャさん。実は副隊長の事で質問が」

「わかった。で、なんだい？」

「副隊長って女性が嫌い……というより苦手じゃないですか」

その言葉に周りの兵士達がうんうんと頷いた。

本人もそれのため息を出した。女性は昔のことがあって、今では任務じゃない限り触る事ができないのである。家族であるパルサーシャとカミィラを除いて。

「うん、そうだねえ」

「あの、パルサーシャさんから見てですけど……副隊長って結婚できるんですかね」

女装趣味を持つてるお前に心配されたくない

その兵士にそう言いたかったが、リュナミスの周りを囲っている兵士達が次々と質問を言ってきたのでそちらを対応した。

パルサーシャはニマニマと嬉しそうに笑うと、その兵士に言った。

「レイカちゃんに一目惚れしちゃったからねえ、できるんじゃないかねえ」

リユナミスはパルサーシャの言葉に勢いよく口から噴出した。

「ちよつ、大丈夫ですか!? 顔、ものすごく赤いですよ!？」

いきなり噴出して、咳き込んでいるリユナミスに兵士達は驚き心配して声をかけてきた。リユナミスはそれを手で「平気だ」と伝え、心を落ち着かせる。

「げふつ、ごほつごほつ……いきなり何を言ってるんだ!！」

顔を真っ赤にしてパルサーシャに向けて叫んだリユナミスを見ながら、満面の笑みでリユナミスを見無視して、彼女は話を続けた。

「だってねえ、あたい達以外は普段触れないはずなのにあの子には普通に触れるんだよ?それに、あの子と話してる時、いつもは無愛想なあの子が微かだけど笑ってるんだよ。リユナ坊自身は気づいてないだらうけどねえ。バレバレなんだよねえ」

「へえ〜」

リユナミスは微かに口を開けたまま、思考を停止した。パルサーシャはさらに追い討ちをかける。

「それに、昨日の夕方ごろだったかねえ。「あの子が消えた!」ってカミィラが言った途端その子はね、今まで見たことがないよう

な真剣な顔で家を飛び出したんだよ。あの時は面白かったねえー。飛び出したまでは良かったけど、レイカが花畑で子供達に囲まれて眠ってるのを見てね、こう言ったんだよ」

いつの間にかパルサーシヤの周りに沢山の兵士達が取り囲んでいた。兵士達は興味津々で「なんて言ったんですか？」と何回も問いかけた。

リユナミスはハツとして話そうとしているパルサーシヤを止めようとしたが、遅かった。

「小さい声だったけど少し笑いながら『かわいいな』って言ったのよ。リユナ坊って昔から女性を褒めるなんて仕事ぐらいでしかなかったはずでしょう?」

「…そういえば、そうですね。結構付き合い長いですけど、仕事以外で副隊長が女性を褒めてるの見たことないですね」

その言葉に周りの兵士達も「俺も見たことないな」「僕も」「俺も」と賛同した。

「だろう?カミイラも今まで初めてリユナ坊が女性を褒めてる所を見て、驚いてたよ。カミイラも言われた事が無かったらしいよ。それでわかったんだよ。『ああ、惚れてるんだな』ってね。あたいから見ても綺麗な子でかわいいのよねえ。優しいし面倒見もいいし、スタイルもいいし家事は全部できるって言ってたわねえ」

その言葉に兵士達は「おお〜!!」と声を上げた。
ある兵士が手を上げて「もつと詳しく教えてください!!」と大声で言ったので彼女は零香の事を自分が知っている限り、話すことにした。

リユナミスの反応が面白いからという理由だけで。

「レイカはねえ、男性も女性も魅了するような容姿を持ってるんだよ。例えるなら清楚なお姫様っていう感じさ。だけどただのお姫様じゃない。ちゃんと自分でできることはきちんと最後までやらないと気がすまないっていう、自分から行動するお姫様だね。意思も強いし、なにより実力がある。リユナ坊の剣を簡単に受け止めるほどにね、それも燭台で」

兵士達は驚いた。

「簡単につて…副隊長は王と王子の次に実力が高い人ですよ!?力も強いし、魔法も使える。国一番有能な人で、国一番変わってる人で、ロリコンなのに」

おい、今聞き捨てならん事を言ったぞ。他に人がいなかったら斬り捨ててやるうかと思っただぞ

「ははは、それは実際あの子に会って見たらいいんじゃないかい？ どうせあんた達、家に泊まる事になってるんだろっ？」

パルサーシヤたちが住んでいる家は実は部屋が沢山あり、その部屋を使つて宿屋を経営しているのだ。一部屋4人泊まるという計算で考えると、ざっと200人は泊まることができる。もし、それ以上の客が来た場合には隣の空き家を借りているのでそこに泊まってもらう事になっているのだ。

今回は王子の警備だけなので大体兵士が40人、騎士が5人、女性魔術師1人、王子とその執事ぐらいしかいない。

わざわざ村の近くでテントを張つて泊まるぐらいなら、宿に来てもらつたほうが王子の警護がしやすいだろうというリユナミスの提案だった。

「あの子身寄りがなくてね、一緒に暮らしてるんだよ。今日の夜、家の前で皆を出迎えてくれるって言つてたねえ。カミイラも一緒に」

その言葉にすぐさま兵士達は大忙しになった。

旅をしていると毎日風呂に入れない。今回も王都から2週間かけてゆっくりと他の村を訪問しながら歩いてきたのだ。もちろん服はものすごく汗臭い。

男達全員、女性魔術師に頼んで大量の水を出してもらい体と服を懸命に洗い始めた。

慌しくテントを行き帰りしている兵士達を見ながら、リユナミスはため息をついた。

パルサーシヤはニヤニヤと楽しそうに笑いながら、兵士達を見てい

た。

「そういえば気になったんですけど、その…レイカ？っていう子。何歳ですか？」

まだ知りたい事があるのか、質問をしてきた女装が趣味の兵士がパルサーシャにまた質問をした。パルサーシャはその兵士を見ず、まだ走り回る兵士達を見ながら答えた。

「ん？ああ、そういえば言っていなかったねえ。あの子、今15歳らしいよ。カミイラと2つ違い。だけど、見た目も性格も大人って感じだね」

ピタリと兵士達がその場で停止した。

そして、皆満面の笑みでパルサーシャの傍に来ると

「「「「一週間、よろしくお願ひします！！！！！！」」」」

全員そろって頭を下げた。

リユナミスは呆れて言葉が出ないのと同時に

兵士達の練習メニューを4倍にする事を決めた

（さつさと帰ってアレを渡すか…）

リユナミスは馬の背に載せた荷物を少し見て、もう一回ため息をつく
くとまだ遊び足りない様子のパルサーシャを引き摺りながら王子の
いるテントの中へと入っていった。

クロツカス村2 - 3 (後書き)

次のお話は完全にシリアスにしようと思います。

あっ、でも最後にギャグを少し入れるかも……

女装好きの兵士の案を出したのは兄ですw

クロツカス村2 - 4 (前書き)

少し予定より更新が遅れて申し訳ありません！

そして、いつの間にか3000アクセス超えてた…。(・・;))

見てくださった方々、ありがとうございます!!

これからも頑張ります!!

「おいおい、あの女自分のゴーレムに食われたぞ？」

「それも俺達に笑いかけると、余裕の表情だったよな？何なんだ、
いつたい」

「……」

零香がゴーレムに飲み込まれるのを見ていた男達は、それぞれ自分の武器を構えながらゴーレムと対峙していた。ゴーレムはこちらを見ながらその場に停止していた。だが、その二つの瞳はあらゆる方向を向いていた。男の内一人が自分の槍を手で回しながら隣の男に話しかける。

「で、どうする？あのゴーレム倒して中身引きずり出すか、そのまま放置しておくか」

「そんなもの、最初から決まってるだろ」

両手に剣を持った男は満面の笑みで答えた。

「倒して中身を引きずり出す」

槍を持っている男は頷きながら、笑みを浮かべる。

「そう思ったよ」

二人はそれぞれ槍と剣を構えるとすばやくゴーレムに斬りかかった。ゴーレムは二人の攻撃を両手で受け止め、跳ね返す。二人同時に地面に着地すると剣を持っている男は背後にまわり、ゴーレムの足を片方斬りおとす。ゴーレムの体が傾く。それを逃さず、もう一人の男が下に潜り込む。

「おっと、まだ楽しませてよ？」

槍を軸にゴーレムの体に蹴りを入れる。だが、予想外に硬く足の反動が強い。

ゴーレムは下に潜り込んだ男の足を掴むと剣を持っている男のほうへ投げた。

「予想どおりだな」

剣の男は槍の男の足を剣で受け止め、力を込めて跳ね返す。槍の男は簡単に飛び、ゴーレムの肩に飛び乗り槍を刺した。

「邪魔な腕は斬り落とさないかね」

そのまま力任せに下へ切り裂いた。ゴーレムは片腕片足でフラフラ

しながらも、腕を振り回し地面に降りた男の体に拳を入れる。

「ぐあっ！」

拳は見事に命中し、槍の男は少し血を吐きながら遠くに飛ばされた。だが、すぐに立ち上がり槍を持ってない手で口の血を拭く。その顔は笑みのような怒りのような顔だった。

「俺に傷を負わせるなんて、ゴーレムのくせに強いじゃないか」

その顔に剣でゴーレムの攻撃を防いでいた男が「手加減しろよ？」とため息を付いた。

「お前が力を使うと毎回木っ端微塵にするんだからな。中にはあの女がいるんだ。わかってるな？ミュー」

ミューと呼ばれた男は槍を水平状に持ちながら、ゴーレムのある一点を狙っていた。

「そんな事わかってるよ。さっさとコアを狙って終わらせるから、もう一本落としてよね、シェイド」

「了解した」

シェイドはゴーレムの腕を剣で弾き返し、残っていた片方の腕を切る。バランスを保てなくなったゴーレムはそのままズーンという音と共に、地面に倒れた。後はミューに任せ、シェイドは剣を鞘に収めた。

「ん、コア発見。頭を中心か……シェイド、離れて」

シェイドはゴーレムの傍から離れ、だるそうにずっと様子を見ていた男の横に立つ。

今もあくびをしながらゴーレムを見ている男にシェイドは呆れ、腕を組んでその場から様子を見守る事にした。

「風を纏え、シュナイデント」

その言葉と共にミューの愛槍『シュナイデント』に風が纏わり付く。ミューは仲間の中でも一、二を争う魔力の持ち主で、自分を魔法で強化して戦うのを好んでいた。風の魔法を得意とし、速さと風の魔法では誰にも負けたことが無い。風のように自在に槍を操り、その速さで目的の物を手に入れる彼に付いたあだ名は『疾風の槍 ミュー』。

ミューは後ろに下がり、さらに風の力を強くする。そして、槍を投げる構えになった。

「貫け、シュナイ」そこまでです』はあっ?!」

いきなり少女のような声が聞こえ、集中が切れたミューはふつつつと怒りながら周りを見渡した。シェイドも周りを注意深く見回す。

すると、いきなり倒れたゴーレムの目の前に紫色の光を放つ魔方陣が現れ、突如強い光を放ち魔方陣のあった場所に人が現れた。その顔を見て、その場にいた3人は驚いた。

「お前ら……！ゴーレムに食われたんじゃないのか？！どうやって戻ってきた」

そこに立っていたのはゴーレムに飲み込まれたはずの男達と奴隷の子供と見知らぬ少女。

そして、一人の男に抱きかかえられているあの女だった。

「その説明は後で致します。その前にレイカが貴方達に用があるそうです」

変わった服装の少女がそう言いながら、あの女の近くに歩いていった。

そして、心配そうに女を見るとこちらに手招きをしてきた。しようがなく、傍に近寄ると

「!?!」

表情をあまり変えないあの男でさえも、驚いて表情を変えた。

男に抱きかかえられていたレイカと呼ばれた女は、左腕から血を流しその場所を右手で押さえながら一呼吸するたび、悲痛の表情を浮かべていた。

よく見ると、右足からも血を流していた。

「おい、どういふことだ。これわ」

「わからない。突然、苦しそうな声を上げたと思ったらいきなり血が出始めたんだ」

レイカを抱きかかえている男がそういうと、レイカがゆっくりと目を開けてこちらを見てきた。

そして、微笑んでゆっくりと手を顔に伸ばしてきた。思わず、表情が硬くなる。顔に手が触れた。その手は異様に冷たく、まるで氷のようだった。

「……ごめん、なさい……」

そう呟いた彼女は話すことさえ難しく、一言話すだけで息が切れていた。

シェイドは彼女の様子にひどく驚いた。それは他の男たちも同じ様だった。

「……ごめん、なさい……」

「なんで謝る」

彼女はシェイドの問いに答えず、「癒し……よ、ここに……」と呟いた。すると、体全体が軽くなり自分の手を見てみると、ゴーレムと戦って負った傷が綺麗に消えていた。

「……あなたも……」

そういうと、同じ様にミューの頬に触れまた呟くと、いつの間にか

体の傷が癒えていた。ミューも驚いて自分の体を何回も確認している。

「……ごめん、なさい……」

そう言つて彼女は目を閉じ、眠りに落ちた様に見えた。あの男が彼女の傍に行き、体を確認すると「気を失っているな」と呟き、ゴーレムを一瞬見ると彼女の体に癒しの魔法をかける。その行動に男達は驚いた。

普段、この男は他人にあまり関わろうとしない。人が嫌いなのだ、と昔本人から聞いた事がある。

仲間達とも話さず、いつも遠くから興味なさそうにこちらを見ているだけだった男が自分から人に触れたのだ。

幼い時から共に暮らしてきたシエイドとミューは驚いてその背中を見つめていた。すると、男はレイカの傍から離れ、ゴーレムの傍に座るとそれに触れる。

「…肉体を共有させていたのか…」

そういつた途端、ゴーレムの体が崩れ残ったのは土の山だけだった。男は立ち上がり、手を払うとまた彼女の傍に戻る。もう一度、癒しの魔法を使うとレイカの傷は完全に塞がり、血も止まった。すると、気を失っていたはずのレイカが目を覚ました。

ゆっくりと眠そうな目で周りの状況を確認し、自分が抱きかかえられている事に気がつくとすばやくその腕から降りた。その顔が何気に赤くなっているのに気づいたのは、治療した男と男の肩に乗って様子を見ていた少女だけだった。

少女は立ち上がったレイカの肩に乗るとつい先ほどまでの嬉しそうな表情を消し、無表情でこちらを見つめてきた。その表情はまるで人形のように整っていた。少女を肩に乗せたまま彼女は先ほどの男に礼を言つとこちらに向き直り、そしていきなり頭を下げて

「ありがとうございます」

と言つて頭を上げ、また微笑んだ。

その笑顔にその場が和んだ。何故だろうか。

「色々と助けていただき、ありがとうございます。ですが……」

その瞬間、彼女の表情が一変した。その場の空気も一変する。

異様な空気に奴隷の少年は震え上がり、思わずシェイドの服の裾を引つ張っていた。

今の彼女は先ほどの優しそうな彼女ではなく、まるで女王のような気品を漂わせながらこちらを見つめていた。その瞳は、氷のように冷たく鋭い。

まるで、あの頃の目の前に立っている男の過去を見ているようだった。

「貴方達を許す事は出来ません。今まで村の人たちにしてきた事。そして、カミイラに剣をむけた事。謝っていたいただきます」

「何故謝らないといけないんだ？別に…」

続きを言おうとしたミューに彼女は鋭い目つきで睨んだ。思わずミューは背筋を伸ばした。

「私に用があつたなら私だけを探せばよかったです。ですが、貴方達は関係ないカミイラにまで手をかけようとした。村の人達にまで手をかけようとした。それが許せないのです。私が傷つけられるのは構わない。どこに連れて行かれようとも、何をされようとも構わない。だけど、私以外の人たちに手を出すようなら……私は貴方達を完膚無きまで叩きのめします」

この表情は本気だ。

そう悟った男達は先ほどの出来事を思い出していた。もし、あの時彼女が完璧にゴーレムを操れるようになっていたならこの場にいた者達は勝てないだろう。術者が混乱していたおかげで、今回は勝てたが本来ゴーレムは守護者といわれるほど防御力が高く、

攻撃力が高く、出来のいい物ほどその力は増す。

彼女が出したゴーレムは、少し動きが鈍い以外はそこらのゴーレムの数倍強かった。

もし、彼女が冷静にゴーレムに命令を下していたら男達は勝てないだろう。

シェイドとミューはその事を考えつき、彼女の存在が少し恐ろしくなった。

だが、次の瞬間恐ろしいという感情は消え去った。

「……すまなかった」

そう言つて素直に頭を下げたのはあの男で、自分達よりも身分の高い男だった。

さすがに、自分達もしなければいけないと思い全員頭を下げて謝った。すると、

「くすっ、もういいですよ」

と優しい声が聞こえた。その声に応答して頭を上げると彼女は微笑んでいた。肩に乗っている少女は呆れたような顔でため息を付いた。急激な彼女の変化についていけないミューとその他3人はポカーンと口を開けていた。

シェイドと最初に謝った男はつられる様に笑みを浮かべていた。

「本当は本人の目の前で謝って欲しかったんですけど、さすがに無理だと思うので、今回はこれで勘弁してあげます」

「詫びの品を届けよう。それでいいか？」

「なら、良いと思います。だけど、次こんな事をするようなら…わかってますよね？」

その言葉に男達は何回も頷く。

彼女は満足したような顔になると、片手を目の前の男に差し出した。

「…？」

「今度来るときは、友人として来てください。そのほうが都合がいいでしょう？それに、正々堂々私も貴方達も勝負できます。だから、友人になるための握手です」

「友人……」

その考えは全く無かった男は驚いた表情になると、元の普段の気だるけそうな顔で手を握った。彼女はその手を握り返すと、思いついたかのように少女に小さな声で何か話し始めた。話が終わると少女がいったん地面に降りて、何も無い場所から大きめのバッグを取り出した。そして、中から小さな宝石の原石を4つ取り出すとレイカに手渡した。

少女からそれを受け取った彼女はその内の一つを男の手のひらに乗せる。

「私と貴方達が友人であるっていう証です。ただの石ですけど、無
いよりマシだと思います。今度、ちゃんとした物を作るので出来る
までこの石が代わり、という事でお願ひします」

シェイドもミューも一つずつ、彼女に手渡しで渡された。

こんな宝石、すぐに買えるのだが二人には何故か今まで見てきた宝
石の中で一番綺麗に見えた。

シェイドはサファイア色の原石、ミューはエメラルド色の原石、も
う一人の男はガーネット色の原石を彼女から貰った。

もう一つ残っているのだが、残り2人の男が「いらぬ」と拒んだ
ので最後の一つは奴隷の少年が受け取る事になった。少年は無邪気
な顔でお礼を言いながら大事に貰った石を握り締めてた。

「そういえば、まだ私皆さんの名前を覚えてもらってないですね…
…その前に私の名前を言ってませんでした。私の名前は、零香。樹
新零香です。この子はエリミア。どうぞ、よろしくお願ひします」

「レナード・アルバドス・エルクーレだ」

「俺はミュー。ミュー・クロイチエフ。あ、まだ戦い足りない」

「落ち着け。…あー、俺はシェイドだ。ファミリーネームは無い」

「ふむふむ、レナードさんにミューさんにシェイドさんですね。あ
と君は？」

そうやって彼女は奴隷の少年と同じ目線まで下がり、優しそうに微笑んだ。

少年は少し驚きながら、小さな声でボソリと「……名前、ない」と呟いた。

彼女は驚いたが、これが普通なのだ。子供の奴隷はほとんど名前をつけられる前から奴隷として扱われる。名前などありはしない。あるとすれば、売りに出されたときの番号のみ。

彼女は少し悲しそうな顔を見せたが、すぐに何かを思いついたようだ。

「じゃあ、今君の名前を考えようか」

「えっ……」

戸惑う少年を無視して彼女はどんな名前がいいか真剣に考え始めた。百面相をしている彼女の表情は面白かった。おもわず笑ってしまった。

ミューも大笑いしだし、レナードでさえも腹を押さえながら笑いを堪えている。

女性に対して失礼だと思うが、何故か自分の意思では止められなかった。

なかなか名前が思いつかないのか、頭を抱えている彼女にレナードは少し助け舟を出した。

「また今度訪れたときまでに考えておけばいいだろう。どうせ次会うことになるのは祭りの時になる。十分、考える時間はある」

彼女は「わかりました。その時までにかっこいい名前、考えておきます！」と意気込んでいた。少年は、そんな彼女の傍をうろつくと不安そうに歩いていた。が、

「レナード様、遠くに沢山の人の気配があります。どうやら騎士団のようです」

真剣な顔でどこか遠くを見つめながら言った。その言葉にレナードや他の男達はため息を付いた。レイカとエリミアの頭にはハテナマークが浮かんでいるように見えた。

「急いで帰るぞ。馬を持って来い」

「すぐ傍に」

すでにそこには彼らが乗ってきた馬が全てそろっていた。

それぞれ馬に乗りながら、レイカに挨拶をして村を出て行った。そんな彼らにレイカは手を振りながら大声で叫んだ。

「いつでも歓迎しますから、いつでも来てくださいね!」

彼女の姿を少し振り向いて手を振り返す彼らの表情は、明るかった。

「……………本当は優しい人だったんだね……………」

そう呟いた自分を作った主人を見上げながら、エリミアは心の中で

（あいつらも警戒しとかないと……………）

と、新たに零香を狙う男達リストに追加する事にした。

そんな事は露知らず、零香はまだ少しか痛みのある左腕を押さえながら

「さてと、早く帰らないと晩御飯が間に合わない」

と呟き、エリミアを抱えながら家に走って帰った。

その後、彼女の部屋は村の人たちからの感謝の品物や彼らから送られてくる品物で埋め尽くされる事になった。

クロツカス村2 - 4 (後書き)

3000アクセスを超えたので、予定通り番外編をあげようと思います。

どうしようかな～…

どうぞ、お楽しみに

番外編 そのいち 神様の気まぐれゲーム(前書き)

3000アクセス記念の番外編です

人物紹介ではなく、ギャグ話となっております。(なってるのかな?)

本編のネタバレ有り

キャラ崩壊

よくあるネタ

が、大丈夫な方はどうぞ!

番外編 そのいち 神様の気まぐれゲーム

ある世界に二人の双子の神様がいました

一人は白い髪に黒い羽の生えた創造の神様

一人は黒い髪に白い羽の生えた破壊の神様

二人はいつも一緒に、今日は自分の世界を使ってゲームをしていました

そして

「今日はこれ！」

「おっ、いいんじゃない？追加でこれを使って……」

「ふふふふふ、どついう反応するかなあ」

「あの子が起きてみてのお楽しみだね」

混沌と読んでカオスの日になりそうです

零香です

朝起きて鏡を見てみると、猫耳が生えていました

ふさふさの尻尾も生えていました

外に出るのが、怖いです。いろんな意味で

「レイカ〜！おはよう、今日も……」

さっそく、一番会ってはいけない人に見られました

「あっ…カミィラ、これはその、ちょっと」

無言のまま、カミィラに手を引つ張られて隣の衣裳部屋に連れて行かれてます

もちろん抵抗はしました。けど

無言の圧力、怖いです

カミィラが満面の笑みで私を見ながら、衣装を選んでるけど

何故か寒気がずっとします

「部屋に戻っていいですか、カミィラさん」

「ダメ これは皆にも見せなきゃ損だよ！特にお兄ちゃんには見せないと…」

即答ですか

後ずさりながら部屋に戻ろうと、ドアを開けようとするけど、開かない

「あっ、ついさっき鍵閉めたから開かないよ。鍵もアタシが持つ

てるし」

用意周到（涙）

「さあ、さあ。この服を着て皆で朝ごはん食べよ〜」

「よりもよって、その服！？もっとマシなのをお願いします！」

「却下します これ以外認めないし、着ないとドア開けないよ？」

ですよね〜（涙）そうだと思ったよ

「あつ、ついでにこの首輪もつけてね」

うう、何でこんな事に……誰がしたのよ、これ （僕らです）

by 神様 s

「はいはい、行くよ〜。皆、待ってるんだから」

「この格好で部屋の外に出ろって言うの?!せめてコート着させて

「!」

「む、確かにその格好を他の人に見せるのは勿体ないよね。お、
そっだ。エリミアちゃん」

「カミィラさん、早く行かないと皆さんがお待ちです…って零香…
？」

「ばれたら駄目な方を呼ばないで！二人がそろつと…」

「ふふふふふ、なるほど。ネコミミですか…じゅるりっ」

「エリミアさん、キャラ崩壊してます。よだれ、よだれ。」

「カミィラさん、そこに鈴のついたリボンがあるはずなので、それで髪を結んであげましょう。服は…何か物足りない気がします…
…まあ、妥協しましょうか」

「エリミアちゃん、これだよね？」
「その色より隣のその色の物の方がいいでしょう」

「…もういいや。諦めよう…」

その後30分かけて髪を結ばれ、エリミアの魔法で食堂へとばされた。

無論、無理やりに、である。

今朝の食堂は大騒ぎとなった。

エリミアが「カミィラさんに呼ばれたので」と魔法で迎えに行つて30分後、いきなり給仕をしていたメイドの目の前に、エリミアとカミィラとコートを羽織り、フードを顔が見えないくらい深く被つた零香が現れたのだ。

メイドは思わず小さな悲鳴を上げ、それを聞きつけた食堂で3人を待っていた男達が駆けつけた。

その後、カミイラとエリミアが零香のマントを脱がそうとして彼女を追い掛け回し、彼女は彼女で食堂中をまるで猫の様に逃げ続けた。だが、さすがに体力が持たなかったのか

「びぎやつ!!」

20分後、前のめりで床にコケた。その瞬間、ゴンツと鈍い音が聞こえた。

彼女は、倒れた状態でなかなか起き上がってこない。

カミイラとエリミアが驚いて急いで彼女の体を揺するが、反応が無い。

「おい、レイカ?」

また体を揺する。そうすると、ようやく彼女がゆっくりと起き上がった。

反動で彼女のフードが下に落ち、顔が見えた。その姿を見て、全員の動きを止め彼女を見つめた。

零香は普段、ポニーテールをして地味な服を好んだ。

だが、今の彼女は髪を小さな鈴の付いた紫色のリボンでツインテールに結んでいた。頭からは黒い猫の様な耳が生え、ピクピクと動いている。

マントの隙間から黒い尻尾が現れ、ゆっくりと揺れている。よく見ると、彼女の首に赤い首輪がついていた。

そんな彼女の表情は驚きと悲しみが溢れていた。

「…魔法、使えない」

「えっ?」

「今さっき、倒れそうになったとき咄嗟に風の魔法を使おうとしたんだけど、使えなかった」

そういつて、彼女はマントを脱いだ。

「おお」「ちよっ」「なっ!」「これは……」「……」

カミィラ達が零香に着せたものは、体のラインを少し強調した紺色のミニスカワンピース。

それにフリルを沢山あしらったエプロン。胸元は少し開いていて、彼女の白い肌が見える。

さらに、黒いニーソックスを穿いて、かわいらしいリボンのついたヒールの高いブーツを履いていた。

簡単に言葉で表すと、メイド服である。

男達は無言でカミィラたちに視線を向けた。

本人達は

「うんうん、やっぱりこれがいいよね」

「ネコミミ娘にメイド服は当然ですよね」

「だよ〜」

なぜか誇らしげに二人で握手をし合っている。

「精霊も見えない……力も使えない……」

彼女は自分の手を見ながら、呟いた。そして、自分の頭に生えている耳を触ったり、体を見回してみたり、何か念じてみたり、最終的には

「……はあ」

ため息をついて、どこから取り出したのかわからないが、剣を取り出して何回もまわした。

彼女の不自然な行動に男達は啞然とした。

「やっぱり、魔力がなくなってる。でも、生活に影響が無いぐらいにはまだ残ってるみたい。ものすごく少量だけど。だから魔法使えないのか……」

「あの、レイカ様……?」

そういったのは零香が名前をつけた、レナード達の従者フィルだった。

零香はハツとして視線が全て自分に向いているのに気づき、慌ててマントで体を隠す。
その頬は少し赤かった。

すっかり、忘れてた。という顔だ。

「あははははっ……………失礼します!!!」

とっさにその場から逃げようとする彼女に

「ん」

「ありがとうございます」

ひゅっと何か首に掛けられ、勢いよく後ろに引っ張られる。当然、引っ張られた本人は

「かふっ!?!」

首が絞まり床に倒れる。顔は何が起きたのかわかっていない顔だ。倒れたままの彼女の傍に慌ててフィルが駆け寄る。フィルの手を借りながら起き上がる彼女は首輪に手を当てた。
鎖のような物が首輪につながっていた。そして、この鎖に見覚えがある。

後ろを振り向くと、鎖を持ってにこやかに笑っている人と鎖を作り出した張本人がいた。

「落ち着いてください、レイカさん」

そう言って鎖を指で遊んでいるのはこの国の第一王子に仕える執事さんだった。

名前は……忘れてしまった。

「もっと首を絞められたいようですねえ」

「ごめんなさい、ちゃんと覚えてます！ミケル・ロードさん！！」

「はい、よくできました」

略称すると猫の名前になるので、零香はミケルさんと呼んでいる。見た目年齢20代後半なのに、実年齢は……。ここはまだ内緒で。零香は鎖で絞められた首を擦りながら、今晚のデザートは無しにしようと思った。

「何故そうなったのかお話を聞かせてください。でも、その前に治療……」

彼が全部を言い終える前に、零香の頬に手が添えられた。目の前にはミケルではなく、いつもお世話になっているリュナミスの顔があった。

ピョコンッ

自分と同じような耳が生えていた。彼も頭のそれに気づいて、いまだに爆笑して腹を抱えているミューに向かって剣を投げた。ミューはそれを簡単によけ、彼の姿を見てまた噴出した。

「…どういうことだ、これは」

リユナミスは怒りに拳を震わせながら、零香を見た。零香は横に首を振る。

わかったら、自分もこんな格好をしていない。

「まあまあ、いいじゃん。以外に似合っ、くふっ」

「いい加減お前はその口を閉める。もう一度笑ったら…わかってるな？」

「あの、少し落ち着いて……」

パキンッ

「へ？」「あっ」

二人を止めようとミューに触れたら、彼の頭にも耳が生えていた。ミューは何回も自分の頭を触って、確認をした。リユナミスはその

反応に少し噴出した。

零香は、彼らから離れレナード達の方へ行っていた。レナードとシエイドは遠くから二人の様子を見ながら、微かに笑っていた。二人は零香が近くに来ていたことに気づかず、そのまま見続けていた。

零香は「チャンス！」と思い、彼らの腕に触れる。

「えい」

パキンッ

「は？」「ん？」

零香の予想通り、また彼らの頭に耳が生えた。零香は、自分の手を見つめた。

「ん〜、なんなんだろう。私が触ったら変な音が聞こえて、耳が生えてくるみたい……」

「……わざわざ、俺達で確認する必要あったのか……？」

「……（こくり）」

「いや、あの二人がなつたんですから、どうせなら皆でなつた方が恥ずかしくないかなって」

零香はそう言っていると彼らから離れ、カミイラとエリミアに触れた。だけど、音は聞こえず耳も生えてこなかった。

二人は自分に耳が生えてこなかった事に安堵と何故か残念そうな顔をしていた。

ちょうどよく、傍でうるうるしていたフィルにも触ってみる。ただど変化無し。

「??？」

どうゆう原理で耳が生えてくるのかわからない零香は、フィルにのしかかりながら考え始めた。フィルは主人達の「お前なにしてた」という人を殺せそうな視線を受けながら、ガタガタと体を震わせた。零香はそれに気づいて（寒いのかな?）と思い、フィルの体を抱きしめる。

フィルは慌てて腕から逃れようとしたが、零香はかまわずぎゅっと力を込める。

「あの、レイカ様、その……」

「もしかして、邪魔だった?ごめんね、すぐ離れるから」

フィルから離れた零香の姿は、まるで遊び道具を取られてしょんぼりしている子供だった。

その証拠に、彼女の耳と尻尾が下に落ち込んでいる。

また慌てて「いえ、邪魔じゃないですっ」と答えると

「ほんと…?よかったあ」

そう言って微笑んだ。見ると彼女の尻尾が嬉しそうに横にゆれ、耳が立っていた。

彼女の仕草に思わず周りの人はキュンッと心があった。

彼女はまた嬉しそうにフィルに抱きついた。フィルは内心ドキドキしながら、近くに歩いて腕を伸ばしてきたエリミアを抱きかかえながら

ああ、帰ってからどんな罰が待っているんだろう……

と心の中で泣いた。

番外編 そのいち 神様の気まぐれゲーム(後書き)

はい、よくあるネタですorz

パルサーシャ達の家にはメイドさんがいるのは、本編の次のお話でわかります

あと、フィルってつけた理由とか、執事さんの実年齢とか。

そしてもうすぐ4000アクセス……(・・;))

次の番外編は人物紹介にします。

人物紹介&小話(前書き)

本当は本編をUPする予定だったんですけど
4000アクセスを突破したので、重要な人物紹介&小話を先にUPしました。

少しネタバレ含みます。

それが大丈夫な方はどうぞ！

人物紹介&小話

樹新きあら 零香れいか

性別：女 15歳（高校1年生）

成績は中の中、運動はまあまあな高校生。この春、新入したばかり。一人暮らしで、安いマンションに住んでいる。基本、何でも出来る。

エリミア

性別：女？ 0歳

零香が作った人形。普段は無表情だが、零香が関わってくるとココロと表情を変える。

零香に近づいてくる男は皆、敵（一部を除いて）。ゴスロリの格好がお気に入り。

リユナミス・アルトバーン

性別：男 21歳（騎士団所属）

王国騎士団第二隊副隊長。苦勞人。

剣と魔法の実力は国で3番目と言われている。昔ある仕事で女性と関わって以来、女性に仕事以外で触れない。

カミイラ・アルトバーン

性別：女 13歳（騎士団所属）

王国騎士団第二隊魔術師。リユナミスの義理の妹。

10才まで孤児院で過ごし、孤児院が潰れたのと同時にリユナミス

にひきとられた。
零香のこちらでの初めての友達。

パルサーシャ

性別：女 ??歳

宿屋を経営している女性で、リユナミスやカミィラ達の保護者。
実年齢を聞こうとすると、どこから取り出したのかわからない鉄製のハリセンで叩かれる。
あらゆる場所に友人やコネがある。

レナード・アルバドス・エルクレー

性別：男 17歳

クロツカス村の領主の息子の内の一人。末っ子。上に3人の血の繋がりのない兄がいる。
いつもだるそうので何を考えているのか全くわからない。実力も不明。

ミュー・クロイチエフ

性別：男 16歳

レナードの友人。小さい頃から彼を知っている。
戦う事が好きで、自分の槍をとっても大切にしている。ものすごく、
気まぐれ。
風の魔法が得意。

シエイド

性別：男 17歳

レナードの友人兼護衛役。ミューのストッパー。

普段は冷静なのだが、剣を持つと思考が残酷的になる。そして、キレやすい。

フィル

性別：男 10歳

レナード達に仕える奴隷の男の子。最初は扱いが酷かったが、色々零香に注意されて改善された。

気配を読むのが得意で、数百m先の人間や動物の気配を感じとる事ができる。

アミュエル・トーニャ

性別：女 21歳

リユナミスの幼馴染。元、王国騎士団所属魔術師。

服などを扱う雑貨屋を経営。リックの母親。

アラトエル・トーニャ

性別：男 21歳

リユナミスの幼馴染。元、王国騎士団所属兵士。

主にアクウを取り扱ったアクセサリー屋を経営。リックの父親。

リック・トーニャ

性別：男 6歳

活発で元気な男の子。わがままで、よく零香を困らせる。
リュナミスに対抗心を向けている。

エリック・リュクシア・アラドール

性別：男 16歳

国の第一王子で王国騎士団第二隊隊長。

実力は国で2番目と言われている。普段はベールを被り、顔を他人に見せようとしない。

ミケル・ロード

性別：男 67歳

見た目20代後半な執事。王家に代々仕えている。
運動神経抜群で、娘が二人いる。影の苦勞人。

零香&ミケル

「ミケルさんって、なんでそんなに若く見えるんですか？」

「さあ、それは自分でもよくわかっていないのです」

「もしかして、お父さんとかも若く見られてました？」

「ええ、父も80歳で若い女性の方に何十回もプロポーズされていたほどでしたからね」

「うわ〜……」

「私でさえ、今でも都に帰ると女性の方に迫られる事がよくあります」

「あはははは……」

「正直、私にとって迷惑極まりないのですが……毎回丁寧に断りしています」

「あれ、でもこの国の法律って……」

「ええ、一妻多夫制を認めているので、妻を失っている私としては別に受け入れてもいいのですが」

「何か理由でも……？」

「私が愛しているのは、妻一人ですから。妻もそう言って、ずっと私の傍にいてくれました」

「……奥さん、とても幸せだったでしょうね。女性として、とても羨ましいです」

「そう思ってくれてると、いいですね」

「今度、その、一緒にお墓参りしたいです」

「別にかまいませんが、どうして？」

「ミケルさんの奥さんに会ってみたいんです。それと、ミケルさんを少しお借りしますって、一応お願いしてみたいんです」

「…彼女も喜んでくれるでしょう。レイカさんの様な方が会いに来てくださるのだから」

「そうだと嬉しいですね」

「ええ、今度都に戻った時一緒に行きましょう。彼女の好きだったキキヨウの花とシオンの花を持って……」

人物紹介&小話(後書き)

キキョウ(桔梗)の花言葉は「変わらぬ愛」「気品」「誠実」「従順」

シオンの花言葉は「追憶」「あなたを忘れない」

です。

いつもDorisを見てくださって、ありがとうございます！
これからもどうか、宜しくお願いします。

番外編 そのに 異世界からの来客者？（前書き）

今までの投稿作品でのコラボです。

この前連載し始めた「かぐや姫の置き土産」のキャラが登場です。

本編が見たい方は、スルーをお願いします。

それでは、どうぞ。

番外編 そのに 異世界からの来客者？

拝啓、零香様。

最近新しい魔物が大量に発生しておりますが、そちらは大丈夫ですか？

こちらは、全然大丈夫です。暇すぎて、家を吹き飛ばしたぐらいです。

ところで、実は一週間後、ある場所に来て欲しいのです。

そこで、イベントを開催しようと思います。ぜひ参加してもらいたいと思い、この手紙を出しました。

どうか、貴女と人形のお嬢さん、そして後4人ほど人数を集めて、こちらの指定する場所に来てください。

イベントの内容は、当日集合場所で発表いたします。

集合場所は、この手紙の裏に書かれていますので、どうかよろしく願います。

歓迎する準備をして、お待ちしております。

貴女のご友人と共にお待ちしております。

そんな手紙が届いたのは、まだ日も昇っていない朝4時だった。眠い目を擦りながら、宛名を見てため息をつき、指定場所を別の紙にメモしておく。そして、まだ起きるのには早いですが、同じベットで寝ていた少女を起す。

「エリミア、起きて」

「んっ……ふわぁ、どうしたんですか……？」

ゆっくりと起き上がりながら、目を擦る少女の頭を軽く撫でる。少女は、彼女の作った人形だ。本物の人間に似せて作った。近くで見なければ、人形とは思えないほどに。

「ごめんね、急にこんな時間に起こしちゃって」

「別にかまいません。少しまだ眠いですけど……」

そう言いながら、少女は軽く髪を手で梳き、その場に正座する。少女にさきほど届いた手紙を渡す。少女は受け取ると、手紙の裏を見て苦虫をつぶしたような顔になる。そして、勢いよく手紙を縦に裂いた。さらにそれを粉々に裂く。裂き終わると、それをすぐにゴミ箱に入れた。

「こんな誘い、受けない方がいいでしょう」

「でも、あの人の誘いを断るのは…」

ちよつと、怖い気がする。

それでもエリミアが考えを変える様子は無く、当日の朝に無理やり連れて行った。

当日、待ち合わせ場所に行くと手紙の送り主が立って待っていた。ベージュ色のブレザーの制服を着て、いつも腰に薔薇の装飾が施されているレイピアをつけて、王子様とは違う笑顔をいつも浮かべている人。

確か、名前は白夜紗那さん、だったはず。

白夜さんは私達に気づくと、軽く会釈をしてきた。

「今日は来て下さり、ありがとうございます」

「いえ、こちらこそお誘いありがとうございます。それで、イベントとは何ですか？」

「ここでは難なので、場所を移動しましょう。すぐ近くに他の方も集まっています」

そう言っつて白夜さんはスタスタと歩き始めた。

私達もその後ろをついていく。私の腕の中のエリミアは、ずっと頬を膨らましたままだ。

やっぱり有無を言わず、無理やり連れて来たのが悪かったようだ。今晚のデザートは、彼女の好きなプリンにして機嫌を直してもらおう。

152

「今日は初めてお会いする人ばかりですね」

「それは……あの時は私とエリミアと貴方以外、誰もいなかったじやないですか」

「ああ、そうでしたね。忘れていました」

わざとらしいなあ、この人。

実は彼と知り合うきっかけになったのは、彼が家の近くで魔物を大

量に倒しているのを見てからだった。私はその時、カミィラに頼まれてエリミアと一緒に洗濯物を取り込んだ所だった。

日本に住んでいる人と聞いて、最初は喜んだのだが……。性格が受け付けなくなつて、彼の兄という人が迎えに来るまで、エリミアと彼は喧嘩をしていた。

まあ、見る限り彼はエリミアで遊んでいる様子だったけど。

だから、エリミアはこの誘いを受けるのを最後まで断っていたのだ。

「さあ、着きましたよ」

「……………ここですか？」

私達は何故かコロシラムのような場所に連れてこられていた。反対の入り口の方を見ると、彼と同じような制服を着た人たちが立っていた。その中に、見知った顔があった。

「もしかして…！高宮さん?!」

「……………お久しぶりです、樹新さん」

肩まで切りそろえた髪と身長と同じぐらいの雑刀を持った彼女は、無表情のまま頭を下げた。

無表情のように見えたが、彼女もこの出会いに喜びを感じているようだった。

彼女とは昔、まだ小さい頃に同じ小学校だった。よくクラスで一人ぼっちだった私と、いつも一緒に遊んでくれた、優しいお姉さん。

私が祖父に引き取られてから、彼女の家も遠くに引越してしまつて所在がわからなくなっていたので、再会できて嬉しかった。

「うわゝ、本当にお久しぶりです！元気でしたか？」

「ええ、それなりに。樹新さんも元気そう良かった」

「高宮さん、身長伸びましたね。あの頃は私と同じぐらいだったのに」

「小学校の頃の話ですよ？身長は伸びて当然です。まあ、伸びすぎたような気もしますが」

そう言つて彼女が軽く笑つた。

初めて、彼女の笑みを見た。小学校の頃は全く笑わなかったのに、やっぱり人は成長するんだな、と改めて実感する。

「はいはい、ストリープ！！」

「きゃあっ！」

彼女との間にいきなり小さな女の子が割つて入ってきた。少し茶色がかつた髪を小さくサイドテールにして、前髪に可愛い白兔のピンをしている。

女の子も高宮さんと同じ制服を着ていた。

いきなり大声で入ってくるものだから、驚いて奇声を出してしまつ

た。少し恥ずかしくなる。

「先輩！あまり話をしないでください！時間が無くなっちゃいます」

「ごめんね、かな。久しぶりに会ったものだから、つい」

「もう、私達がこっちに居られるのは5時間だけなんですから！気をつけてください」

高宮さんに、かな、と呼ばれた少女は頬をプクーと膨らせて怒っていた。

まるで、ハムスターのようだ。かわいい。

かなちゃんと呼ぶことにしよう。かなちゃんは、くるりと私のほうを向くといきなり顔を近づけてきた。

「……何？」

「…ふう〜ん。あなたが会長の言っていた方ですか」

「…たぶん」

「……勝った」

はっ？

小さくそう呟いた少女は、鼻歌を歌いながら白夜さんの隣に近寄る。私の頭の中では、ハテナマークが飛び交っていた。何が、勝ったの

だろうか。

腕の中に居るエリミアに聞こうとしたが、彼女の顔が鬼の様だったので、横に立っていたリュナミスさんに聞くことにした。彼もたぶん少女が言った言葉を聞いていただろう。

「リュナミスさん、何が勝ったんですかね？」

「……」

反応、無し。

彼も表情には出してはいないが、ずっとあのかなちゃんの事を見ていた。

いや、睨んでいたと言ったほうがいいかな？

後ろで、王子のエリク様と執事のミケルさんがため息をついたのが聞こえた。

「ん〜、もう一組がまだ来てませんね〜。まあ、時間がかかるのも無理ないか……」

「会長 待つてる間、皆さんでお茶でもしましょう！」

「それはいいね。いつもかなには助かるよ」

「えへへ〜、会長のためなら何でもします！」

彼と話している彼女は、まるで子犬のように笑っていた。

その姿に、自然と笑みが浮かぶ。かわいいなあ……。……。

「お茶なら、あたしも手伝うよ」

「ワタシも手伝いますよ」

「助かります。私達はテーブルなどをご用意しますので、彼女と一緒にお茶をお願いします」

白夜さんはそういうと、かなちゃんに耳打ちして何かを伝え、かなちゃんが一緒についてきたパルサーシャさんとカミイラを連れて、コロシアムのどこかに消えていった。

「さてと、それじゃあ私達はテーブルと椅子を用意しましょうか」

「それなら心配後無用です」

突然、エリミアが地面に降り、いきなり空間の中から木のテーブルとイスを取り出した。

白夜さんはいきなり何も無いところから出てきたそれらを見て、驚いていた。

エリミアは、彼の様子を見て勝ち誇った笑みを浮かべて、もう二組ほど取り出した。

「驚いた……。まさかこんな力を持っていたとは……」

「私の能力の内の一つです。パラソルも出しておきましょう」

エリミアはさらに空間の中から巨大なビーチパラソルを取り出し、地面に突き刺す。

高宮さんが、テーブルに白いシートをかける。

「凄いですね、エリミアさん。こんなに小さいのに」

「小さいは余計です」

「でも、事実でしょうか？小さい人を小さいと言って何が悪いのですか？」

「失礼な事を言うんですね、最近の人は。零香が向こうに戻ったときが心配です」

「祖母と同じような事を言うんですね、エリミアさん」

「なっ！女性に対してそれは失礼です。すぐにその言葉を撤回してください」

「嫌ですよ。私は自分の気持ちを偽るのが嫌なんですから、嘘は言いたくありません」

「　　っ、この男は……！！！！」

「落ち着いて、エリミアっ！！」

今すぐにも殴りかかりそうなエリミアを抱き上げ、動けないようにする。

それでも暴れ、今すぐにも腕から抜け出して、目の前で不敵な笑みを浮かべている彼に殴りかかりそうだ。

この前もこんな感じだった。あの時は家の中をエリミアが半壊して、後片付けが大変だったのだ。
勘弁して欲しい。

「エリミア、落ち着け」

「これが落ち着いていられますか!！」

リユナミスさんが怒りを抑えようと宥めたが、効果が全く無い。
ミケルさんもエリク様もお茶の準備の手伝いに行ってしまったから、誰も彼女を止められない。

「あはははははは、面白いですね。彼女の反応は、本当に面白い」

「会長、そろそろ笑うのを止めたほうが……」

「いや、私も止めようと思っはいるんですが……くふふふ、止められないんですよ」

止める気が無いだけでしょうが。
白夜さんのその言葉に、エリミアは今まで理性で押さえ込んでいた怒りが切れたのか、

「痛い目に合わせないといけないようですね!！」

いきなり腕を振り上げた。

その腕が、私の顔面に直撃する。口の中から血の味がして、思わず体から力が抜ける。

「!！」

「樹新さん!！」

地面に倒れる前にリユナミスさんが咄嗟に受け止めてくれたのか、体全身に痛みはこなかった。

でも、顔がものすごく痛い。手で触ってみると、血が出ていた。

高宮さんが、慌ててハンカチを私の顔に当てた。

「いたっ」

「血が出ているので我慢してください」

「…はい」

おとなしくして、視線だけ動かすと、すぐ近くでリュナミスさんが心配そうに顔を覗かせていた。

「大丈夫か」

「はい、少し痛いですけど大丈夫です」

それでも、血の臭いで軽く頭がふらふらする。少し体から力を抜くと、血が沢山溢れてハンカチを汚していた。自分で思う。出すぎ。

「医務室に連れて行きましょう」

「わかった」

急に体を持ち上げられ、普段なら悲鳴でも上げるところだけど、思考が全く回らないからされるがままだった。

そのままどこかに連れて行かれる寸前、誰かが私の服の裾を引っ張った。

目を向けると、裾を引っ張っていたのはエリミアだった。泣きそうな顔。彼女は震えながら、私を見ると、顔を背けながら言った。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「……………エリミア」

私はエリミアの頭に手を載せて、勢い良く頭を撫でた。

彼女が驚いた顔で私を見てきたので、私は笑みを返してあげる。

「気にしないの」

「でもっ、…！」

「悪いのは会長ですから、貴女が悪いというわけではないですよ。むしろ、こちらが申し訳ない気持ちでいっぱいです」

そう言って高宮さんも、エリミアの頭を撫でた。

エリミアは困惑したような顔で、私を見た。私は笑いながら、頷いた。

「後で会長には、きつく言うておきますので、それで許してあげてください。彼は、自分の感情がコントロールできないんです。それに、この後で思う存分殴れますから、その時にでもストレス発散してください」

その言葉に、エリミアが表情を輝かせた。どのくらい彼女にはストレスが溜まっていたんだろう、と少し不安になる。

でも、そんな機会あるんだろうか。って、もしかして……………。

イベントってそういうこと？

「さあ、早く連れて行きましょう」

私はその後、もう一組の招待客が来るまで、周りに大量の意味不明な動物の標本の中で、一時的に眠った。

番外編 そのに 異世界からの来客者？（後書き）

後から読んでみると、なんだこの文章は（・・・）
でも、続きますw

クロツカス村2 - 5 (前書き)

ようやく、続きをUPする事ができました…
長く待たせて、申し訳ないです。

色々と修正していたら、時間が掛かりました。

それでは、どうぞ。

隊の兵士達が浮き足立つのを何度も落ち着かせながら、リユナミスとパルサーシャは王子を警護しながら村に戻ってきた。

村に着くまで王子は顔が見えないようにベールを被り、執事の引く馬の上に乗って揺られていた。

リユナミスは自分の馬の手綱を引きながら、疲労と緊張から少しため息をついた。

それに気がついたのか、隣を歩いていたパルサーシャが顔を覗き込んできた。

「ん、どうした？ため息なんかついて。それ、渡すのに緊張してるのかい？」

自分が手に持っている物を指差しながら、何故かニヤニヤしながら言ってきた。

その表情に、少しイラッときたが表情には出さない。

「別に緊張しているわけではないんだが……」

そっぴいなながら、後ろを振り向く。

王子と執事のさらに後ろを歩いている兵士達の表情を見ると、何故か勝手にため息をついてしまう。

顔を前に向け、今までの経験を思い出しながら話した。

「あいつらが暴走しないかの方が重要だ」

「無理だろうね。必ず何か起こすだろうさ」

……即答か。

これは何か対策をとっておいた方が身のためだな。後でカミィラに説教を食らう前に。

「まあ、今年はその子もいるんだし、大丈夫なんじゃないのかねえ」

「もっと酷くなると思うんだが？」

「ふふふ、まあ帰ってからの楽しみってことになるね。ほら、見えたよ」

彼女が手を振る先を見ると、同じようにこちらを見ながら手を振っているカミィラの姿が見えた。その隣には、彼女と彼女に抱きかかえられたエリミアが同じように手を振っていた。

リユナミスはこの村出身の兵士の内の一人に馬を任せ、彼女達の元にゆつくりと歩いていく。

パルサーシャも馬をその兵士に任せ、殿下や兵士達に少しだけ注意事項を説明し始めた。

リユナミスはそれを背中で聞きながら、カミィラ達と話を少しだけ

することにした。

「おかえり！お土産ある？」

期待する目で見てくる自分の妹に、持っていた包みのうちの一つを渡す。

「街道を歩いてたら行商人が、お前の好きなモルルを格安で売ってくれた。それで良かったか？」

カミイラは話を聞かず、すでに包みを開け、モルルを一つ取り出して食べ始めていた。

そんなカミイラの頭を呆れながら、軽く撫でる。

「あまり食べると、太るぞ？」

「だいひょくふ、ほむくらいへいひ、へいひ」

「食べるか喋るかどっちかにしろ」

「ん……………」

食べるほうに集中しだしたカミイラの頭をもう一度撫で、ふと隣に顔を向ける。

「……………」

じーっとカミイラの口の中に入っているものを見続けている。

一人は驚いている顔で、もう一人は物欲しそうな顔だ。

カミイラもその視線に気づいたようで、食べるのをいったん中止して食べかけをくわえたまま、包みの中からモルルを二つ取り出した。

「食べる？」

彼女はようやく目の前のモルルに気づき、慌てたように顔を横に振った。

彼女の反応に「いいからいいから」と言っ、カミイラは彼女の手にもルルを二つ乗せた。

「でも、これカミイラが……………」

全て言い終える前に、彼女の手からモルルが姿を消した。

視線を少し下に向けると、口を動かしている人形が一人。

視線に気づいたのか、彼女も同じように視線を自分の手元に向け、ため息をついて人形の頭を撫でた。

カミイラはモルルを一つ取り出して、エリミアが届かない高さで左右に振って遊び始めた。

それを必死に取ろうと、背伸びをしながら手を伸ばしているエリミア。

その光景に自然と笑みが零れた。

が、すぐに異変が起きた。

「ん？」

彼女がふと、空を見上げ頭を傾げ「あれは……………」と呟いた。

彼女が見ているところを見ても、ただ月が空で光っているだけで何も不自然なところはない。

「どうしたの？」

そうカミイラが言った瞬間、横を強い風が通り抜けた。その強さに腕で顔を隠し、目を閉じてしまった。次に目を開けたとき、彼女がいたはずの場所にはあの人形が倒れているだけだった。

カミイラもそれに気づき、エリミアを抱きかかえ彼女の名を叫んだ。

「レイカ!!」

「王子!!」

重なるように、兵士と執事の声が響いた。そちらのほうへ視線を向けると、慌てふためく兵士と執事が見えた。その中に、王子はいない。

パルサーシャはいつも通りで、その場に立ったままある場所を指差

した。

「一瞬しか見えなかったけど、何か茶色い物がすごい速さで通り抜けて行ったよ」

「二人は！」

「見えないのかい？そこの樹の後ろのやつが」

結論を早く言わないパルサーシャにいらいらしながら、指差す場所を見て。

「……………あつ？」

呆気にとられた。

その場にいる全ての者たちが見ていたのは、森を少し奥に行った樹の後ろに隠れながらじっとこちらを見ている

熊。それも巨大な。

熊は片手に王子を抱え、もう片方の手で彼女を抱えた状態で上半身だけ樹から出していた。

パルサーシャを除いて、その場にいる者全員が呆気にとられ、熊が視線に気づいて、凄まじい速さで森に消えていくのをその場で見送り、1分後。

「……あの熊、一足歩行で走ってなかったか？」

カミィラの言葉で、ハッと気づき、急いで森の奥へと走る。

リュナミスの後を追う様に、執事、兵士、パルサーシャとカミィラ、エリミアが追いかける。

それから、先頭を走るリュナミスが熊を見つけたのは、森の中を走り続けて20分後だった。

時はすでに遅く、熊の腕の中にはすでに彼女と王子の姿はなかった。

リュナミスは愕然としながら、憂さ晴らしに、こちらに気づいて自分に襲い掛かってきた、体重400kgはある熊を軽く背負い投げをして、近くにあった池の中に落とした。

池の中から出てきた熊の腕を掴み、ジャイアントスイング。また池の中に落とす。

この動作を繰り返し行うリュナミスの顔は、普段仕事以外では見せない満面の笑みで、兵士達は何回も投げ飛ばされて、だが屈しようとしないうる熊に同情した。

熊が目を回し、倒れたとき、交代で執事が同じ事をしようとして必死で兵士達は止めた。

この光景を見ていたカミィラとパルサーシャとエリミアは、呆れて同時にため息をついた。

一方その頃、熊に連れ去られ姿がわからなくなった零香は

「どろしてこつなつた」

「クエーッ」

「……」

自分より少し身長の高い銀髪的美青年に抱かれ、巨大な孔雀のような鳥に乗って大空を飛んでいた。

通り過ぎる風は冷たかったが、男性に抱かれているという事実で接触している肌が、とても熱く感じられた。

零香は、とりあえず深呼吸をして、自分を抱いている男性を見上げた。

髪を後ろで結び、前髪で右目が隠れている。瞳は青く、物語にでてくる、白い騎士の服の様な物を身に着けていた。

リユナミスに劣らない美貌で、女性でも男性でも魅了しそうな顔に、零香は、まるで物語の王子のようだ、と思った。

本物の王子だと知らず。

零香が自分を見ていることに気づいたのか、男性は零香を見つめながら、ニコリと微笑んだ。

その笑みを見た瞬間、零香は頭がクラリとした。

（何っ、あの天使の微笑み！！ものすごく、カッコイイのに、思わず撫でたくなるような可愛さ……っ！）

心の中でそう思いながら、顔を真っ赤にして悶えた。

両手で顔を隠しながら、もう一度男性を見ると、まだこちらを見たまま微笑んでいた。

恥ずかしくて顔を隠し、もう一度見る。そして、気づいた。

男性の首に、普通はありえない物が巻かれている事に。

「……………蛇……………」

男性の首に、半透明の白い蛇が巻き付いていたのである。体長1mはあるだろう。

恐る恐る、その蛇に触れると生温かく、鱗は硬かった。掴んでみると、蛇はもそもそと動き、顔を零香に近づけてきた。

まさか蛇が生きているとは思っておらず、いきなり赤い目に見つめられ、驚いて零香は男性から離れるように、後ずさった。

男性の顔を見ると、まるで、これが見えるのか、といったような顔で零香を見ていた。

零香はゆっくりと蛇に近寄り、その頭に手を当てた。蛇は、何もせず反対に零香の手に頭をこすり付けてきた。

「可愛い」

カワイイトハ、ハジメテイワレタゾ

「えっ」

突如、聞こえてきた声に零香は周りを見回す。だが、上は夜空。下は、森。

この場にいる二人以外に、人はいない。

零香は首を傾げながら、男性を見る。男性も同じように首を傾げていた。

「気のせい…?」

キノセイデハナイ

また同じ声が聞こえ、零香は孔雀のほうを見るが、孔雀はただ「クエーッ」と鳴くだけ。
「ますます、首を傾げた。」

「誰の声なんだろう……」

メノマエニイルダロウ

「目の前……。って違うし……。ということは、君!？」

驚きながら蛇を指差すと、蛇は首を縦に振った。

蛇は男性の首に巻きついたまま、眠たそうにあくびをした。

ヨウヤク、ハナシガデキルニンゲンニデアエタ。イイカゲン、マチクタビレタゾ

「待ちくたびれたって……。いつからこの人に巻きついてるの?」

コイツガ6ツメノタンジヨウビラムカエタヒカラ、10ネンホドダロウカ

「10年?なんでそんなに長く巻きついてるの」

ワレモ、スキデコイツニマキツイテイルワケデハ、ナイ。メイレイダツタカラ、ソレヲジツコウシテイルダケダ。

「命令、実行しているということは、今でもそれは続いている…」
ソノトオリダ。ダガ、イイカゲンツカレテキタシ、ハラモスイタ。
ダカラ、ワレトハナシガデキ、コノジユツヲトクコトガデキルニン
ゲンヲ、サガシテイタノダ。

「じゃあ、こんな状況になっているのわ……」

ワレガヤッタコトダ

その言葉に、零香は蛇の首を掴み、握り締めながら

「原因はお前か」

微笑みながら、徐々に手に力を込めていく。蛇の首がキュツと絞まる。口から下を出しながら、少し泡をふいている蛇に、男性が慌てて零香の手を蛇から剥がした。
蛇が荒い息を吐き出しながら、零香に威嚇する。

イキナリナニヲスル

「わざわざ、熊に私達を拉致させて、こんな孔雀みたいな鳥にのせた罰」

コウシナケレバ、ユツクリハナシガデキナイシ、ジユツヲトクコト
ガデキナイノダ

「何か特殊な魔法でもかけられてるの？こんな事してまでやるんだから、強力？」

イヤ、アルバシヨデナラ、カンタンニトケルノダガ……

「簡単なら、私以外でもいいじゃない。その場所でやれば」

オマエジャナイト、ムリ

「その理由は？」

オマエガ、シヨジヨダカラ

蛇の言葉に、思考が止まった。顔を蛇から男性のほうへ向くと、顔を横に向け手で顔を隠していたが、顔が赤いのがバレバレだった。零香は、怒りを収めながら冷静に蛇に問いかけた。

「もう一度、言って」

ダカラ、オマエガ『シヨジヨ』ダカラ。サイキンノワカイニンゲンハ、ハヤスギル。ダカラアルジハ、コンナジュツヲカケタノカモシレナイガ。

「…えっと、ちなみにどんな魔法なのでしょうが」

蛇は男性をちらりと見て、少し言いつらそうに言い始めた。

シヨジヨノオトメノ『チ』デ、マハウジンヲエガキ、ワレニ『チ』ヲアタエル。チハ、テデモクビデモ、アシデモカマワナイ。

「…だれでも大丈夫だと思っただけど……」

ダガ、ネンレイセイゲンガツイテイル。コレガヤツカイダッタノダ

「魔法の解除方法に年齢制限……聞いた事もない」

ソレハトウゼンダ。アルジガアミダシタモノダカラナ。デ、ソノネンレイセイゲンガ10サイカラ、15サイニカギラレテイルノダナゼコンナジユツヲホドコシタノカ、ワカラナイ

「ちなみに、女性？男性？」

ダンセイ

「よし、会ったら一度でいいから殴ろう。うん、そうしよう。それか、魔法で拷問してやろう」

ヤメテクレ、カリニモワレノアルジナノダ。トキドキ、アヤシゲナジツケンヲオコナツテイルガ、フツウノヒトダ。ソナタノマリヨクダト、シンデシマウ

「普通の人は、怪しげな実験なんてしません」

タシカニ、ソウダガ……

言葉を濁した蛇をじっと睨みつけていると、いきなり体が浮遊感に襲われる。慌てて鳥の毛を掴もうとして、何故か手が届かない。

体が、鳥から離れている。

必死に腕を伸ばして、鳥に？まろうとして腕にいきなり鎖が巻きつき、勢いよく引っ張られた。

状況に反応できず、零香はいつの間にか男性の腕の中に包まれている。男性の片手には、零香の腕に巻きついていて鎖が握られていた。鎖はどうやら男性の手のひらから出ているようで、赤く光っていた。零香の顔を覗き込むように、蛇が顔を近づけてきた。

ダイジョウブカ？

「大丈夫じゃないよ……。何でいきなり下に降り始めたの？」

モクテキチニツイタンダ

「それ、落ちる前に言って欲しかった」

零香は、少し頬を膨らませながら蛇の頭をチョップで軽く叩いた。そのまま、視線を上に向くと男性がまた天使のような笑みを浮かべていた。

ようやく自分がいまだに男性に抱かれているのに気づいて、顔が真っ赤になるのを感じながら腕の中から離れた。

男性が名残惜しそうに手を動かしていたのは、気のせいだ。

孔雀がゆっくりと森の開けた場所に下りていくのを見ながら、零香

は精神的にも肉体的にも疲れていた。

「今日は色々と出来事が重なりすぎだよ……」

そう呟く彼女の姿を、男性はじっと見つめていた。

クロツカス村2 - 5 (後書き)

これを執筆している間に、

「いつの間にか、6000アクセスを突破しそう…。(・…;)」

という事実気づき、慌てましたw

6000アクセスを超えたら、番外編をUPします。

前回の番外編の続編的な物を、考え中です。

「番外編書くなら、本編書け」と兄に言われましたけど…

(|| ||)

洞窟にて1（前書き）

今回、短めです。いつもの半分程度しかありません。

途中、いきなりシリアスです。

それでは、どうぞ。

洞窟にて1

孔雀のような鳥がゆっくりと地面に降り立つと、蛇と青年が先に下に飛び降りた。

零香は孔雀の毛を掴みながら、ゆっくりと地面に足をつける。地面に足が付いた途端、緊張していた気持ちが和らいだ。

周りを見回してみると、木が生い茂った森と、人が一人通れるぐらいの大きさの入り口の洞窟のような物が、一つあるだけだった。洞窟の奥を見ようとしても、奥は月の光が届かず、真っ暗で何があるのかわからない。

本当にここが目的地で合っているのだろうか、少し不安になった。

「ここが本当に合ってるの…?」

蛇に向かって言うと、蛇は首を縦に振った。

タシカ……………ココダ

「その発言で、ものすごく不安になりました」

蛇にムツとした顔を向けられてきたが、その前に青年が手をこちらに差し出してきた。

微笑みながら手を出す訳がわからず、一応左手をその手に添えてみる。

すると、優しくギュツと握られ、そのまま彼は洞窟に向かって歩き始めた。

突然歩き始めたから、最初こけそうになったが、どうにか体勢を戻し、彼に半歩遅れるペースで歩き始めた。

洞窟の中に入ると、生温い空気が体に纏わり付き、背筋がゾクツとした。

蛇が白く発光しているから、明るく感じられたが、それを上回るほどの嫌な雰囲気洞窟中から感じる様な気がした。

前にいる彼と蛇を見ると、彼らはこれに気づいていないようだった。

(私の勘違い…?でも、この感じはどこかで)

過去の記憶を思い出そうとして、楽しかった日々の記憶が思い浮かんだ。

家族でピクニックに行った記憶。その時に幼い妹と四葉のクローバーを二つ見つけて、しおりにして後日、両親に送ったときのあの笑顔。

お母さんが作った御飯を食べながら、皆でその日の出来事を報告しあった時の事。

あの頃はこんな日常がずっと続くんだと思っていた。

突然、楽しかった思い出が赤い血で塗り替えられた。

まだ幼かった私は、呆然と父と母が殺される瞬間を、目の前で見ていた。

二人の血が、私に飛び散りお気に入りだった白いワンピースが、赤色に染まった。

嫌、正確には三人の血だった。

妹も、同じように私の目の前で殺されたのだから。

そして、血がついた包丁を持ったまま私を見ながら荒い息を吐く男。

残忍な笑顔を浮かべて、獲物を狙うような目で私を見る、男。

その顔から、目が離せなかった。

だって、よく知っている顔だったから。

突然、手から痛みを感じた。
ハツとして、嫌な記憶を頭から消して、自分がいつの間にかその場に座っているのに気づいた。
痛みを感じた左手を見ると、どうやら目の前で心配そうに私の顔を覗き込んでくる、彼の仕業のようだった。今でも、強く握られていて、痛い。

「あの、手痛いので、緩めてもらっていいですか…?」

そういうと、彼は慌てて握っていた手を離してくれた。

少し手が赤くなっていたが、擦ってみるとすぐに元に戻った。

私は、どうしてしまったんだろう。ここは、あの場所とは違うのに。

ダイジョウブか? タイチヨウガ、ワルイノカ

「ううん、大丈夫。平気だから」

……ソウカ、ナラサキニスモウ

頷きながら立ち上がり、裾に付いた土を軽くはらう。そして軽く頬を叩き、気合を入れなおす。

「よしっ」と気持ちを一転させると、彼がまた目の前に手を差し出してきた。

何で手を繋ぐ必要があるのかわからないが、少し戸惑いながらもまた彼の手を握った。

彼は微笑むと、そのまま洞窟の奥へと進んでいく。私も半歩遅れながらついて行った。

歩きながら洞窟の中を観察していると、所々不自然に石が削られているところがあった。

どんどん奥に進むたび、それは明確になってきた。

「この洞窟って、人が作った物なんだ……」

セイカクニハ、ヒトトセイレイガツクッタモノダ。アノコロハ、セイレイモヒトモ、トモニクラシテイタカラナ……

「今は、そうじゃないの？」

セイレイハ、ムカシニクラベテ、ネンネンソノカズガヘツテイル。サラニ、ニンゲンデマリヨクヲモツモノガアマリウマレナクナリ、ワレワレノソンザイヲカンジルコトガデキルモノガ、スクナクナッタ。

シダイニ、ワレラノナカマハ『カミ』ノモトニカエツテイルノダ。ジブンノ『ソンザイイギ』ヲモトメルタメニ。

ニンゲンニ、ヒツヨウトサレナクナッタカラナ。

「……」

マア、トキドキモドツテワ、グチヲイッテカエルヤツヤ、ジブンノ

『アルジ』サガシヲシダスヤツモイルガナ。ワレモ、オナジダ。

「一つ、いい？」

ナンダ

「君、精霊だつたんだ」

蛇が軽く彼の肩からズルリと落ちかけた。

いや、発光して半透明な蛇なんて見たことないが、探してみたらいるかもしれないと思って……。

精霊という考えが、全くなかった。思いつかなかった。

蛇が呆れたような顔でため息を付いて、彼の首にもたれかかっているのを見ながら、また周りの観察をしていると、

「ん？」

横に、人が十分通れる道が2つほどあった。それぞれ左と右の分かれ道になっていて、真ん中に看板のような物があった。

気になって、前を歩いていたら彼を引きとめ、看板を指差す。

木でできた看板で、何か暗号のような物が書いてあった。

「これ、何ですか？」

「……」

少し考え込んだ後、口パクで何か伝えようとしているのは分かったが、何を伝えようとしているのかが全く分からなかった。

首を横に振り、「わかりません」と伝えると、彼は考え込んでしまった。

ふと、そこで気づく。

(そういえば、この人今さっきから一言も話してない……)

ただ、表情で相手の気持ちがあったので会話は要らない様な気がしたが、やはり言葉が伝わらないと都合が悪いときがある。今回みたいに。

「帰ったら、カミィラにこの世界の字教えてもらわないと」

そうと決めれば、さっさと儀式を終わらせて帰ろう。と、分かれ道の右側の方へと向かった。

何故、右の道を選んだ？という方が多いだろう。理由は簡単。

『女の勘』

である。

色々な出来事を勘や経験から解決していた零香は、自分の勘を信じて彼と蛇を置いて進んだ。

だが、今回は信じないほうが良かった。彼らから離れるべきじゃない

かった。

少し力を込め、手から炎を出し、明かり代わりに進んでいたときだ。前に右足を出すと、カチツという軽い音が聞こえた。

「ん？」

その音をあまり気にも留めず、数歩歩くと、後ろから誰かが走ってくる音が聞こえた。後ろを振り向くと、彼が慌てた表情でこちらに走りながら、手を伸ばしていた。

零香は、何か起きたのだろうか？と彼の方へと数歩歩いた。すると

「ぎゃあっ！」

突然、足元が開いた。

気づいたときには遅く、零香の体は暗闇の中に吸い込まれていった。

数秒後、零香の落ちた穴から水に何かが落ちた音と土砂が崩れた様な音が聞こえた。

彼は、後悔と悔しさを表情に出しながら穴の中を見つめていた。

心の中で、彼女とどうか無事に再会できる様祈りながら、彼は彼女が選んだ道とは反対の道へと歩みを進めた。

洞窟にて1（後書き）

看板について

字は日本語でも英語でもなく、カミイラたちの世界の字です。
零香には、暗号にしか見えない代物でした。

書いてあった内容

右に進む者、命知らずの挑戦者。後ろを向くな、走り続ける。さす
れば、正しき道にたどり着かん。

左に進む者、用心深き者。見た目に騙されるな、己を信じよ。さす
れば、道は開かれん。

と書いてありましたww

実は、零香が戻ろうとせずその場で彼を待っていたら、トラップは
発動しませんでした。

もちろん、先にも色々とは掛けられていたんですがね。最初で落ち
る、主人公。

ちなみに、これを考えたのは兄です。

洞窟にて2

彼らと離れ、見事に穴の中に落ちた零香というと

「はあ……たすかったあ……」

運よく、穴の底に地下から湧き出していた水が溜まっていたため、体が地面とぶつかる事はなかった。

だが水面から上がると、服はびしょ濡れだし、洞窟の中はやけに冷え切っていて体から体温がすぐに奪われた。

「さむっ……おっ、薪みたいな物発見」

暗闇の中を手探りで見つけたのは、木の棒のようなものだった。暗闇だから、手の感触でしか分からない。

この木に火をつけて、明かりと暖をとろう。

寒さで震えるのを耐えながら、手に力を込める。

すると、ポツという音と共にちいさな火の玉が現れ、辺りが照らされた。そのまま火を持っていた棒につける。

棒に火がついたのを確認すると、手から火を消し、棒を地面に置い

て座り、暖をとった。

「暖かい……まだ木あるかな？」

座ったまま、周りを見回すと少し奥にある石の下に、薪の様な物が沢山あった。

これでもっと暖かくなる。近くまで行き、薪の一つを掴んで引っ張る。

「んっ、引っ掛かってて、なかなか取れない……っ、よっ、と……！」

力を込め、勢いよく引っこ抜くと薪の山が崩れ、上に乗っていた石が落ちてきた。

慌てて、薪を抱きしめながら後ろに下がった。

ガラガラガラッともものすごい音をたてながら、さらに上から石が元いた場所に降り注ぐ。

もし、あのままその場にいたら大量の石に押しつぶされて、死んでいただろう。

想像するだけで、背筋がゾクツとした。

ようやく音が治まり、石が落ちてこなくなった頃にはもう火が小さくなっていた。

慌てて、持っていた薪をそっと火の上に重ね、もう一度石が落ちてきたところを見る。

「あれ？道がある……」

そこには、つい先ほどまではなかった整備された道があった。石で隠されていたのだろう。そつと、石を乗り越え覗いてみると、奥で何か光っているのが見えた。

「何があるんだろう……くしゅっん！……行ってみよう」

くしゃみをしながら、置いていた火のついた薪を拾い、石の下からもう一つ薪を取り出し、新たに出てきた道へと足を踏み入れた。

足元が少し水で濡れていて、歩きたび音が鳴る。

道の所々に人骨のような物が無残な姿で残っていた。だが、ネズミ一匹見当たらない事が不思議でならなかった。

いや、正確には水と自分の歩く音しか聞こえないのが、不思議でならなかった。

それでも黙々と先に進んでいくと、ようやく光の正体が分かった。

それは、大きな空洞の地面に描かれていた魔法陣だった。魔法陣は、鈍く点滅しながら光っている。つい先ほどから見ていたのは、この光だったのだ。

「なんで、こんなところに……」

黒魔術などの本に書いてあるような、六つの星が大きく描かれ、その中心に小さな石が埋まっていた。その星たちから中心に向かって線が描かれ、大きな棺の様な物に繋がっていた。

恐る恐る、その棺に近づく。

棺は、ガラスで作られ、中にあるものが見えるようになっていた。持っている松明で中を照らした。

「……………っ！」

中に入っていたのは、色とりどりの花とその花の蔓に巻かれて、瞳を閉じている20歳ぐらいの女性だった。

紫色の長髪と白い肌、綺麗な白と金の装飾品をあしらったドレスを着て、彼女は瞳を閉じていた。まるで、眠り姫の様に眠っているが、胸は上下に動いていなかった。

「死んでる……………」

そつと棺に手を触れる。すると、カタンツという音と共に蓋が開いた。

驚いたが、ゆっくりと蓋を下に落として彼女を見つめる。

死んでいるとは思えないほどに、綺麗だった。今にでも目を開けて、動き出しそうだった。

突然、彼女に触れてみたいという気持ちが湧いてきた。

持っていた松明を傍に置き、ゆっくりと、手を彼女の頬に伸ばした。
だが、彼女に触れた途端

「っ!？」

腕に蔓が巻きついていて。勢いよく引き剥がし、後ろに下がる。

蔓は棺から何本も伸び、自分を捕らえようと迫ってきた。そして、
動かないはずの彼女がこちらを見ていた。

その目は暗闇に近い環境でも、赤く光っていた。獲物を狙うように、
見つめてくる。

その瞳から、何故か目が離せなかった。

動けないでいる私に、蔓が容赦なく巻きついて身動きが取れなくな
る。

身動きが取れない私に、彼女はゆっくりと顔を近づけてきた。

そして、笑みを浮かべた。

『ミツケタ』

「見つけた…？何がっ」

全てを言う前に、彼女に顔を横に向けさせられた。勢いよく向けさ
せられて、首からゴキリツと音がした。痛い。

痛みで少し涙が出たが、首に熱くそしてぬるつとした感触に、体が震えた。

この感触は

認識する前に、首に鋭い痛みを感じた。

耳の近くで、何かを嚼る様な音が聞こえる。そして、だんだんとうまく体に力が入らなくなってくる。

視線を下に向けると、服が赤く染まっている。

ああ、そうか。血を吸われているんだ。

頭は冷静だった。

体に力が入らなかったが、意識だけはつきりとしていた。

軽く手を握ってみる。まだ動くのを確認して、手に意識を集中する。

『アア、オイシイ』

そう呟きながら私の顔を覗き込んできた彼女に、笑顔を見せる。

彼女は何故か頬を赤く染めながら、私の顔をじっと見つめてきた。

そして、私の頬に手を添えた。

冷たくて、少しだけ暖かい。

『オモシロイネ、キミ。コワガラナイノ？』

「……………怖くない」

これ以上の苦しみを味わったから。怖さを知っているから。

「……………だから、ごめんね……………？」

『エツ？』

そして、手に込めた意識を驚く彼女に向けて解き放った。
解き放った意識は、彼女を吹き飛ばし、体に巻きついてきた蔓を切り裂いた。

「かはつ、はあ……………はあ……………」

急に自由になった体と意識が合わず、眩暈がして膝が地面についた。
周りには、切られた蔓がまだ動いていた。霞む目で、吹き飛ばされた彼女を見る。

『コレハヨソウガイ、ダツタカナ。モウ、ヨウシャシナイ』

彼女はふらふらと立ち上がりながら、こっちを睨みつけているのが分かった。

だが、もう抵抗できない。体が重い。手を動かそうとするだけで、

眩暈がする。
意識が、朦朧とする。

『アハッ、モウオワリ?』

「っ!」

彼女の笑う声がすぐ近くで聞こえた。

髪の毛を? まれ、むりやり顔を上に向けさせられた。意識を必死に保ちながら、彼女の顔を見る。

彼女は、残忍な笑顔を浮かべていた。その口からは、私の血が彼女自身の血が流れていた。

『サイゴマデテイコウシテヨネ、ツマラナイジャンナイ』

「無理…言わないでよ……」

『フフフフフツ、ドウサレタイ? ナニサレタイ? クビヲキツテ
アゲヨウカ、ソレトモカラダダケノコシテ、オトモダチニデモオク
ロウカ?』

「殺すなら、さっさと殺して」

死なせてくれるなら、楽に死なせてよ。

その返答に、彼女は不満げだったが私の顔に爪で傷をつけながら、笑っていた。

『イイヨ。コロシテアゲル』

彼女の言葉を聞いて、すぐに目を閉じる。

目を閉じると、この世界で会った人たちの顔が浮かぶ。

さよなら、エリミア。さよなら、カミイラとパルサーシャさん。

ごめんなさい、リュナミスさん。ごめんね、リック君。もう、一緒に遊べない。

私は、家族の所に行きたいんです。

優しくしてくれて、ありがとう。こんな私に、親切にしてくれてありがとう。

「さよなら……」

そして、私は意識を無くした。

意識がなくなる前、誰かに名前を呼ばれた気がしたが、気のせいだろう。

必死に私の名前を呼ぶ声を、私は無視した。

『バイバイ』

最後に、彼女の笑い声が聞こえた。

洞窟にて3（前書き）

前回から結構日数が経ってしまいました…（・・・）

そして、勢いで書いてしまったので急展開で話が進んでいます。

本当はギャグを目指したかったけど、前回があれだったのでシリアスです。

前置き長くてすみません。それでは、どうぞ

洞窟にて3

少し時間をさかのぼり、二人を捜索中の騎士団+。

あれから熊を無理やり起こし、兵士の一人に熊の言葉を通訳してもらいながら、森の奥へと進んでいた。

熊の説明だと、もうそろそろ着いてもいい頃合いだった。

途中、カミイラが歩きつかれ「背中貸して〜」と言っていていきなり飛び掛ってきたので、仕方なく彼女を背に背負い、彼は歩いていった。

「まだ着かないのか」

「……もう少し先、だそうです。入り口に分かりやすく看板があるはずだ、とも言っています」

答えたのは、熊と共に先頭を歩く、あの女装好きの兵士だった。

実はこの兵士、動物を使った諜報任務を得意とし、こうして動物達と意思を通じて会話をする事ができる。

まあ仕事は完璧なのだが、性格が……。趣味も重なり、今までいろ

いろな隊をたらい回しにされて、4年前この隊に所属することになった。

基本、この隊は王子の護衛を中心に様々な仕事をこなす。その中で彼の能力は、重宝している。

今回も、役立つている。の、だが…………。

「計画が狂うな。せつかく僕の作った色々な服を着せようと思っ
てたのに〜！」

「わかったから、さっさと歩け」

「むっ、了解です。はあ……………」

肩をガクリと落とした状態のまま、隣を歩く熊を叩く兵士を見ながら、ため息をつく。

そして、いまだ手に持っている包みを見つめた。

彼女に渡そうと思っていた物だ。カミィラに買って帰ったモルルと一緒に買った。

もう一度ため息をつき、その包みをコートのポケットに入れる。
すると、上から微かに笑い声が聞こえた。

「…………カミィラ、何がおかしい」

「ふふふっ、なんでもないよ〜」

それでも笑う事を止めないカミィラを地面に落とす。そのまま先に進む。

ある程度進み、後ろを振り返ると「痛いよ」と言いながら地面に座り込んでいるカミィラに、パルサーシャが手を伸ばす。

パルサーシャの手を握りながら、カミィラは立ち上がった服についた土を払い落とした。

側にはエリミアがいた。

頬を膨らませて、怒りをあらわにしているカミィラを見て、苦笑する。

「自業自得だ」

そう呟くと、目の前を歩く兵士が「看板ありましたよ、副隊長」

という呼び声が聞こえ、遠く微かに見える熊と兵士の下へと、走る。

「この子が言うには、この奥にいるそうですよ。こんなことを計画した主が」

そういいながら、兵士は看板の横にある洞窟の入り口を指差した。

看板には『守護の洞窟』と書かれていた。

守護の洞窟、それはこの国に点々とある精霊を祀った洞窟の名称だ。それぞれの洞窟の奥に精霊の宿っているという法具がある。

クロッカス村の守り神の精霊の剣は、ここに奉られている物だった。

何故、こんな所に二人を連れて来いと言ったのだろうか。

普段、ここには誰も訪れない。訪れたとしても、祭りの時ぐらいでリユナミスも数回程度しか来た事がない。

奥に行った事があるのは、パルサーシャぐらいだろう。彼女はここ
の管理者だ。

彼女なら、何か知っているかもしれない。

「パルサーシャ、道案内できるか」

彼女は、軽いため息をつきながら頷いた。

「面倒なんだけどねえ。道案内なんて、あたいのしょうに合わないよ」

彼女はそっぴいながら、リユナミスの横を通り過ぎ、洞窟の奥へと入っていった。

リユナミスは、隊の兵士達に命令をし、先頭を照明系の魔術師を一人歩かせ、パルサーシャの後を追った。

洞窟の中に入ると、生暖かい風が体に纏わりつくように吹いていた。そんなことは気にも留めず、パルサーシャは明かりを持たずに先に進む。その後ろを魔術師、リユナミス、カミイラとエリミア、王子の執事がついて行く。そのさらに後ろを兵士達が歩く。

最初、狭く一人ぐらいしか通れなかった道は、進むにつれて幅が広くなり5分程度歩くと、三人が横に並んで通れるぐらいの幅になっ

ていた。

周りを見渡しながら、リユナミスは精神を研ぎ澄ませていた。周りの兵士達も同じようにしているのがわかった。ただ一人、パルサーシャだけが鼻歌交じりに先に歩いていった。彼女は、このにおいに気づいていないのだろうか。

魔物特有の魔力のにおいを。

魔物はあらゆる魔力を餌とし、肉体を保とうとする。いや、本体の精神を保とうとする。

魔物とは肉体のない精神体だ。魔力が無くなれば、消える。そうならないように、あいつらは魔力を持つモノに憑依する。そして、魔力を持つ物を餌に自分の力を貯めていく。

神を殺すために。

そして、餌の対象にされるのは、ほぼ人間だ。しとめ易く、のり移りやすい弱い動物。

魔物に狙われ、食われたモノは同族か魔物の僕になる。

だが、魔力を貯めれば貯めるほど特有のにおいを発する。それは、血のようなにおいに近い。

騎士団と魔物退治や傭兵の育成を活動の生業としている『ギルド』の人間は、訓練で魔物のにおいを体で感じる事ができる。

そしてこのにおいがあるということは、この洞窟のどこかに魔物が潜んでいるということだ。

もしかすると、熊の主とは魔物の事なのかもしれない。だが、あの

走り始めて、すぐ目の前に光が見えた。そして、魔物のおいも強くなった。

光の中に彼女の姿が見えた。彼女は、魔物となった女性の目の前にいた。抵抗せず、魔物に髪を引つ張られた状態で向き合っていた。

「零香っ！！！！」

いつの間にかエリミアが追いついてきていた。同時に部屋の中に入ると共に、魔物がこちらを見ながら笑った。

彼女は、そのままの状態で瞳を閉じて、笑みを浮かべていた。次の瞬間

「バイバイ」

彼女の体に沢山の蔓が突き刺さった。そして、彼女はゆっくりと血を流しながら、地面に倒れた。

「いやああああああああああああああああああああ
つ!!!!!!!!!!!!!!」

エリミアの悲鳴が聞こえる。

後ろから同じようなカミィラの声が聞こえる。

だが、視線だけは倒れている彼女しか見えなかった。何も考えられなかった。

近くで、魔物の笑い声が聞こえる。

「アハハハハハハッ！！イッポオソカッタネ？ザンネ〜ンデシタ
」

血だらけの彼女を、カミィラが泣きながら必死に彼女に治癒の魔法を掛けている。だが、傷は塞がらず、彼女の周りに血だまりができていた。

エリミアが彼女の名前を呼ぶ。だが、彼女はその瞳を開こうとしない。

「地獄の業火よ、焼き尽くせ!!」

怒りを魔力に込め、解き放つ。魔力は火の塊となり、複数にわかれ、目標を焼き尽くそうと追尾する。だが、魔物は蔓をうまく使いそれを避ける。

蔓に座り、魔物は笑みを浮かべながら見てくる。

『レイセイニナラナイト、ワタシハタオセナイヨ?キシサマ』

「黙れ」

『クスッ、アノオンナノコトガソナニダイジダッタノカナ?』

「黙れと言った」

『……アゝア、ソナコトイッテイイノカシラ。ジヨウキヨウセイ
リシテミテヨ』

「黙れっ!」

『アナタノタイセツナヒト、モットコロスコトモデキルノヨ?ホラ、
ウシロ』

魔物が指差す方向を振り向く。
そして、驚愕した。

「お兄ちゃんっ…!!」

カミイラや兵士達の数人が蔓に首を絞められ、空中に浮いていた。パルサーシャも王子の執事も皆抜け出そうと、魔法を使ったり剣で切っていたが、すぐに新たな蔓に捕らえられていた。地面には、すでに息絶えたであろう自分の部下達が倒れていた。その体はやせ細り、ミイラの状態になっていた。

「貴様っ…!!」

剣で魔物が乗っている蔓の根元を切るが、魔物は軽々と隣の蔓に乗り移った。

『アララ、コワイカオ。デモ、イイワネソノヒョウジヨウ。ゾクツトスルワ』

「外道ッ」

『ヒドイワネ、マアベツニカマワナイケド。ドウセ、ワタシノシヨクリヨウニナルンダカラ』

魔物が指を鳴らす。ハツとして後ろに下がろうとしたが、遅かった。地面から突如生えた蔓が体に巻きつき、体を拘束された。もがけば

もがくほど、蔓はきつく締め付けてくる。
魔物が満面の笑みで蔓から降りてくる。その姿を睨みつける。

『ヤツパリイイワネ、アナタ。ツギノカラダニシマシヨウカ』

魔物は、笑みのまま手を顔に近づけてきた。その手を避けるように顔を背ける。

すると、魔物の表情が変わった。

『ナマイキナコゾウダ。モウアソブノモアキテキタトコロダ、オウラセヨウ』

口調も乱暴になり、怒りの表情のまま魔物は首に触れてきた。

そして、首に顔を近づけてきた。荒い息が首にかかって気色が悪い。

だが突然、体の拘束が無くなる。そして、目の前に居たはずの魔物がいなくなった。

代わりに黒髪が風に揺れているのが見えた。

そして、その場に凜とした声が響く。

「もうこれ以上、何もさせません」

洞窟にて3 (後書き)

はい、わかりやすいですね、最後w

長く日数を使ったわりに、こんな話になってしまいました。すみません。変な表記が多いと思いますが、どうかスルーをお願いします。

そして、存在忘れかけてる王子w

実は書いてる途中に王子がいない事に気がつきました。本当は、途中で登場する予定だったのに…orz

次のお話は、今回よりも更新が早いと思います。お楽しみに^^

洞窟にて4（前書き）

お待たせいたしました！今回は早い更新です。

眠い目を擦りながら書いたので、少し変かもしれませんが、スルーしてください。

それでは、どぞ。

洞窟にて4

『ナツ！！アンタハワタシガコロシタハズッ！』

「ッー！」

声のする方を向くと、魔物は赤く発光している鎖に拘束され、壁に押し付けられていた。

目の前に、ついさきほど蔓に刺され、死んだはずの彼女が立っていた。その背中には、緑色の6枚の羽が光り輝いていた。

その傍には、背の高い白い騎士団の制服を着た、銀髪の男が立っていた。その手には、赤い鎖が握られている。

「もう、貴女の好きなようにはさせません」

彼女はそういうと、こちらに振り返り、魔物に殺された一人の兵士の傍に座る。

兵士の体に手を添え、呟いた。

「目覚めよ」

変化は、すぐに訪れた。

兵士達の体がいきなりオレンジ色の光に包まれたかと思うと、その光が消えた瞬間

「あれ、俺……生きてる？」

「僕は……死んだはずじゃ」

ミイラのような体があった体が元に戻り、兵士達が生き返った。彼女はすぐに立ち上がり、蔓に拘束されていた人たちを見ると、蔓に呼びかける。

「元の姿に戻りなさい」

彼女の言葉に従うように、蔓は徐々に地面の中に戻っていった。

蔓に捕まっていた人たちは、啞然としながら彼女を見ていた。魔物もその光景に驚きを隠せないようだった。

彼女は、部屋の中にあつた棺のような物のところへ行くと、棺の中に立ち、手を胸の前で合わせた。

その姿は、まるで聖女の様だった。

「全ての者に癒しを」

その言葉と共に、空中から様々な色の光が舞い降り、その光が体に触れると徐々に体から痛みが消えていった。腕を見ると、蔓の巻きついていた跡が綺麗になくなっていった。傷も全く無い。体力が戻ってきた。

それは周りも同じようで、驚きの声が所々から聞こえた。

彼女は棺の上から微笑むと、ふわりと浮かび上がり、そのまま魔物の頬に触れた。

「こんなこと、もう止めましょう」

『ナニヲイツテルノ』

「貴女の息子さんが、悲しみますよ」

その言葉に、魔物が反応したのがわかった。彼女はそのまま話を続ける。

「出て来て下さい、アルテミシアさん。息子さんに会いに行きませう」

その時、いきなり魔物の悲しみの表情になった。目には涙を浮かべ

て、ついさきほどの魔物の表情とは、全く違う。目に意思が宿っていた。

「あぁっ、あぁ……………」

彼女は微笑むと、魔物を抱きしめた。いつの間にか、魔物を拘束していた鎖は消え、傍にいた男性は、少し離れた場所に立っていた。その顔には、微かに笑みが浮かんでいた。

「アルテミシアさん。言ってく下さい」

「……………わたっ…わたしは…レナードに…あい…たい……。もう、こんなこと…したくない…」

そっぴいながら、必死に何か耐えながら涙を流しているアルテミシアと呼ばれた女性。
もしかすると、魔物に精神を食われる前の、本当の肉体の持ち主なのだろうか。もう、あのおいは感じなくなっていた。

「ありえない……………」

誰かがそう言った。

魔物に肉体を奪われた人間は、もう元に戻る事はない。戻ったとし

ても、それはただの化け物だ。精神が崩壊している。何度も人間が化け物になる所を見てきた騎士団のメンバーにとって、目の前の出来事は衝撃の事実だった。

彼女はいまだに泣き続けているアルテミシアから少し離れ、手を宙にかざす。

すると、彼女の手の前に紫色に光る球体が現れた。球体はそのまま地面にゆっくりと落ちると、地面の魔法陣の中に吸い込まれた。彼女は手を下ろす。

「これで、レナードさんに会いに行けます。でも、貴女の精神はそう長く持ちません。長くて、5分程度でしょう。それでも、いいですか？」

「それでも……いい。…あの子を見ることが出来るだけで、十分……」

そういいながら、アルテミシアが魔法陣に足を踏み入れた。その瞬間、その姿は掻き消えた。

アルテミシアの姿が消えると、彼女は傍に歩み寄っていた銀髪の男の首筋に触れる。

彼女の手から白い光が現れ、そのまま地面に落ちた。何回か光の球が転がると、球からいきなり白く巨大な狐が現れた。赤い目に九本の尻尾を持っていた。

狐は軽く背伸びをした後、彼女の傍まで歩き、こちらをちらりと見ると忽然と姿を消した。

彼女は、男の頭を数回撫でると、振り返って軽く礼をした。そして自分の胸に手を当てながら

「この子を、お願いしますね？」

優しく微笑んだかと思うと、背中の六枚の羽が消え、彼女の体が前に傾いた。

「あぶないっ！」

咄嗟に彼女が地面に倒れる直前に、彼女を抱きしめる。彼女はスヤスヤと眠っていた。体のあちこちに微かに傷痕があったが、止血していた。服も何故か新品のように真っ白だった。

頬に微かに爪で引っ掛かれたような傷があったため、それは魔法で治した。

少し顔色が悪いようだったが、寝顔は穏やかだった。

少し腕がつかなくなり、少し彼女の体を動かす。それでも彼女はずっと眠っていた。

地面に座り、彼女の体を自分にもたれかからせる様にし、彼女の前髪を梳く。

(いったい、お前は何者なんだ……)

リユナミスは、そっと彼女を軽く抱きしめた。彼女の心臓の音が伝わってくる。

その音が心地よくて、瞳を閉じようとした瞬間。

「ニヤニヤ」

「……………」

兵士達とカミィラ、さらにパルサーシャが覗き込んでいた。エリミアは彼女のほうが心配なようで、彼女の服の裾を引っ張ったままじつと彼女の様子を窺っている。今まで自分が何をしていたのかを思い出し、エリミアに彼女を渡し、立ち上がる。片手には愛剣を持って。

「……………今見たこと、全部忘れる」

「無理に決まってるじゃないですか、副隊長」

「いや、魔法映写機持つてくればよかったな」

「そそ、あの副隊長の安心したようなあの笑み！残しておきたかった！」

「後で覚えておけ、その兵士ども。帰ったら練習メニュー特別に、200回ずつ追加だ」

「わたしは記憶に焼き付けたから大丈夫！帰って絵に描いて、一生の宝物にするわ！」

「記憶から消せ！そんな物を一生の宝物にするなっ！」

「あつ、それワタシも欲しい。描いたら頂戴」

「いいわよー カミイラちゃんの頼みなら、なんでもするわ」

「勘弁してくれ……」

「！！」

「私を除者にして、楽しむなんて駄目じゃないですか」

いきなり気配を消して後ろに現れた銀髪の男に驚き、思わず体がビクリと反応してしまった。

男はニコニコと笑いながら、軽く礼をした。

「はあ、さすがに首が痛いですね。10年もアレをつけていたから、当然でしょっけど」

首を回しながら、男は兵士達の怪我の治療をしていた王子の執事に、視線を向ける。

執事はその視線に気づいたのか、すぐに治療をやめ、男の目の前まで来ると、膝を落とし頭を下げた。

「殿下、ご無事でしたか……っ」

その言葉に、執事と銀髪の男を除いた人間が驚いた。

確かに王子と同じような魔力を感じる。そして、真つ白な手袋に皇族特有の紋章が刻まれているのを見て、慌てて膝を折り、頭を下げる。

今まで顔を見たことが無かったが、まさかこんなに若い男だとは思わなかった。

「申し訳ありませんでしたっ、すぐに殿下と気づく事ができず……」

「ああ、別にかまいませんよ。私のほうが悪いのですからね」

皇族とは思えない言葉をサラリと言った殿下に驚き、下げていた頭を上げる。

殿下は笑顔のまま、こちらを見ていた。そして、わざわざ同じ目線になるように腰を下ろし、頭を下げた。

その行動は予想外だった。

「私が悪いのです。彼女を私の事情に巻き込んでしまい………申し

訳ありません」

その言葉に、つい先ほどの光景が頭の中で再生された。

彼女の白い肌に突き刺さった蔓、大量の血。倒れた後も全く動かなかった彼女の体。

唇を強く噛み、その記憶を頭の中から消す。

「ですが、彼女は不思議な力を持っているのですね」

殿下はそう言いながら、彼女の顔を見ていた。彼女ははまだエリミアに抱かれたまま、眠っている。その顔は安らかだった。

彼女は別の世界から来たと言っていた。さらに、膨大な魔力を簡単に制御できている。

そして、ついさっきの、あの行動。あの時すぐには気づかなかったが、普段の彼女とは雰囲気違っていたような気がする。

本当に、彼女は何者なのだろうか。

殿下は眠る彼女を見ると、立ち上がり、執事に少し耳打ちをした後、口笛を吹いた。

すると、彼の隣に先ほど見た白い狐が現れた。殿下は狐を軽く撫でると、こちらに手を差し出した。

「さあ、急いで帰りましょう。もうすぐ日が明けるそうですよ」

「はっ！」

すぐに兵士達に命令を出し、帰る準備をさせる。怪我人は殿下が呼び出した狐の背に乗せる事になり、兵士達の中で足に怪我を負った者だけ乗せた。

他の兵士達は自力で歩けるようだったので、徒歩で帰ることにして……。

「エリミア、いい加減に動け」

「……………」

「エリミアちゃん、どうしたの？」

「全く反応が無い」

ずっと眠る彼女を抱きしめたまま、座っているから、なかなか帰れない。

何度も声をかけたが、全く反応が返ってこない。

仕方ない、とエリミアの肩に触れようとした瞬間、眠っていたはずの彼女が目を覚ました。

ゆっくりと起き上がる彼女に、今まで反応が無かったエリミアが動いた。

「おはようございます、零香」

「……私………そっか………」

まだ目が覚めたばかりで反応が鈍い彼女を、エリミアは立ち上がらせ、服についた土を払う。そして、こちらに振り返り、目を閉じた。

「開け、転移の門」

その言葉と共に、エリミアを中心に、巨大な紫色に光る魔法陣が展開した。

魔法陣は点滅を繰り返しながら、光り続けていた。

「皆さん、中心に集まってください。村まで転移します」

「出来るのか」

「私には、これぐらいしか出来ません」

これぐらいしか……… 上級魔法を簡単に呪文無しで発動させておいてか………。

実は魔法にも精霊と同じように階級がある。

上から神級魔法、上級魔法、中級魔法、初級魔法、最下級魔法だ。

俺が使えるのは、初級魔法全てと中級魔法の火系統しか使えない。

殿下は中級魔法と上級魔法を2つ程度使っているのは見たことがある。

エリミアが発動させた魔法は、上級魔法の中でも特に難しい転移の魔法だ。普通の人間なら、呪文無しで発動させる事は不可能。俺でも無理だ。

エリミアの後ろに立っている彼女も、初級魔法ではあったが中級魔法並みの回復量だったのを思い出す。

彼女達は常識外れの力を持っているのだと、改めて確信した。

「リユナ兄〜！皆、集まったよ」

カミイラの声にはっとして、自分がずっと同じ場所で考え事をしていたのに気づくと、すぐに魔法陣の中心へと歩いた。すでに、全員が集まっていて、皆興奮しているようだった。しょうがないだろう、寝ていないのだから。

「いきます」

無表情のまま、エリミアが魔法陣に触れると、一瞬で暗い洞窟の中から、明るい外に出た。

日差しが眩しい。

目が光に慣れ、周りを見渡すとすでに村の家の前だった。

「うはあ〜……ようやく寝れる……」

「副隊長、すぐ部屋に行ってもいいですか？」

「おなかも減ったし、眠い〜」

そういう兵士達に、パルサーシャがそれぞれの部屋に連れて行った。殿下は執事と共に、カミィラが部屋に行った。いつの間にか、あの狐は消えていた。残った3人はというと

「……………スウ……………」

「……………ZZZZ……………」

「……………」

家に入ってすぐの椅子に座り、爆睡していた。

パルサーシャが2階の部屋に案内し終わり、カミィラを寝かしつけ、下に降りてきた時軽く笑いながら、彼らに毛布をかけた。

ただ、零香に毛布をかけたとき、パルサーシャは彼女の寝言を少し聞いた。

「……………ごめん、ね……………死ねな、かった……………」

眠りながら涙を流し、そう呟いた彼女の頭をパルサーシャはただ黙

つて1回撫でた。

涙を拭き、ずれた毛布を直し、パルサーシャも自分の部屋に戻り、眠る事にした。

洞窟にて4（後書き）

この話を書いているときに、いつの間にか8000アクセスを超え、9000アクセスを突破していた事に気がつきました。

ありがとうございます！^^

嬉しすぎて、吐血しかけましたw

いつも見てくださり、ありがとうございます。

これからもどうか、よろしくお願いします^^

感想など、お待ちしております。

未来の『夢』（前書き）

一週間ぐらいかかってしまいました^^・本編更新です。

毎日、いつも眠いです。さらに、暑くて毎日アイスを4本ぐらい食べる毎日ですw

∴ 体重大丈夫かな？（・・∴）

ぐだぐだ話ですいません。では、どぞ。

未来の『夢』

夢を見た。

「私」の体は少し半透明で、どこでも通り抜けられた。幽霊になった気分だった。

「私」は、西洋の城のような建物のある一室にふわりと浮かんでいた。

部屋の中には、沢山の人が集まっていた。その中に見たことのある人がいた。

カミイラ、パルサーシャ、リユナミス、レナード、シェイド、ミュー、あの笑顔の人。

皆、ベットを囲んで真剣な顔で誰かをみつめていた。「私」は気になってベットを覗き込んだ。

そこには私はいた。

髪がとても短くなってるけど、私だった。「私」は私の手に自分の手を重ねた。

私は、瞳を閉じたまま胸を押さえていた。顔には汗をかいている。時々、目を薄く開けて何かを呟いていた。その言葉にカミイラ達が

口を開いて、何か話していたが、私には聞こえていないようだった。自分で自分を見ていることに複雑な気持ちを抱きながら、そっと手を私の頭にのせる。

「……………頑張つて、まだ死んだら駄目。まだ、貴女にはやる事がある」

思ってもいなかった言葉が自分の口から出てきた。

「私」の言葉が聞こえたのか、私は震えながら目を開いた。口が小さく開き、呟いた。

「……………だ、れ？」

「……………さあ、誰でしょう、ね」

「私」は失笑しながら、彼女の目に手をそえた。

「……………すぐに楽になるから…今は、おやすみ」

私は、「私」の言葉に頷きながら開いた目をゆっくりと閉じた。

「私」は彼女の顔から手を離すと、心配そうに彼女を見つめるカミイラの頭に手をのせる。

「私」の姿が見えないようで、カミイラはいきなり目を閉じた彼女に必死に声をかけていた。

「大丈夫、すぐに良くなるからそんなに心配しないで……」

小さく呟きながら、カミィラの頭を撫でる。カミィラは気づかず、その瞳に涙を溜めてベットに顔を伏せた。

ふと、視線に気づいてカミィラの横にいたリユナミスとレナードと笑顔の人を見る。

彼らは驚いた表情のまま、「私」を見ていた。気のせいかな、と軽く彼らの目の前で手を振った。すると、後ろに後ずさった。

「私」が見えているのか。

「私」はそつと三人を手招きしながら、部屋の隅に飛んでいった。彼らは少し戸惑いながらも、ついてきてくれた。

「私が見えますか？」

そういうと、彼らは同時に頷いた。そして、威嚇するような目を向けてきた。

三人とも、冷たい瞳の奥に敵を見るような感情と怒りが感じられた。

「私」は彼らが安心するように、笑顔を浮かべた。

「彼女は大丈夫ですよ。そんなに弱くありませんから、すぐに良くなります」

「……何故そんな事がわかる」

「だって、彼女は私なんですよ？自分の体のことぐらい、わかります」

「お前が彼女のわけが無い。彼女はここにいるじゃないか」

リユナミスの言葉には、苦笑しかできなかった。

自分でも何故こんな姿になったのか、わからない。だけど、「私」は私だ。

不審げに「私」を見る彼に、「私」は手を伸ばした。彼も手を差し伸べてくれた。

だけど、その手はすり抜け、彼は呆然と自分の手を見つめた。私はわかりきっていたことなので、何も感じなかった。

ただ、何故か目の前の視界がぼやけて見える。頬に熱い物が落ちていくのがわかった。

レナードが私の頬に手をそえた。彼の体温が伝わってくる気がした。彼はもう、「私」を警戒してはいなかった。

「何故泣いている」

「……さあ、自分でもわかりません。何が悲しいのかな……？」

「……お前は笑っていればいい」

そう言って、彼は優しく微笑んだ。

私は小さく頷くと、自然と笑みを浮かべる事ができた。すると、い

きなりレナードが私の頭の上に手をのせてきた。
触れる事ができないのに、彼は「私」の頭を撫でてくれた。

「ありがとうございます、レナードさん」

「別にかまわない」

彼は普段の顔に戻ると、「私」の頭から手を離れた。そして、私のいるベットへと歩いていった。

彼の後姿を見ていると、不意に「私」の目の前に手が差し出された。

「リュナミスさん？」

「……手を」

「私」はおそろおそろ彼の手に触れた。すると、ぎゅっと暖かい手で握られて引っ張られた。

驚く間もなく、「私」は彼の腕の中に居た。彼の心臓の音が耳元で聞こえた。少し早い鼓動が耳に入ってくる。その音が、心地良いと思っ

「何で…触れる事ができるんですか…っ？」

「さあ、な。触れたいと思ったから、触れられた」

そう言つて、抱きしめたまま「私」の頬に手をそえた。いつの間にか、また「私」は涙を流していた。彼は涙を指で拭いながら、苦笑した。

「そんなに泣き虫だったのか？お前は」

「私も……なんで泣いてるのかわからないです。だけど……」

とても胸が温かい。こんな感情は久しぶりだった。

彼は少し微笑みながら、「私」の額に顔を近づけた。その途端、額に温かくやわらかい物があたった。

「私」は思わず、額を手で隠した。たぶん、今顔は真っ赤に染まっているだろう。

彼は笑いながら、「私」を強く抱きしめた。

「……まるで、昔のお前に会つてる様な気がする。反応が懐かしい」

「私で遊ばないでください」

「それは聞かなかつた事にしておこう。俺の楽しみが減る」

彼が意地悪そうな笑顔を浮かべた。「私」は彼の足を勢い良く、踏んだ。

痛そうに足先を握る彼を、いい気味だ、と思ひながら見た。

痛がるリユナミスの横で、天使の笑みを浮かべる人が腹を抱えながら笑い声を出すのを耐えていた。

「くっ、君は本当に尻にしかれるタイプじゃないのかなっ？あはは」

「笑わないでください、殿下」

「いや、これを笑わず何を笑うと言っんですか。ははははっ」

そんな彼らを見ていると、ふと体から光が飛んだ。手を見ると、ほとんど姿が薄くなっている。

彼らもそれに気づいたのか、慌てて「私」の手を握った。

「私」は二人に笑顔を向けながら、そつと手を外した。

「もうそろそろ…時間みたいです」

「もう行ってしまうのですかっ、もう少し、あと少しだけでも」

「私」は横に首を振った。

「もう、私の役目は終わったようですから」

「せめて、ここに来た理由だけでも言ってくれないか」

「……たぶん、ですけど…覚えてますか。私がまだこの世界に来て

最初の頃、洞窟で……」

「っ！何で、その話になるのですか」

「私は、その時の『私』です。カミィラの家で寝ていたら、いつの間にかこんな事に」

彼らはその言葉で、何かを感じたのだろう。すぐに口を閉じた。暗い表情の彼らに、「私」は胸に両手を重ねながらそっと呟いた。

「……よかった」

「「えっ」」

「いえ、楽しかったです。まさか、未来をこんな形で体験できた事が、とても嬉しい」

「何故、ですか」

「皆さんの成長した姿を見ることが出来たからです。私にも、こんな未来があるという可能性を、見る事が出来ました」

「何が言いたい……」

「もう、いつ死んでも悔いはありません。皆さんのために、私はいつ死んでもいいでしょう」

「そんな事言うな!!」

声を荒げ、彼は「私」の肩を掴んだ。

顔が、とても悲しそうで苦しそうだった。何故、こんな顔をしているのだろうか。

「私」は、こんな顔をして欲しかったわけじゃない。

「なんで、いつもそうなんだ!何故、生きようとしない!」

「……………」

「俺達は、お前に生きて欲しい!お前が、傍にいてくれるだけで…
…幸せになれるんだ」

「それに、僕たちは貴女に沢山助けてもらったんです!恩返しさせてください」

「……………」

「私」は何も言えず、ただ彼らから目をそらすだけだった。

つらい。聞く事が、言葉が心に重く沈む。嬉しいのに、心の奥ではその言葉を否定した。

だって、『私』は生きては、駄目なのだ。

「私」は彼から離れるように、窓の近くまで行く。

彼は「私」を捕まえようと腕を伸ばすけれど、「私」の体はすでに形が崩れ始めていた。

彼が腕に触れた途端、光と共に腕が溶けて消えた。

「　　っ!」

「本当に、お別れですね」

「私」は瞳から流れる涙を拭わず、最後に一度、私の眠っているベツトを見た。

そして、目を閉じる。

「……さよなら、いつか、理由を話しますね」

「　　待つてくれ!まだ、言いたい事がっ」

「私が、何で生きようとしなのか、いつか話します」

「だから、待つててくださいね?」

「私」はそう言って、窓をすり抜けた。体が、空中に投げ出される。窓から、彼らが身を乗り出して必死に腕を伸ばしているのが見えた。「私」はそのまま、光になって溶けた。

「んっ……」

軽く体を動かして、目をゆっくりと開く。すると、木の机が目に入った。勢い良く起き上がると、見たことのある台所や暖炉があった。

「…夢だったのかな…」

だけど、夢のように思えなかった。今でも、手に彼らの体温が残っているように思った。そっと、自分の手を握りながら夢のことを思い出して、彼のやったことを思い出した。

その途端、顔が熱くなり、机に顔を伏せた。何で額にキスしたの！？っていうより、未来の私は彼とどういう関係に……。

考えるだけで、ゆで蛸になった気分だった。

「うわう〜……ものすごく恥ずかしい……」

「何が恥ずかしいんですか？」

「それは……………っ?!」

顔を上に上げると、あの天使の笑みが目の前にあった。思わず、後ろに下がろうとして椅子から落ちそうになった。落ちそうになった所を目の前の人に助けられた。

「大丈夫ですか？」

「だっ大丈夫です。ありがとうございます」

「いえいえ、このぐらいどうという事はありません」

長い銀髪を揺らしながら、彼は私とは反対側の椅子に座った。私も、少し動揺しながら椅子に座る。床に毛布のような物が落ちていたのに気づき、それを膝の上にかける。窓の外を見ると、もう夕方の方のようだった。

「そっいえば、自己紹介がまだでしたね」

彼は今気づいたように椅子から立ち上がると、芝居がかった礼をした。
それだけで、どんな人なのかわかった。

「僕はこの国の第一王子、エリク・リュクシア・アラドル、と申します」

私も彼と同じように立ち上がり、お辞儀をする。

「私は樹新零香といいます。今は、この家で居候をさせてもらっています」

「貴女ですか、彼が言っていた女性とは」

その言葉に、首を傾げる。

すると、彼は裏の窓に近づくと私に向かって手招きをした。不思議に思いながら、窓に近づいて覗いてみると

「後300回！次は剣の素振り250だ、休み暇など無いと思え」

「副隊長、ひどいですー！」

「もう体が悲鳴を上げてますー！」

「喋るぐらいなら、体を動かせ」

そこでは、沢山の男の人たちが腕立て伏せをしていた。上半身裸で奥には、剣をくるくると回しながらリュナミスさんが見回りをしていた。

「…シユールな光景…」

そういわざるおえなかった。

未来の『夢』（後書き）

この話を書いている間に、いつの間にか

10000アクセス、突破！！ありがとうございます^^
ユニークも2000を突破しました。

ものすごく、嬉しいです(; ;)

嬉しさのあまり、兄と近くの川に飛び込んできましたw

次は、ちょっと更新が遅いかもかもしれません。

もう一つのほうも更新したいので、たぶんそっち優先になると思います。

クロッカス村3 - 1 (前書き)

もう、夏も近くなってきましたね。

熱中症などに気をつける時期です。水分はしっかりと。

今回、人物紹介のところに書いていなかったキャラが登場します。

ふと話を書いている内に思い浮かんだキャラなので、改めて後日人物紹介を書きます。

それでは、どぞ。

「彼ですよ。貴女のことを報告してくれたのは」

そう言つて、隣の銀髪の王子はリユナミスさんを指差した。私は手で窓を触りながら、訓練をしている兵士達の中にいる彼の姿を見た。

見回りをしながら、剣の素振りをしているように見えた。視線に気づいたのか、こちらに顔を向け、彼は軽く手を上げた。その姿が異様にカッコ良く見えたのと、夢の出来事を思い出してすぐに顔を背けてしまった。

隣で王子が笑つたのが聞こえた。見ると、窓の外を見ながら笑っている。不思議に思いながら、じっと見てみると、いきなり腕を引っ張られた。

「わぶっ」

何故か抱きしめられた。顔が真っ赤になるのを自覚しながら、腕から抜け出そうと必死に腕を動かすけど、ビクともしない。王子は私の反応が面白いのか、声を出しながら笑っていた。

「離して下さいっ」

「もう少しだけ我慢してください。面白い物が見れますから」

「面白いもの？」

いまだに王子が窓の外を向いているので、そつちに視線を向けると

「……………」

無表情で私たちを見るリュナミスさんが見えた。

無表情なはずなのに、何故だろう。雰囲気が怖い。

剣を地面に突き刺して、彼はどんどんこちらに歩いてくる。後ろに黒いオーラが見えたような気がして、腕から逃れようと王子の胸を押した。

一瞬、離れたように感じたけどすぐにまた腕の中に閉じ込められた。

その途端、窓の横にあったドアが勢い良く開いた。

「……………殿下、いい加減休憩は止めていただきたいのですが」

「もう少しだけ休ませて下さい。あまり喉の調子が良くないんです

」

「そう言って、もうすでに2時間休んでおられますよね？」

「そうでしたっけ。もうそんなに経っていたんですね」

あどけない表情で答える王子に対して、リュナミスさんは無表情に私を見つめていた。

その視線に、体から体温が無くなっていく感じがした。すぐに王子の腕の中から離れる。

今度は簡単に抜けられた。彼らから離れるように、私は身近にあったものを掴んで家を飛び出した。

後ろで「キアラさん、どこに行くんですか」という声が聞こえたが、無視する。

そのまま、村の広場を通り過ぎ、以前来た花畑の場所まで走った。満開に咲き誇る花たちを踏まないように、できるだけ早歩きで芝生のある場所まで歩いて、座り込んだ。

落ち着かない自分の心臓を片手で押さえながら、私は汚れるのも気

にしないで、その場に寝転がる。
空がオレンジ色から紺色になっていくのを見ながら、心を落ち着かせる。

「何で…っ」

あの人はあんな事をしたんだろう。何が「面白い物が見れますよ」だ。

完全に私で遊ばれた感じがした。
空から視線をずらし、体を横にして目の前にある白い花に触れる。
自然と気持ちがり落ち着いてくる。昔から綺麗なものを見ると、いつも心が落ち着いた。

そっと花を手折ると、顔に近づけた。甘い花の香りが、鼻の中を通り過ぎる。

今日はずっとここに居ようかな。

そうと決まれば、少し試してみたい事をしよう。

私は白い花の茎を千切り、花の部分を持って少し力を込める。

頭の中で氷のイメージを考え始めると、徐々に花が凍っていく。数秒後には、完全に白い氷の花が出来上がった。

「出来たっ」

出来た喜びに、私は氷の花を頭上に掲げた。

触っても冷たくないのは、やっぱり魔法のおかげだろう。うまく出

来てよかった。
出来上がった氷の花を芝生の上に置き、今度は別の形の花を氷の花に変えた。

「
」

面白くなって、今度は別の魔法を使う事にした。
立ち上がり、ワンピースに付いた芝を払いのけると、私は花畑の横にある森の中に入っていった。
そして、手ごろの太さの樹を見つけると頭の中で風をイメージする。周りに風が吹き、樹に目標を決めると、風が刃の様に樹の表面に傷をつけた。

「おお〜！すごい、すごい」

だけど、何か物足りなかった。何が物足りないのか考えていると、ゲームの画面を思い出した。
それで、思いついた。
そうだ、名前が無いんだ。そうと決まれば、行動は早かった。
頭の中でもう一度氷のイメージをしながら、樹に向かって叫んだ。

「アイスボルトっ！！」

イメージ通り、空中から氷の矢が数本現れ、樹を貫いた。樹は何本

も氷が刺さったまま、重い音をたてて地面に倒れた。やってみてわかった。これは、楽しい。

倒れた樹を見ながら、手を樹に向けながら今度は風をイメージした。

「ウインドカッターっ！」

手から鋭い風の刃が飛び出し、樹を切り刻んだ。後に残ったのは、木の薪が数十本だけだった。予想以上の魔法の出来に、自分で自分に拍手をした。

ゲームの中の魔法使いの気持ち、ほんの少しだけ分かった気がする。

良いストレス発散だ。

どんどん魔法を使って、あたり一面の樹を薪に加工していった。

薪の山が2つほど出来た頃には、頭の中でイメージしなくても技の名前を叫ぶだけで魔法が使える様になっていた。

「便利だけど、使い道間違えると死人を出しそうな威力……」

自分の手と薪の山を交互に見ながら、これからどう処理しようと思ひ、ふと昨日の昼間に使った魔法を試してみる事にした。

使うにも、まだコツが掴めていないから上手くいくかわからないが、物は試した。

「召喚！」

その言葉と共に地面が軽く揺れ、土が音をたてて小さく盛り上がった。

ポコツという音と共に土の中から顔を出したのは、髪が黒い小さな男の子だった。

男の子は少し茶色がかった黒い瞳で、私を見ていた。首から下は地面に埋まったまま。

「…………え？」

私が首を傾げると、男の子も同じように首を傾げた。

さすがにそのままの状態にしておけないから、男の子の手を握って土の中から引っ張り出す。

簡単に土の中から抜けた男の子を見ると

「……………」

「……………？」

全裸だった。

数分ぐらい沈黙。何回か男の子に頬を叩かれて、ようやく思考が元に戻り始めた。

慌てて男の子を抱きかかえ、花畑のほうに戻る。確かあそこにはカミイラ達の家から掴んできた毛布があったはず……。

すぐにそれは見つかった。すぐに、花の上に投げ出されていた毛布で男の子を包む。

男の子は抵抗もせず、毛布を広げたり伸ばしたりして遊び始めた。時折、私のほうを見て何かを待っているような表情を見せたが、周りが気になるようで花を覗き込んだり、私が作った氷の花に興味津々の様子だった。

どうしよう…この子。

私の頭はその事だけでいっぱいだった。

もし連れ帰ったら、絶対に何か言われる。でも、連れ帰らないこの子はどうなる？

そもそも、私はゴレムを呼び出そうとしたはずなのに、何で男の子が全裸で土の中から出てきた。

「はあっ…どうしよう」

「……」

「ん？」

男の子が私の服を引っ張り、村のほうを指差す。

何があるんだろう、とそっちのほうへ顔を向けると、向こうに気づかれて凄い形相で睨まれた。

思わず、傍にいた男の子を抱きしめた。

私、何か悪いことした？

彼はすぐに私の目の前にやってきた。上から見下ろされて、怖さが2倍。

綺麗な顔がさらに怖さを引き立たせていた。

「何していたんだ、こんな時間まで」

「……ストレス発散してました」

「ストレス発散で何時間、家から出ていた」

「1時間ぐらいですかね」

「3時間だ」

彼は呆れたようにため息を付いた。私は大体1時間ぐらいしかたつてないだろうな〜と置いていたんだけど、結構長くやってたんだな…。

ストレスが溜まってたんだな、いつの間にか。

「自己完結させるな」

軽くコツンと頭を叩かれた。

すると、腕の中に居た男の子がいきなり飛び出して、視線を遮る様に腕を広げた。

突然の男の子の登場に、彼は驚いていた。

「どこの子供だ？お前と同じような髪の色だが」

「あゝ…その子は……」

実はゴーレム召喚しようとして、男の子召喚しちゃいました。って言えるわけない。
どう説明しようか悩み始めたとき、いきなり男の子が拳を上に向けた。

「っ！」

危険を察知して、リユナミスさんが後ろに下がる。
下がると同時に男の子の拳から放たれた紫色の光が、空の雲を突き破った。

呆然とその光景を見てみると、男の子がすばやくリユナミスさんの懐に入る。そこから男の子と彼との攻防戦の始まりだった。

攻めているのは男の子ばかりで、子供とは思えないスピードで魔法のようなものを使っていた。

リユナミスさんはソレを避けるか、剣でそらすぐらいで手一杯のように見えた。

見てるほうは楽しいけど、やってる本人達は真剣そうに見えた。

それが15分ぐらい続き、その時にはすでに、本格的な戦闘を始めそうな雰囲気になっていた。

「もうそろそろ、止めた方がいいかな」

まあ、見るのに飽きてきたのもある。

なによりも、今さつきから村の子供達が育てていた花たちを踏みまくっている事に怒りが芽生えた。

このぐらいにしておかないと、明日子供達に会ったら申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

原因は、私が家から出たのが原因だから。さらにその原因を作ったのは、あの王子だけだ。

(なるべく周りに被害の及ばないように、確実に動きを止めないと)

そして、思いついたのは

「タライ落とし」

二人の頭上に突然現れた金のタライが、勢い良く重力で下に落ちる。二人は気づかず、睨み合ったままだった。だが、相手の頭上に何かあるのを見て同時に上を向いた瞬間

ゴンッ
x 2

見事に顔面にクリーンヒット。

すぐに樹の後ろに隠れ、少し時間を置いてからそっと覗いてみると、

二人とも何があつたのか分かっていないようで、鼻先を押さえながらタライを見て首を傾げていた。

「ふっふふ」

その様子に少し声を出して笑ってしまった。ハツとなって気づいたときにはもう遅く、目の前まで二人が歩み寄っていた。

片方は目に涙を溜めて、もう片方は無愛想な顔の中に少しの怒りを含ませて。

「えっと、その、ごめんなさい」

とりあえず、少し頭を下げながら謝った。

恐る恐る顔を上げると、突然男の子が抱きついてきた。首を横に何度も振りながら、小さな体でぎゅっと抱きしめられる。

少し驚きながらも母性本能をくすぐられ、少し土で汚れた黒髪を撫でた。

柔らかくサラサラな髪を触りながら、涙で濡れた顔を服の裾で拭いてあげた。

男の子は泣くのを止め、年相応の明るい笑顔をみせた。かわいいな、と思いながらももう一度頭を撫でる。

「はあ……で、この子は誰なんだ」

男の子の存在に怒りも収まったのか、いつも私に見せる顔のまま、彼はまたため息をついた。

「それが、私にも分からないんです」

「懐いているようだが……初対面なのか？」

「はい。名前も知りません」

抱きついたままだった男の子を体から剥がしながら、頷いた。リユナミスさんは、少し眉間にしわをよせて男の子の様子をじっと見ている。

すると、男の子は何か思いついたかのように地面に座り込んで何かをし始めた。

不思議に思い屈んで見ていると、男の子は石を片手に何か絵を描き始めていた。

最初は髪の毛の長い女の人。その隣に、小さい男の子と大きな人のような物。

男の子と大きな人の中には、イコールのマークが書かれ、女の人に向かって矢印が書かれていた。

「何の絵？」

「……………」

男の子は口で言わず、女の人を指差した後、私を指差した。
「私？」と言うと、男の子は頷き、小さい男の子と自分は同じであると動作で伝えた。

「この人は？」

隣を指差しながら質問すると、男の子は少し悩んだ後、その下に何か文字を書き始めた。
見覚えのある文字で『ゴーレム』と書かれていた。
そこで、ようやく分かった。

この男の子は、あのゴーレムなんだ。と

「って、おかしいよ！何で人の形になってるの？」

「……？」

男の子は少し考え込むと、もう一度地面に文字を書き始めた。

『一つ目の理由。日常生活は、こちらのほうが便利だと思ったから。本当の姿は、これ。』
さらに付け加えて

『二つ目の理由。まだ力が不安定だから、主の傍にいるほうが制御しやすい事に気づいた。だからこの姿』

男の子はそこまで書いて、一旦止まった。そして、今度はこの世界の文字だと思うもので続きを書き始めた。

さすがに、まだ読めないので断念してリュナミスさんと交代した。

「・・・なるほど、そういうわけか」

「……」

リュナミスさんはその文字を見た瞬間、目を細めた。

真剣な表情で男の子と同じように、地面に文字を書いて伝え合っていた。

仲間はずれにされたような気分になったが、仕方ないと諦めて、花を見ながらお客さんの泊まる部屋に飾る花を摘み始めた。

ついでに氷の花を追加して、大き目の花束を2つほど作った。

その後、帰りが遅いのを心配して迎えに来てくれたエリミアとカミイラに氷の花をプレゼントして、私達は家に帰った。

家に帰ると、男の子は家で私と同じように居候という立場になった。世話は最初、私とエリミアに任されたけど、カミイラが是非やらせてくれと言ったので、譲った。

譲った時のカミイラの嬉しそうな顔、まるで恋した女子の顔と良く似ていた気がする。

これからが楽しみだ。と、カミイラと兵士の人達が作った晩御飯を食べながら、エリミアと二人で笑った。

その横で、リュナミスと王子が真剣な表情でこの国の存亡に掛かる話をしているとは気づかず、零香は食事を楽しんだ。

クロツカス村3 - 1 (後書き)

今回はギャグを多めにしようとして、中途半端なことになってしまいました。

やっぱり、眠気と格闘しながら書くものじゃないですね)・・(

クロツカス村3 - 2 (前書き)

シリアス話です。

王子の過去の話メインです。結構内容としては、重いお話。時々文章がおかしいので、いつか修正すると思います。

それでは、どぞ。

クロツカス村3 - 2

食事を終え、水浴びをしてエリミア達と眠りに入った零香は、ふと目を覚ました。

ソファからゆっくりと起き上がりながら、ベッドのほうを見る。

「スー…スー…」

「……ん……」

ベッドの中にはエリミアとゴーレムのシユラが抱きしめ合いながら、幸せそうな顔で眠っていた。

シユラ、という名前はエリミアとカミィラが考えたものだ。

この国の言葉で「黒」を意味するらしい。理由は、黒い髪が綺麗だから。

簡単に、分かりやすい名前だけど、どこかに愛着を感じた。

そっとソファの上から降りて、二人の頭を撫でてネグリジエの上にカーディガンを着て、扉をそっと開けた。

寝静まった部屋の前を通りながら、階段を下りて行く。そこに意外な人がいて、ゆっくりと傍まで行く。

「こんな夜中に、どうしたんですか？殿下」

「!…ああ、キアラさんでしたか。少し眠れなかったので、月を見ていました」

晩御飯の時の軍服のような白い服を脱いで、王子はシャツとズボンという軽装で窓に腰掛けていた。

結んでいた髪は今は結びを解き、月の光で輝いていた。本当にこの世界の男性は、美顔の人が多いな……。

「僕の顔を見つめて、どうしたんですか」

「いえ、綺麗なお顔だなと思っていただけです」

「よくそう言われますよ。だけど、僕はこの顔が嫌いだ」

そう言いながら自分の顔に触れる王子は、悲しそうに笑った。

「何故嫌いなのですか？」

「……僕の右目とこの髪が原因ですよ」

「右目と髪が……」

王子は頷きながら、もう一度月を見ると、右目を隠していた前髪を耳にかけた。

左目は青い。だが、右目は赤かった。オッドアイか。

「赤い瞳は魔物になった者にしか現れない。僕は生まれた時から、この瞳だった。それは、半分は人間の血、半分は魔物の血を受け継いでいる事になるのです」

私は黙って話を聞いていた。彼は耳にかけていた髪を元に戻し、今度は自分の髪に触れた。

「この髪の色も貴女の黒髪と同じく、珍しいものなんですよ。だけど、父と母は僕とは違う色ですから、それは一大事になったそうです。ミケルがそう言っていました」

「ミケル？」

「食事のとき、僕の後ろに立っていた男性ですよ。赤髪で目が緑色の人」

そういえば、見たような気がする。

食事をする準備を私の代わりにやる、と言ってくれたあの青年。あの人がミケルという人なのか。

「…あれ？あの、殿下は今年はお幾つなんですか」

「16です」

「一つ違い。ミケルさんって何歳なんですか？」

「確か67です」

はっ？あの、見た目20代後半ぐらいにしか見えない方が、お爺ちやんの年齢！？

自分のお爺ちやんの顔とミケルさんの顔を思い浮かべる。駄目だ。同じ年齢とは思えない。

「どうしたんですか？」

「なっ、なんでもありません！続きお願いします」

頭を横に振って真剣に彼の話を聞く。彼は少し落ち着きながら、ゆったりとした口調でまた話し始めた。

「…銀髪で生まれた子供はこの世界で、僕が初めてだったんです。王宮は大騒動になって、僕は王宮以外の場所では顔を隠すようにと言われました。銀髪なんて、この世界で僕一人だから王子だとすぐにはれてしまう。狙われやすい存在だったんです」

「はあ」

「6歳までは普通に過ごしていました。だけどある夜寝ていて、いきなり首が苦しいと思って起きると、首にあの蛇がいたんです」

「なるほど」

「僕は必死でその蛇を隠すために、王宮の中でも顔を隠すべールを被って生活し始めました。声も出せなくなつて、父上と母上とミケルにだけ蛇の事を伝えて、なるべく表に出なくてもいいようにしてもらいました」

「よく小さい時に思いつきましたね」

「他の人よりもマセてましたから。でも、さすがに2年も経つと暇になるわけです。だから、父上に頼んで必ず顔を隠すことだけ気をつけるようにして、騎士団に入りました。僕には剣と魔法ぐらいしか王宮で出来なかったから、それを活かそうと思つたんです」

「あの、殿下。少しいいですか？」

「ん、なんですか？」

「できれば、簡単にまとめてからお話してくださいとありがたいんですが」

正直言うと、ただ話が長いと思つただけである。

話を聞いていたら、夜が明けそうなくらい話すだろうな、この人。その証拠に、まだ話足りないのか口を尖らせて横を向いてしまった。

「駄目、ですか？」

上目遣いで彼を見つめながら言うと、彼は少しの間考え、何か思いついたようだ。

私を数秒ほど見て、彼は右手を私の目の前に差し出した。

「？」

「手、繋いでいただけますか。簡単にまとめてしまつと、つらい過去を思い出してしまつて」

「……それぐらいなら、喜んで」

私は彼の手を握る。少し硬くて、温かい手の感触を感じながら彼をまっすぐ見つめた。

彼は「ありがとう」と笑顔を浮かべ、窓の外を見始めた。

「僕は、この容姿のせいであらゆる人物から狙われるようになりました。命を狙う者、地位を狙う者、体を狙う者、力を求め狙う者」

「はい」

「僕は幼い時、どんな人でも信じる子供でした。本当は信じてはいけなかったのに……」

そういう彼の手は、震えていた。それだけ、つらい過去だった事が分かる。

彼の手を握っている左手に力を込めて、握る。

「僕が8歳のとき、城に賊が入り込んで、僕は誘拐されました。どこかの貴族に頼まれて僕を誘拐したようです。その時僕は何も知らず、声をかけて来た人が賊とも分からず、彼らのアジトに付いて行ってしまったんです」

「……はい」

「その後は、恐怖と混乱しかなかった。貴族の男が現れて、賊の頭のような人に何か話すと、僕はその貴族の男にいきなり押し倒された。服を脱がされ、抵抗しようと思ったら殴られ、僕は……」

「もういいです！もう、話さなくてもいいですからっ」

彼は体を震わせながら、顔は恐怖の表情のまま涙を流していた。私は彼の話のを止めようと、頭を包み込むように彼の体を抱きしめた。彼はまだ震えながら、腕を腰に回してぎゅっと抱きついてきた。でも、彼は震える声で自分の過去を話し続けた。

「僕はっ、必死に助けを求めた。だけど、賊達は僕を哀れむような目で見てその行為をじっと見ていた。手を差し伸べてもくれなかった。……僕は結局、城の兵士達が賊のアジトに突入してくるまで、体を……犯され続けたっ」

「っ……」

私は彼の話したこと全てを想像して、その様子が自分と重なり、あの時のことを思い出す。

記憶から消し去りたい、あの記憶を。

彼の体を強く抱きしめながら、自分も震えている事に気づく。

駄目、知られたくない。私は必死に震えを止めて、彼をさらに強く抱きしめる。

彼は立場や性別は違うけど、私と良く似ている。

見た目よりも幼い心を持っている彼にとって、消し去りたくても消し去れない記憶。

それは、とてもつらいだろう。誰にも言えず、言ったとしても侮蔑か哀れな目で見られるのだから。

幼い時の彼は、心の奥に深い傷を負ったのだろう。私も同じだったから、そう思う。

「僕は今でさえ、この女性にも男性にも見えない顔のせいで、言い寄ってくる人は絶えない。だから、僕はこの顔が嫌いなんだ。人間でも魔物でもない、中途半端な自分を思い知らされる。見た目でしか僕を判断しない人を見て、僕はいったい誰なのか、判らなくなる」

そついう彼の姿は、過去に囚われ続ける私と同じだ、と思った。でも、彼はまだ立ち直れる。

優しく、それでも強く彼を抱きしめながら私はそつと呟いた。

「……貴方は、貴方ですよ。エリク・リュクシア・アラドルという、一人の人間です」

「……っ!？」

彼の体の震えがピタリと止まった。私は腕をゆっくりと緩めながら、彼の顔を見る。

涙でぐしゃぐしゃになってはいるけど、今まで感じていた仮初めの顔ではなかった。彼の本当の顔。

私は微笑みながら彼の顔に両手で触れ、彼と目が合うように固定した。

彼は目を見開き、涙を少しだけ流していた。

「貴方の右の瞳も、この髪も、貴方の個性じゃないですか」

「僕はこんなふうになられたくなかった。父上と母上のように生まれなかった」

「親に似て、後悔する人もいるんですよ？もっという顔で生まれたかったって」

「それでも、僕は嫌だ。こんな魔物と人間の血を引いた僕なんてっ」

「たとえば、魔物の血を引いていようと人間を引いていようと、貴方は貴方です」

力がこもっていた。

「はは、そうですね。僕は、僕だ。たとえ魔物の血を引いていても、僕は僕」

「そうですね。今更気づいたんですか？」

「ええ、今更気づきました。……ありがとう、キアラさん」

「……零香でいいですよ。ファーストネームは零香ですから、そう呼んで下さい」

「それじゃあ、レイカ・キアラさんですね」

「何故フルネーム」

「一応確認ですよ、レイカさん」

そういうと、彼に一度強く抱きしめられ、体を離した。彼は、すっきりしたような顔で私の目の前に立った。

「今までで、こんなに話したのは仕事以外初めてです。父上たちにもこんなに話したことは無い」

「これからは、沢山話してあげて下さい。今までの分も、これからの分も。喜ぶと思いますよ」

「ええ、帰ったら一度家族だけで話をします。……本当にあり
がとう」

私は首を横に振り、「色々助けてもらったお礼です」と言って頭を
下げた。

「これで、貸し借りは無しですよ」

「……ありがとう」

私達は微笑みながら、同じように欠伸をした。

思わず口を手で隠しながら、彼も同じような顔で私を見て、同時に
噴出した。

「あはは、もう眠くなってきましたね。殿下」

「そうですね。もう夜も遅いですし、寝ましようか」

頷きながら、私は自分の部屋に向かうために階段を上り始めた。
彼も下の階にある自分の部屋に戻ろうとして、一旦立ち止まった。

「……エリク」

「えっ？」

私は階段を上る足を止め、彼のほうへ顔を向けた。彼は天使のような笑みを浮かべ、優しい言葉で言った。

「殿下ではなく、エリクと呼んで下さい。レイカさん」

「……わかりました。エリク様、おやすみなさい」

「おやすみなさい、レイカさん」

私はもう一度頭を下げ、自分の部屋にそっと戻る。エリミアとシユラを起こさないよう、カーディガンを脱いでソファに横になり、薄い毛布をかける。欠伸をかみ締めながら、天井を見る。

「……だから、私は『自分』で死にたいと願う」

小さく誰にも聞かれないように、自分で自分に向かってそう呟いた。眠気に従い、ゆっくりと目を閉じる。

すぐに意識は落ち、私は眠りの世界に誘われた。

彼は自分の部屋に戻り、ベットに腰掛ける。傍には昔から自分に仕える執事が、静かに口を閉ざし立っていた。

彼は自分の顔に触れながら、つい先ほどのことを思い出す。自分の汚く消し去りたくても消せない記憶を、彼女は優しく理解してくれた。

自分を一人の人間として、初めて見てくれた人。

「……彼女は、僕を僕として見てくれている。自分より立場が上でも、言葉は変えてもそのままの彼女でいてくれる……。こんなに嬉しい事があるか…?」

「殿下……」

「一日も会っていないのに、彼女の存在はすでに僕にとってかけがえの無い物になっていた」

「それでは、殿下。どうするのですか?」

「……決めたよ。もう僕は顔を隠さない。この右目だけは隠すけど、それ以外は本当の自分として行動する」

「…承知いたしました」

目の前で膝を付き、深く頭を下げる執事を見て、ベットに体を投げ出す。

ふかふかしたベットに横になりながら、天井に手を伸ばす。

「それと、彼女の力はとても強い。僕にとっても国にとっても、これから必要になってくるだろう」

「それでは、彼女を城に連れて行くのですか」

「……ああ、祭りが終わり次第、彼女達を騎士団に誘う。彼女達の力を貸してもらおう」

「承知いたしました。すぐにでも準備を始めます」

「頼むよ、ミケル」

執事が部屋から魔法で消えるのを感じながら、彼は手を強く握る。

「この国を、魔物どもに滅ぼさせて堪るかっ」

そう言葉を吐き捨てると、彼は右目を押さえながら目を閉じる。
久しぶりに、彼は深い眠りに落ちた。それは心地よく、疲れきった
体を癒した。

クロツカス村3 - 2 (後書き)

ようやく次から書きたかったお話がかけます (^ ^ ^)
少し執筆していますが、ふふふふふ、書くの楽しいw w

前回7/1にあげた話のアクセス数に驚きました。

ぶつちぎりで最大アクセス数を更新していましたw

888アクセス数でした。

読んでくださり、本当にありがとうございます。

これからもよろしく願います!!

感想、意見などお待ちしております。

クロツカス村4-1（前書き）

かぐや姫の置き土産の更新が遅れていたため、こちらの更新も遅れてしまいました。
申し訳ないです><;

眠いなか書いたため、誤字脱字があるかもしれません。

クロツカス村4 - 1

「ん……くあっ」

まだ眠たい目を擦りながら、零香は目を覚ました。

起き上がりながら背伸びをして、軽く腕を振る。柔らかい生地のスファだったが、やはりベットで寝たほうが良かったかもしれない。少し痛い肩を揉み解しながらベットのほうを見ると、そこはすでにもぬけの殻だった。

「少し、寝すぎたかな…？」

そう呟きながら、毛布をたたんでソファの上に置き、黒いパンプスを履く。

鏡を見ながらいつものように、髪をポニーテールにする。服は、動きやすいように無地のシャツと黒いパーカー。それとデニムのホットパンツを着た。

もう一度鏡で自分の姿を確認して、部屋の扉を開いた。

部屋を出た途端、沢山の色々な音が下から聞こえてきた。

慌しく走る足音や、楽しそうな笑い声。何か真剣に話している声や

手を叩くような音。
人が増えると賑やかだなあ、と少し笑いながら、階段を下りていった。

階段を下りると、目の前をカミイラが通っていった。

「あつ、カミイラ！おはよう」

後ろからそう声をかけると、何故か周りから音がしなくなった。
カミイラはこちらを振り向いて、その場に立ち尽くしていた。周りを
見てみると、皆の視線が零香に向いている。
視線が怖い。睨まれてるような気がして、怖い。

「えっと……？」

周りを何度も見ながら、おろおろしていると、パルサーシャの部屋の扉が開いた。

「その情報は本当なのかい？嘘じゃないだろうっねえ」

「事実です」

部屋の中から出てきたのは、パルサーシャとエリク。その後ろから同じようにリユナミスとシュラが出てきた。

4人とも、零香の存在に気づかず何か話をしていた。

「おはようございます。パルサーシャさん」

「おお、おはよう……」

「……………」

「??？」

周りの人と同じような反応をされた。

パルサーシャの顔は驚いて口が半開きだし、エリクとリュナミスは二人共表情が固まっている。

シユラはというと、何故か嬉しそうに頬を染めながら零香を見つめていた。

何故見られているのか分からず、首を傾げる。

すると、リュナミスが近づいてきて耳に顔を近づけてきた。

「何でそんな服を着てきた。パルサーシャが渡した服があるだろう」

「ちょっと試したい事があったので、動きやすい服を選んだんですけど……………」

そういうと、リュナミスが小さくため息を付いて、階段を指差した。

「すぐに着替えて来い。せめて、そのズボンだけでも替えてこい」

「でも、暑いです」

「我慢しろ」

少し理不尽な気がしたが、仕方なく部屋に戻ってデニム生地ของジーンズに替えた。

階段を下りると、皆何かホツとしたような顔で零香を見て、それぞれのやりたい事を始めた。

何が原因だったのか訳がわからず、シユラとその肩に乗っているエリミアに連れられて食堂に行き、遅い朝食を取った。

食パンとスクランブルエッグに紫色のスープと色とりどりの野菜の入ったサラダを食べながら、頭の中で今日の計画を立てる。

今日は、一昨日買いに行く事が出来なかったアクウのネックレスを買いに行つて、花畑で少し花を貰つて、それが終わってから魔法の練習でもしよう。

紫色のスープを一気に飲み干して、手を合わせて「ごちそうさまでした」と言つてシユラの手を握った。

シユラは零香の手を嬉しそうに握り返すと、自分の服を引っ張つてみせた。

今シユラが着ているのは、リユナミスのお古をカミイラが縫い直したものだ。白のワイシャツの袖に、黒い紐で網目模様を作っており、下のズボンは同じような模様が横にある。

「気に入ったの？」

シユラは何度も頷きながら服を握り締めた。

彼の表情はゴーレムとは思えないほど、人間らしい表情だった。

零香はシユラの頭を撫で、肩に乗っていたエリミアを渡してもらおう。シユラはどうやらエリミアの事が気に入ったらしく、昨日からずっと傍に居た。エリミアも悪い気はしないらしく、シユラの事を弟のように可愛がっていた。

「エリミア、今日は色々忙しくなるよ。まずは、ネックレスを買いに行こうか」

「わかりました。……あの、ちょっといいですか？」

少し言いづらそうな表情を見せたエリミアの頭を撫でながら、「なに？」と微笑みながら言う。

エリミアは懐から零香がプレゼントした赤いリボンを二つ取り出して、そっと零香の目の前に差し出した。

「髪、結んで欲しいです」

「……くすっ、いいよ。今日はどんな髪型にする？」

「零香と一緒にがいいです」

「了解」

零香はエリミアからリボンを受け取ると、床にエリミアを下ろし、手櫛でエリミアの綺麗なブロンドの髪を梳く。

サラサラした髪を上を持ち上げて、赤いリボンで結んで軽く横に引く。

少し髪の毛が出てしまっているが、妥協範囲だろう。

「よしっ、できたよ〜」

「ありがとうございます」

エリミアは自分の髪に触れながら、微笑んだ。

どこことなく、エリミアとシユラは似た物同士なんだな、と思った。笑い方がとても似ている。

その笑顔に、時々死んだ妹の笑みが重なって少し泣きたくなる。

「零香？」

「あっ、「ごめんね。少し考え事してた。……行くっか」

「はい！」

「……！」

二人同時に笑顔で返事をする姿に、自然と笑みが零れた。エリミアはシユラの肩に乗せ、シユラと零香は手を繋いで外に出ようとした。

「あつ、ちよいとお待ち！」

「？」

後ろからパルサーシャの声が聞こえ、後ろを振り向く。

パルサーシャは横を指差しながら、笑っていた。彼女が指差した方向を見ると、そこにはリユナミスとエリクが立っていた。

リユナミスは、白いシャツに黒いベストとネクタイを身につけ、腰には長剣をつけて壁に寄りかかっていた。

エリクは、ブイネックのシャツと青いズボンを身につけ、腰にはリユナミスと同じように剣を着けていた。

「リユナ坊も王子様も、アンタに用事があるらしいよ」

「私に……？」

少し首を傾げながら彼らを見てみると、エリクが視線に気づき笑顔で手を振ってきた。

右目は黒い眼帯で隠してあった。

彼がどうやら克服したらしい。とても、喜ばしい事だ。

シユラの手を握りながら、彼らに近づく。

「さて、どうやら終わったようですし、行きましょうか」

「はい」

頷きながら、大きな声で「いってきます！」というと、それぞれの場所から沢山の「行ってらっしゃい」の声が聞こえた。さすがに同時に言われて、驚いた。その様子を見ていたのか、リュナミスとエリクが同時に噴出した。

「……笑わなくてもいいじゃないですか」

笑う二人を睨みながら、零香は扉を開いた。開いた扉の前に、誰かが居た。

「これは……すれ違いにならなくて良かったですわ」

水色の髪に紺色の瞳を持った、綺麗な女性が目の前に居た。彼女は淑女の礼をすると、驚き硬直している零香の前で膝を付いた。そして、頭を下げる。

「わたくしは、ユーリリア・キリアメス・トリメンティアと申します。レナード様の御命令で、今日より貴女様に御仕えさせていただきます。どうぞ、宜しく御願ひ致します」

聞き覚えのある名前を聞いて、ハツとなった。慌てて、地面に座る
ユーリリアの手を握って立たせる。
零香より2歳ぐらい違う彼女の服に付いた土を落とし、家の中に入
れる。

ユーリリアは首を傾げながら、零香を見つめていた。

「あの、今さっきレナードさんの名前を言いましたよね」

「はい。わたくしは、レナード様に御仕えしておりました」

「何で来たんですか？」

「貴女様に御仕えするためでございます。レイ力様」

零香は何度も横に首を振って「要りませんから」と断った。
ユーリリアは困ったような表情になり、頬に手を当てた。

「困りましたわ。わたくしはレナード様の御命令で、貴女様を素敵
な踊り子に仕立てるまで帰ってくるな、と言われてしまいましたの」

「え？」

「そして、お守りするようにとも言われておりますわ」

ユーリリアは、零香の横に立っていたリユナミスやエリクを一目見ると、最初にしたように淑女の礼をした。

「お初にお目にかかります。リユナミス様とエリク様、で合っていますでしょうか」

名前を呼ばれ、二人は顔を見合わせてから、頷いた。

ユーリリアは、軽く微笑むと、彼らの前に膝を付いて頭を下げた。

「レナード・アルバドス・エルクーレ様より、伝言でございます。

『領主の妻と、息子達に気をつける』だそうですわ」

その言葉に、二人の表情が硬くなった。

ユーリリアは立ち上がり、「それでは、他の方にもご挨拶をします」と言っ、奥へと消えていった。

彼女の後ろ姿を見ながら、零香はレナードの顔を思い出していた。紫色の長髪と赤い瞳で、気だるそうな顔の彼を思い出して、小さく笑う。

「零香、早く行きましょう。お昼になってしまいます」

「…!…!」

そう言って手を握ってくる二人を見ながら、頷く。

「リユナミスさん、エリク様。行きましょう」

「そうですね」

「…ああ」

笑顔のエリクと無愛想に頷くリユナミスを見て、零香は少しその表情に違和感を覚えながらも、目的地へと向かった。

零香たちの姿を見た村の人々は、恍惚とした表情で彼女達を見送った。

男性は零香やエリミアを。女性は、エリクとリユナミスとシユラを見て。

その視線に零香は気づかず、シユラと手を繋いで鼻歌を歌っていた。エリクとリユナミスは、楽しそうな零香の後ろ姿を見ながら、優しく微笑んでいた。

クロツカス村 4 - 1 (後書き)

新たな人物登場です。

実は、この人が番外編そのいちで出てきたあのメイドさんです。

ユーリリアさんの今後の扱いをどうしようか悩み中です^^ ;

クロツカス村4 - 2 (前書き)

途中シリアスです。

零香の過去の話が主です。暗いです。

何故私は暗い話に持っていきこうとするんだろう) - 1 - (

それでは、どぞ

クロツカス村4 - 2

一行は雑談をしながら、目的の店の前まで来た。もつすでに看板は掛かっていて、店の扉は少し開いたままだった。零香は中を窺うように扉を開いた。

「アミュエルさん、おはようございます」

そう言いながら扉を開いた瞬間、何か金属の物が連続で落ちる音が聞こえた。

驚きながら、慌てて店の奥へ走ると

「いたたたつ……あつ、いらっしやい」

カウンターの向こう側に、本やビンやいろいろな物の下敷きになったアミュエルがいた。

笑みを浮かべながらアミュエルは立ち上がると、「ごめんなさいね」と謝ってカウンターの下から椅子を取り出し、座った。

「さてと……で、皆さんお揃いでどうしたのかしら？」

「切り替え早いですね……」

「商売人だから、当然よ」

「いや……」

頭にイヤリングやネックレスを乗せた状態で言われても、説得力は無いような……。

さらに、乗っている事に本人は気づいていない。

零香は、少しカウンターに乗り上げながらアミュエルの頭の上に乗っている物に手を伸ばした。

伸ばした瞬間、アミュエルの瞳がキラーンツと光ったような気がした。

「隙有り！」

「えッ!？」

いきなり手首を掴まれ、驚く間もなく、いつの間にかアミュエルに横抱きされていた。

何度も瞬きしながら横を向くと、後ろにいた他の皆が揃って零香に向けて親指を立てていた。

まるで、「行って来い」と言っているかのよう。

「よしっ。まずは探寸してデザインを決めて、それから……うふふふふふふふ」

「怖い、この人怖い。別人になってませんか!？」

「……そうねえ。丁度いいから、他の人たちも採寸させてもらおうかしら?」

「無視ですか」

アミュエルは零香の声を無視して横抱きにしたまま、後ろを振り返り大きな声で叫んだ。

「アラト!!!リック!!!ちょっと手伝って頂戴〜!」

すると、上からどたとたと足音がして階段から、リックとリックが大人に成長したような姿の男性が降りてきた。

「はい」

「あいあい」

二人は返事をする、すばやく動いてリユナミスとエリクの腕を掴んだ。

そして、そのままずるずると上に連行されていく二人。シユラとエリミアは自分でついて行った。

呆然としている零香は、そのままアミュエルと同じように上に連行された。

上に行くといくつか部屋があり、その内の一つにアミュエルは入

つて零香を椅子の上に座らせた。

「さてさて、どんな踊り子の服装が似合うかしらねえ」

「あの…私、頼んだ覚え無いですけど……」

「頼まれたのは、パルさんからだから」

零香は握り拳を作りながら、頭の中でパルサーシヤの笑みが思い浮かんで、少し怒りがこみ上げてきた。

そんな零香を無視して、アミュエルは机の上からメジャーのような物を取り出して、零香の体を採寸し始めた。

「ん〜、細くてうらやましいな〜。肌も白くて綺麗だし、何よりこの髪の毛の艶！いいわ〜」

「あのッ、アミュエルさん？」

「よし、貴女このカタログの中から好きなデザインを選んで頂戴」

そう言って渡されたのは、ファッション雑誌のような物だった。

ペラペラとめくって見ると、胸が強調されているものやほとんど体を隠せていないような物まであった。

零香は、ページをめくる度徐々に見る気が失せてきたが、ふとある物を見つけて興味が湧いてきた。

それは、蝶の模様をあしらったマーメイドドレスだった。

前々からテレビなどで何度も見かけて、一度でいいから着てみたいな、と思っていたものだ。

「アミュエルさん、このデザインがいいです」

マーメイドドレスのページを指差しながらアミュエルに伝えると、「少しデザインが違うかも知れないけど、それでもいい？」と言われ、少し悩んだが頷いた。

その後、どの色にするかとか、模様は他に欲しいか、など色々な事を質問された。

全ての質問に答え終わると、アミュエルは本とメジャーを持って部屋を出て行った。

今度は男性陣の服の採寸をするのだとか。

彼らならどんな服を着ても、華麗に着こなすだろう。シユラの服は、零香が選んだデザインの色を作ると言った。後から遅れて入ってきたエリミアの服は、彼女の好きなゴスロリにするらしい。

零香は、窓から外を見ながらどんな服が出来るのか楽しみだった。服は、すぐにでも完成できるとアミュエルが言っていたのだ。

どんなに綺麗で素敵なドレスになるんだろう……。想像するだけで、楽しかった。

ドレスの事ばかり考えていると、扉の開く音が聞こえた。振り返ってみると、エリミアが小さな袋を抱え部屋の中に入ってきた。

「どっしたの？その袋」

「アミュエルさんから貰いました。お昼を過ぎてしまったので、少しお腹の足しにしてくれと」

「もうそんなに時間たってたのか……」

「男性陣の採寸がなかなか上手く出来なかったらしいですよ。特に、シユラ」

そう言いながら、エリミアは器用に椅子を使って机の上に座り、袋を広げた。

中には、綺麗に焼けているクッキーが入っていた。

「部屋中を走り回ったり、アラトさんのお腹を殴ったり。私が「零香に叱られてもいいの」って言って、ようやく採寸できたんですよ」

「シユラ……後でアラトさんに謝らないと」

エリミアはため息を付いた零香にクッキーを一つ、手渡した。零香はそれを受け取り、別の椅子を引き寄せてエリミアの傍に座った。クッキーを一口かじると、ほのかな甘さが口の中に広がる。

「美味しい」

「そうですね。でも、零香の作るお菓子の方が美味しいです」

そう言ったエリミアだったが、零香が一つ食べ終わると同時に袋の中身を空にした。

エリミアの口に合う味だったのだろう。満足そうに零香の膝の上に座って、笑みを浮かべていた。

零香は苦笑を浮かべながら、エリミアを腕に抱きしめ、窓の外を見た。

外にはあの花畑が広がっている。

「この世界は、とても綺麗。人も活気づいているし、優しい」

「そうですね」

「だけど、なんでだろう。疑ってしまう。本当に、そう思っているのだろうか」

「零香……」

「……あの洞窟に行ってから、ずっと……怖い」

自分の手のひらを見つめながら、零香は小さく呟いた。

洞窟のあの空気は、零香にとって嫌な思い出を思い出させた。

母の弟に、父や母、妹が殺された事。殺された原因は、零香だけが知っていた。

母の弟　零香の伯父は、母が大好きだった。

よく家に来ては、いつも母と一緒に遊んでくれていた。その時まで、優しいお兄さんだと思っていた。

だけど、あの日を境に伯父は人が変わったようになってしまった。

あの日、家には零香と伯父しかいなかった。

父と母は、体調を崩した妹を連れて病院に行っていた。妹は、零香と同じくらい体が弱かった。

さすがに、娘一人だけで留守番させるのは危ないと言って、母は伯父を家に呼んだ。母達とは入れ替わりで、伯父は家に来た。

零香は、いつもの様に伯父に遊んでもらおうと挨拶代わりに抱きつくくと、いつもとは違う感じで抱き返された。

そして、気づいたときにはベットの所で服を脱がされていた。

泣き叫びながら抵抗したが、大人の男性の力に幼い少女が敵うはずも無い。そして、運悪くその日は大雨だった。大声を出しても、雨音で全ての音が消された。

伯父は途中、泣きながら何度も謝っていた。

ごめんね、ごめんね、と。そして、同じくらいに母親の名前を呼んだ。

零香は、母と瓜二つだった。妹は、父と瓜二つ。

零香は、幼いながらも伯父を受け入れた。可哀相だったから。それだけで。

その日以降、伯父は零香しかいない日は零香を母の代わりにした。

零香は、優しい伯父の悲しみがこれで減るならと我慢した。

だけど、そんな行為が3ヶ月ぐらい続いたとき、遂に両親にばれてしまった。

両親は、伯父に激怒した。そして、伯父が自分の気持ちを伝える前に母は言ってしまった。

「お前なんて、どこかに消え去ってしまえ！もう、私たちの目の前に出てくるな」と。

伯父は、母の事を愛していた。長年愛する人から「消える」と言われ、伯父はあんな行動を起こしてしまった。

台所にある包丁で、母を刺し殺したのだ。

包丁は母の心臓に深く刺さり、大量の血が体から出た。

父は母の名前を叫び、倒れそうになった母の体を抱きしめようとした瞬間、伯父に背中から刺されて、母に覆いかぶさるように倒れた。妹は泣き叫びながら、母と父の死体にしがみついた。

零香は、それを呆然と見ていた。

優しかった伯父が、豹変したように人殺しになってしまった。

そして、大好きだった父と母を殺してしまった。

そのまま伯父は零香のほうへゆっくりと近寄ってきた。

その前に妹が手を大きく広げ、零香を守ろうとしたが両親と同じように刺されてその場に倒れた。

零香は伯父の獲物を狙うような目から、目が離せなくなっていた。

伯父は血に塗れた手で零香に触れると、その小さな手に家族を刺した包丁を握らせた。

そして「ありがとう」と呟いて、零香の手に包丁を握らせたまま自分の首を刺した。

今、思い出すだけでも恐ろしい、自分の犯した過ち。

零香は、そつと窓の縁に触れながら小さく言った。

「人を信じようとするたびに、怖い」

「零香」

「信用しても、裏切られる。優しくしてくれても、利用してるだけ。そう考えてしまう」

「……私は、零香の味方です」

「うん、わかってるよ」

零香はエリミアを軽く抱きしめると、丁度いいタイミングで扉をノックする音が聞こえた。

「今いいかしら。完成したから、一度試着してみてくれない？」

アミュエルの声だった。その声に気持ちを切り替えて、明るく返事を返した。

「あっ、はい」

「エリミアちゃんもそこにいる？」

「はい。います」

「それじゃあ、隣の部屋に来て頂戴。この部屋を出て、左の部屋よ」

「わかりました」

アミュエルはそのまま歩いて別の場所に行くのが分かった。

零香とエリミアは、そのまま部屋を出て、隣の部屋の扉を開いた。

中の様子を見て、勢い良く扉を閉めた。

すると、中からシユラが出てきて部屋に引きずりこまれた。部屋の床に座らされて、そこにいた男性陣から目を背けながら、叫ぶように言った。

「なんで皆さん、上半身裸なんですか！」

そう、この部屋にいる男性陣　つまり、リュナミスとエリクは何故か上半身裸で立っていたのだ。

慌てる零香に対して、男性陣は慌てる様子も無く、普段どおりだった。

「いや、アミーに「採寸するから、全部脱げ!!」って言われて、これから着る所だったんだが……」

「私、服脱がずに採寸されましたよ?」

「…僕たち、脱ぐ意味無かったんじゃないんですか?」

「い・い・か・ら、早く服を着てください!」

零香は外に聞こえるような大声で、叫んだ。

その声で零香を探していたユーリリアに気づかれ、彼女が部屋に来た時は、その場にいた全員が驚いた。

その後零香とエリミアは、夜になるまでユーリリアとパルサーシャの二人に似合う服作りを手伝うはめになってしまったのであった。

先に全てが終わっていたリユナミスとエリクとシュラが迎えに来たときには、二人共死んだように床に倒れていた。

アミュエルとユーリリアも、同じように床に倒れて疲れ果てていた。

三人が呆れたのは、言うまでもない事だった。

クロッカス村4-2（後書き）

ggggggすぎて、申し訳ありませんorz

内容的には、もうそろそろ第1章も終盤に差し掛かってきてますね。

……最後の章まで力が持つか心配ですが、頑張って執筆していきます。

感想、ご意見お待ちしております^^

零香は、空腹と疲労でフラフラしながら迎えに来てくれた三人にお礼を言っ、ゆっくりと居候している家に帰ってきた。

手には、完成したドレスが入った箱と少し安くしてもらったアクウのネックレスを2つ持っていた。

ネックレスは帰り際、アラトが「妻が迷惑をかけたな」と言っ、店で一番高い物を通常の値段より安く売ってくれた。

エリミアに今もっているエルドの金額を聞くと、450エルド残っている、と言っ、だから明日は日常に必要なものを買に行こうと決めた。

「お腹すいた…」

倒れこむように食堂の椅子に座ると、カミィラが深めの白い皿を持って微笑んでいた。

カミィラはテーブルの上に持っていた皿を置くと、零香の手にスプーンを渡した。

零香は、もうすでに目の前に出された皿にくぎづけだった。

皿の中には、ミネストローネの様なスープが並々と注がれていた。今の零香にとって、ご馳走だった。

「いいの？」

「うん、お腹すいてるでしょ？それに、味見をしてもらうつもりだったから。遠慮なく、どうぞ」

「ありがとう、カミイラ！」

零香は、「いただきます」と手を合わせてからスープを一口啜った。空腹だったお腹に、優しく広がる様な味だった。少し酸味があるが、とても甘かった。

「とっても美味しい」

そう呟くと、小さくカミイラがガッツポーズをしたのが見えた。

よっぽど嬉しかったのか、カミイラはニコニコと笑いながら、零香がスープを全て飲み終えるまで見つめ続けた。

零香は、エリミアにもスープを分けながら、普段よりも早いペースで食べ終え、「ごちそうさまでした」と満足そうな笑顔を浮かべ、手を合わせた。

「よし、お腹も十分だし、ちょっと外行って来るね」

「えっ？まだ何か用事があるの？」

「うん、今日中にやりたいことがあるんだ」

「だけど、今日は疲れてるはずだし休んだらいいのに……」

「ん〜、でも早くやっておかないと、忘れてこの家から出されそうだし……」

零香はそう言いながら、パルサーシャの出した『保護する3つの条件』を思い出していた。

一つは、アクウのネックレスを買ってくること。これは今日終わらせたから、大丈夫。

二つ目は、剣を台座に戻してくる事。これがまだ終わってないのだ。

三つ目は、まだ期間が後3日ある。

早く終わらせておかないと、3日後の祭りの練習ができない。だから、今日中に終わらせたかったのだ。

それに、他にも色々やりたいことが沢山ある。

「エリミア、パルサーシャさんから預かった剣。ちょっと出してくれる？」

「わかりました」

エリミアは空間の中に手を入れると、ゴソゴソと中を探って、小剣を取り出した。

零香はそれを受け取ると、カミィラに「すぐ戻ってくるね」と言ってお食堂を出た。

食堂を出ると、ちょうど湯浴みをした後のエリクとばったり会った。エリクは、零香の持っている剣を見て

「どこに行くんですか？」

と、頭を拭きながら微笑んだ。

零香は、その笑顔にクラリとしながらも表面上は落ち着いて、エリクに「少し、用事です」とだけ告げて、外に出ようとした。だが、扉に手をかけた途端に思い出した。

「そういえば、あの蛇はどこに行ってしまったんですか？」

「蛇？……ああ、アレですか」

エリクが少し困った表情で首を傾げていると、ふと零香の横を見て、笑顔で指を差した。

「？何が……」

零香はエリクが指を差した方を向くと、窓があつた。そこが何度もカタンカタンと鳴っていたのだ。

覗いてみると、零香は思わず窓を開いて、音を出していた生き物を抱きしめた。

「可愛い!?!」

零香が抱きしめたのは、小さな狐の子供だった。だが普通の狐とは違い、毛は純白、瞳は赤く、尻尾が九本あった。

だが、零香にとってその愛らしさの方が重要だった。

小さな足で一生懸命、何度も窓を叩いていた姿は零香の心をグサリツと射止めたのだ。

その抱き心地も最高で、純白の毛はふかふかで柔らかく、頬ずりしなくなるほどの温かさだった。

エリクは、零香の満面の笑みを見て驚き、頭を拭いていた手を止め、零香の腕の中からヒョイツと狐を持ち上げた。

「あっ……」

「コイツですよ」

「え?」

「だから、コイツがあの子です」

零香は信じられない様な顔で狐を見つめた。

すると、狐がスルリとエリクの手から逃れ地面に降り立った瞬間、蛇になっていた。

『コレデワカッタカ?』

「この声…本当にあのときの蛇ちゃん?」

直接頭の中に語りかけてくる声が、あの時洞窟で聞いた声とそっくりで、ようやく信じた零香は少しがっくりとしていた。蛇は少し首を横に曲げると、ついさっきの狐の姿に戻り、零香の足に擦り寄った。

『ワレノホントウノスガタハ、イマノスガタダ』

「……そうなの?」

『アア、モトアルジノセイデスガタガコテイサレテイタダケダ』

「……よかった、本当に魔法が解けて。もしかしたら、解けないかと思ったよ」

『ソレハナゼダ?』

「あう、そつそれは……」

零香は一瞬戸惑い、チラツと横に立っているエリクを見て、狐を抱き上げてその耳に隣に聞こえない様な小さな声で呟いた。

「……私、少し経験あるから……」

『ツマリ、シヨジヨジャナカッタト?』

「いや、そこまでは……ただ、その一歩手前ぐらいまでは…ある」

『フム、マアワレガモトノスガタニモドッタノダカラ、ダイジヨウ
ブダツタンダロウ』

「うん、少しホツとした」

零香は、狐の頭を撫でながら頷いた。

エリクの方を見てみると、キョトンとしたような顔で首を傾げながら、零香を見ていた。

どうやら、今さっきの会話は聞こえていなかったらしい。

零香は安心して、一息ついていると狐がじっと、自分の手を見つめていることに気づいた。

その手には、剣が握られている。零香は、それを狐の目線まであげた。

「これに興味あるの?」

『イヤ、チガウ。ソレハワレノカラダノイチブナノダ』

「へえ、そうなんだ……って、えええ!?!」

零香は告げられた事実には驚きながら、狐がそれを寄越せと言っから、狐の足に剣を持たせた。

狐は器用にそれを掴むと、それを空中に投げ、パクリと食べてしまった。

その行動に、その場にいた全員が驚いた。全員と言っても、エリクと零香と二人と一匹を見ていた兵士達だけだったが。

狐は、満足そうに首を振ると零香に頭を下げた。

『ありがとう。少し力が戻った』

「あれ？声、変わってる」

『そうか？…まあ、力が戻ったからそう聞こえるだけだろう』

「だけど、まるで男性の声みたい……」

『我に性別はないぞ？姿など、簡単に変える事ができるしな』

「もしかして、人間にもなれる？」

『試した事は無いが……やってみよう』

狐は零香の腕の中から離れると、床に足をつけてクルクルと円を描くように回り始めた。

最初は、ゆっくりだったのが徐々にそのスピードは増し、次第に姿が霞んで見える。

さらに、小さかったその体は徐々に大きくなり、零香の身長より大きくなった。

そして、一瞬光ったかと思うと、そこには狐とは違うものが立って

いた。

身長と同じくらいの長い純白の髪が揺れ、巫女の服の様な白い着物を身に纏い、笑みを浮かべる素晴らしい美貌の男性が立っていた。ただ、頭の上に生えた耳と背に見える九本の尻尾を見ると、人間ではないことがわかる。

どこかで、女性の黄色い悲鳴のような物が聞こえたような気がした。

「ふむ……上手くいくものだな」

「凄い！本当に人の姿になってる」

「む…ま、まあ当然だ。我は始祖精霊なのだからな」

「「はあ？」」

零香の言葉に、照れながら尻尾を横にぶんぶん振っている狐だったが、零香とエリクは狐の言った言葉に、耳を疑った。

神様が一番最初にこの世界に送り込んだ精霊、とパルサーシャから説明されたが、目の前にいる狐の精霊は自分のことを、その精霊だと、言ったのだ。

だけど、ついこの前まで王子の首に魔法で固定されていて、姿まで変えられていた。

「元主は、どのくらい強い魔力の持ち主だったのよ………」

「しかも、僕の魔力より上の人って、僕の父しか知りません」

「いや、魔力はそれほど持ってなかった。むしろ、普通の奴より少なかった」

「だったら、何故僕や父がその魔法を解けなかったんです。ありえないでしょう」

エリクの言葉に、狐は唸りながら悩む表情を見せた。そして、何か思い出したかのように手を合わせた。

「あいつは、親の力を借りたのだ」

「親？」

「あいつの父は、変態でな。精霊を妻に持っていたのだ。それも、見た目8歳の精霊を」

「変態は遺伝だったのか……で、精霊と人間って結婚できるの？」

「無理だ。だから、その精霊は人間に化けて妻となったのだ。まあ、元々あやつは人間そっくりだったがな」

そう言う狐の目は、過去を懐かしむような目だった。

「で、その精霊の力を借りて、我を固定させた、というわけだ」

「その精霊って、貴方と同じくらいの強さだったの？」

「我より格下の奴だったが、属性がまらなかった」

「属性？」

零香が首を傾げると、狐は手を開く。すると、狐の手の上で小さな竜巻が出来た。

狐がそれを下に落とすと、竜巻は強くなり、一瞬吹き飛ばされそうになった。

が、狐がスツと手を横に引くと竜巻は跡形もなく消えた。

「我は、今の様に風を自由自在に扱うことが出来る。だが、弱点があつてな。土を扱う者には、全く効かんだ」

「ふん……」

「その精霊が、土を操る者だったわけですか」

狐はエリクスの言葉に、頷いた。

零香は、そこでシュラの事を思い浮かべていた。

（そういえば、シュラはゴーレム。人の姿だけど、土から出てきたんだよね……）

「シュラ、ちょっと来て」

大きな声で彼を呼ぶと、トコトコと走って零香に飛びついてきた。零香は彼の体を受け止めて、優しく頭を撫でる。そして、彼の体を持ち上げて狐の目の前に出す。すると、予想外の反応が返ってきた。

「おお、これは久しい奴を見た。今までどこにいたのだ？」

「……………！」

「ふむふむ、なるほど。…………それは迷惑をかけたな」

「シユラの言葉、わかるの？」

狐は、零香の問いかけに頷きながらシユラの頬を指で突きながら、笑った。

「当然だ。こやつは我の同胞、同じ始祖精霊が一人。昔と違う姿だったから、わからなかったがな」

零香は、思わずシユラを手から落としそうになった。落としては危ない、とエリクがシユラを零香の腕から一時的に預かった。零香は、シユラの頭を撫でて「ごめんね」と謝った。

狐は零香の反応に微笑んで、いきなり膝を折り、頭を下げた。その行動は周りの人の視線を集めた。

始祖精霊を名乗る者が、人間に頭を下げた。人間よりも、精霊は存在が上として崇められているのだ。それも、神として。

その神の代理人ともなるべき存在が、精霊にとってちっぽけな少女に頭を下げている。

零香も、狐の行動に驚いていた。

狐は、驚いた表情を見せる零香を真剣な表情で見つめながら、胸に手を当て、言った。

「我を救いし少女よ。我は、そなたとの契約を望む」

「契……約？」

零香の左手を取って、狐は頷く。

狐は、自分の力を零香のために使いたいと言った。昔の主とは、もうすでに契約を切ったとも言った。

その真剣な表情に断りきれず、意味がわからないまま、縦に首を振った。

狐は嬉しそうに頬を朱に染めながら笑うと、零香の手に、胸に当てていた手をのせる。

「我に名を与えよ。さすれば、契約は成される」

「……クオでいい？。九尾きゅうびを別の読み方にすると、九尾くおとも読めるから」

「安直な様な気もするが……まあ良い」

狐　　零香にクオと名づけられた男は、立ち上がると、握って

いた零香の手に離し、クルリとその場で優雅に回った。
そして、歌うようにそして宣言するように、彼は言った。

「我はクオ。この地を守護する始祖精霊が、一人。風を操りし精霊。
我は今、新たな主を得た」

彼がそう告げると同時に、零香の左手に痛みが走った。

針で刺されているような、爪で傷を付けられているような痛みが左手の甲を覆っている様な気がした。

だが、その痛みはすぐに消え、暖かい光に包まれているような感触がした。

左の手を見ると、中指に銀細工の指輪がはめられていた。指輪の中心には、綺麗なエメラルド色の石がはめ込まれていた。
その指輪から、かすかに暖かい感触がする。

「我が力は主の剣。我が魔力は主の盾。我が命は愛しき主に、全て捧げよう」

クオはそう言うと、優雅な動作で零香の左手にはめられた指輪に、口付けをした。

零香はクオの仕草一つ一つで、鼓動が早くなっていくのがわかった。右手で心臓を落ち着かせるように、一度深呼吸をすると、スツと鼓動がゆっくりとなった。

「これで、終わり？」

「ああ、終わりだ。……いや、ついでにこやつとも正式な契約を交わしておいた方が良さだろう」

狐はエリクに抱き上げられていたシュラを片手で持ち上げ、自分の腕に乗せるように抱き上げた。

シュラはされるがままで、ただクオの耳に興味津々で、話をする間ずっとクオの耳を触っていた。

シュラの子供のような行動を見ると、人間の何倍も生きている精霊とは思えなかった。

零香は、人間のようなシュラの頬に触れながらクオに問いかけた。

「何故？今までどおりだと、駄目なの？」

「我らは永遠に近い命を持っておるが、魔力が尽きればその命も消えうせるのだ。こやつは、主が呼び出したのだろう？」

「うん、本当はゴーレムを呼び出そうとしたんだけどね。精霊だったんだ、シュラって」

「正確には、違うのだ。こやつは、土を操る始祖精霊でもあり、ゴーレムでもある」

その言葉に、零香はシュラの頬を触るのを止め、クオの顔を見つめた。

クオは一瞬悲しげな瞳でシュラを見ると、零香にこう告げた。

「精霊とは、肉体を持たない事で周りのあらゆる物から魔力を吸収して、生き続けることができる。だが、こやつはゴレムとしての肉体を手に入れてしまった。……それが意味する事が、主ならずぐにわかるだろう」

その瞬間、息が止まるような感覚に零香は襲われた。

クロツカス村 4 - 3 (後書き)

蛇、再登場です。

この人も後日、人物紹介の方へ追加します。

クロッカス村4 - 4 (前書き)

今回は長いです。

長いわりに、なんか文章が最後のあたり変です。

それでもよい方は、どうぞ

零香は頭の中では結論を出していたが、それを心の中で、認めたくない、と拒否をしていた。

言ってもいいと頭の中で思っても、心では言うなと拒絶している。下唇をギュツと噛みながら、零香はクオを見上げていた。すると、服が下に引つ張られその方へ顔を向けると、エリミアが零香と同じようにクオを見上げていた。右手は、零香の服を握ったまま。

「それは、私と同じという事でしょうか。クオさん」

「……エリミア」

突然登場したエリミアに驚きながらも、心の中でホツとした。エリミアをそっと抱き上げながら、クオと視線が合う様に肩にのせる。エリミアは零香に寄りかかるような体勢で、話を続ける。

「私は、零香によって作られた人形です。少しシユラとは違いますが、構造的にはシユラと同じはずです。違いますか？」

クオは、エリミアとシユラを交互に見ながら「なるほど」と頷いた。

「確かに似ている。同じと言っても過言ではないな」

「私は、零香の魔力を少し貰いながら動いています。ですが、自分でも魔力は補給できています」

エリミアのその言葉に、クオは目を見開いた。

そして、まじまじとエリミアを見ながら零香の肩から持ち上げた。シユラにエリミアを持たせ、クオは手を顎に付けながら悩んでいるようだった。

「……確かに魔力を吸収している……何故だ？どうして吸収する事が出来る」

「さあ。ただ、魔力を補給するときには人間と同じ方法のほうが、楽で沢山吸収できる事がわかります」

「ふむ。我ら精霊は眠る事はあるが、食べる必要は無いからな……」

「えと、話に置いてけぼりなんですが？」

そこでようやく零香の存在を忘れていた事に気づいたのか、エリミアとクオは同時に「ごめんなさい」「申し訳ない」と言って頭を下げた。

そこに、今まで黙って話を聞いていたエリクが混ざる。

「簡単に言うと、契約とは精霊にとってなんなんですか」

「人間で例えると、食事ということになるな。我らは、契約をする
と自然からの魔力の供給がほんのごくわずかになる。それだけだと
自分の身が保てない。だから、契約者から魔力を貰い、自分の姿を
保つのだ。その代わりに、契約者に忠誠を誓い、契約が解けるまで
仕え、自分の力を分け与えるのだ」

「なるほどね。だから、シユラと契約をした方がいいって言ったの
か」

零香の言葉にクオは頷く。

そして、エリミアを見ながら首を傾げる。

「ただ、なんでこやつが契約もせず動いているのかがわからぬがな」

「それは、私にもわかりません。まあ、どうでもいいですけど」

エリミアはそういいながらため息をついて、軽い身のこなしで零香
の腕の中へ飛び込んだ。

零香は驚いたが、満面の笑みでエリミアを受け止めた。

その笑みに、周りにいた男女を含む全ての人たちが硬直した。

だが、それを気にせずエリミアは零香の腕の中で、同じように微笑
んで言った。

「私は、零香の傍にいただけでいいんですから。そんな事知らなくても、別にかまいません」

その言葉に零香は、心から喜んだ。そして、エリミアを強く抱きしめながら「ありがとう」と言って微笑んだ。
エリミアは頷きながら、その小さな手で零香の頬に触れ、優しく撫でた。

「……………ははっ、それは確かだな。我も傍にいたいから、契約したような物だ」

その様子を見ていたクオは苦笑しながら、腕の中にいるシユラを地面に下ろす。

すると、シユラはゆっくりと零香の傍に来て、零香の左手を握った。

「何？」

零香はシユラの頭を撫でながら、視線を合わせるため身を屈めた。
シユラは少し目を横にやりながらも、そっと零香の手を握っている手を持ち上げ、クオと同じように指輪に口付けた。
すると、小さな鈴の音がリンと鳴る音が聞こえたかと思うと、指輪の形が変わっていた。

正確には、指輪の模様と石が変わっていた。

ついさつきまでは、エメラルドの石しかはめられていなかったが、その石を取り囲むようにしてオレンジ色の小粒の石が何個も付いているのだ。
模様もシンプルだったものが、複雑な物に変わっていた。
突然の変化に啞然としていたが、今度は別の事で驚愕する事になった。

「これで、ぼくはれいかのものだよ。ずっと、まもるからねっ！」

「……シユラ……？」

シユラが、初めて言葉を話した。

舌足らずな感じがするが、ちゃんと言葉を話していた。驚いて、何度もシユラを軽く手で叩いてしまい、泣かれて慌てて謝る羽目になった。

シユラは、泣きながらそれでも嬉しそうに頬を染めて零香に抱きついていていた。

「ふん。で、主よ。やりたい事があるのではなかったのか？」

「あっ、そうだった。剣は本当の（？）持ち主に返したから……」

そっぴいなながら、零香は目線を斜め上にしてそこに立っていたエリクに向けて。

エリクは、あくびを噛み締めながら、零香の意味ありげな視線を受け取って、首を傾げた。

「エリク様。晩御飯まで少し、時間を頂いてもよろしいでしょうか」

「ええ、別にかまいませんよ。何をするのですか？」

「それは、お楽しみということ。……エリミア、カミィラを呼んできて。シユラは、リュナミスさんを。クオは、人が住んでいなくて広い場所を探して」

「わかりました」「引き受けた」「あゝい！」

3人は、それぞれの役目を済ませるため、3方向に分かれて走っていった。

その背中を見送り、零香はエリクと向かい合った。

「エリク様。少し、魔法の使える方と強い兵士の方を数名、貸していただけませんか？」

零香の言葉に、エリクは苦笑を浮かべて後ろを指差した。
エリクの背中に隠れていて見えなかったため、横から覗くように見ると

「おっしやあああああ！何やるかわからないけど、準備するぞ！」

「了解！武器など部屋から取って来ます！」

「少し、準備運動しておこう」

兵士達がすでに準備をし始めていた。

武装しているあたり、零香の考えを察したのだろうか。まあ、どうせ後で装備してもらおうと思っていたから好都合だった。

ただ、元気がありすぎるため、空回りしないだろうか。と心配はしたけど。

その様子を見ながら、零香とエリクは視線を交わしながら、微笑んだ。

「さて、僕も準備をしてきます。剣が必要でしょうからね」

「ええ、御願います」

零香は笑ったまま、部屋に戻っていくエリクに頭を下げた。

エリクが部屋の中に消えていったのと同時に、クオが空中から姿を現した。

風を利用した、瞬間移動をしてきたらしい。

そのまま、零香はクオが調べてきた場所に向かった。

そこは森の開けた場所で、ある程度大きい物音がしてもクオが風で音を遮断できると聞いて、もっと広げるため樹を魔法でなぎ倒していった。

もちろん、後で合流したシュラに、樹はどこかに積み上げてもらった。

十分の広さになった広場に、少し満足しながら頷いて、零香は皆が来るのを待った。
心の中で、わくわくする気持ちが溢れすぎて待っても待ちきれなかった。

いきなり零香の契約精霊に呼び出された彼らは、エリミアの魔法ですぐに目的地に着いた。
周り半径10kmほど芝生も無い地面が広がり、その周りを壁のようにして樹が生えていた。
呼び出した本人を探すと、すぐに見つかった。

「あっ、ようやく来ましたね！待ってましたよ」

黒曜石のような黒く長いをなびかせ、彼女は広場の中心に立っていた。

その目は、夜でもわかるほど子供のようキラキラと光っていた。

「で、ここで何をするつもりなんだ？」

「ん、最初は私の魔力を試してみたいですね。魔力の強い人で、防御魔法が使える方少し集まってください」

彼女はそう言つて、今自分が立っている場所から手を振った。

そこに兵士が数名と、殿下が歩いていった。俺も一応防御魔法は会得しているから、彼女の傍に近寄る。

彼女は目の前まで来たメンバーを一通り見て、何度も頷きながら考え込んでいた。

「よしっ、それじゃあ皆さん、ここに立ってください」

「ここ、でいいんですか？」

彼女と入れ替わりで殿下が立つと、彼女は微笑んで数mほど離れた。その間に、殿下を囲むように立つ。何が起るかわからないため、一応用心したほうがいいだろうという事で、殿下の執事からアドバイスを貰ってきている。

「で、俺達はどうすればいいんだ」

「これから、私が魔法を使うんで、皆さんの使える最高の防御魔法で受け止めてください！」

「了解した」

彼女の声を聞いて、精神を落ち着かせ、魔力を高めていく。周りの兵士達も同じようにして魔力を高めていくのがわかる。ただ、殿下は平然とした様子で立っている。まあ、彼は上級魔法が使える。いざとなれば、遠くで見守っているカミィラと殿下の執事が助けに入るだろう。

魔力を極限まで高め終えると、彼女に向けて上に手を上げる。彼女はそれを見て頷くと、手を大きく広げ、魔法を詠唱し始めた。

「氷よ、全てのモノを凍らせる力となり」

彼女の凜とした声が辺りに響き渡る。

それと同時に彼女から凄まじい魔力があふれ出てくるのが、体でわかった。

急ぎ、魔法耐性の強い防御魔法を殿下を除く、全員で唱え始める。

「魔力よ、私の願いし形になりて」

「強固なる壁を打ち砕く、力となりて」

「我らを守る、強固なる盾となれ」

そして、同時に詠唱を終える。

「 極限まで砕け！アイスピア・レイン！！ 」

「 っっプロテクション！！！！ 」

この場にいる全員を守るかのように広がる青白い光に、数秒の差で氷の槍が降り注いだ。

三重にして重ねられた、魔法特化の防御魔法にすぐさまひびが入る。魔法を保つために貯めていた魔力が徐々に消費されていく。だが、その量が多すぎる。

気を緩めると、すぐに魔法が効力を無くすことになる。彼女の魔法が終わるまで、耐えなくてわ……。

「 なっ！ どんだけ強い魔力持ってるのよ！？ 」

「 集中しろ！ 気を緩めると、すぐに壊されるぞ！ 」

「 りよっ、了解しました！！ 」

気を引き締めなおしたと同時に、予想外の事が起きる。

「炎よ、全てのモノを溶かす力となり」

「何で次の詠唱を始めてるんだ!!」

思わず彼女に向かって叫ぶように言うと、「今度は力を貯めてから打ちますから」と楽しそうな声で返事をされた。

今の状況で次の魔法を打たれたら、防御魔法が壊される可能性が極めて高い。

「副隊長っ！一枚目、壊れました！」

「お前は次の魔法に備えて、魔力を貯めなおせ。二枚目、耐えられるか？」

「まだ大丈夫です。次の魔法まで、持つでしょう」

「必ず持たせる。……殿下？」

兵士達に指示を送っていると、殿下が片手を上に上げ、瞳を閉じている。

「僕も、参加させてもらいましょう。」

聖なる光、我らを守る

ため、具現せよ」

その言葉と同時に、殿下の唱えた防御魔法が現れる。

巨大な金色の盾が二つ目の前に現れ、氷の槍を防ぐ。だが、これで終わりではない。

「更に、魔力を吸収し、己の力となせ。ホーリー・プロテクション」

盾は氷の槍が当たると、徐々に大きくなり、全ての攻撃から守るように俺達の唱えた防御魔法を天井を覆った。その時、彼女が笑ったのが見えた。

「光よ、天より降り注ぎ、悪しきモノを滅す、雨となれ」

「詠唱中なのに、魔法を変えた!？」

兵士が驚いて、気を抜いた瞬間、彼女はその隙を付いて詠唱を終える。

「セイクリッド・レイン」

彼女の手から金色の光が現れ、光から無数の光の雨が降り注ぐ。それを受け止めながら、殿下は唇を噛んでいた。

「殿下!!」

「受けきれるか、わかりませんね。結構、辛いです」

殿下の言葉に、兵士達の顔が青ざめていくのがわかる。

殿下は、この国で2番目に魔力が強く、彼が受けきれないという事は我々には到底無理だという事。

防ぎきれない。

彼女にすぐに止める様合図しようとした時、彼女の腕が別の方向へ向いた。

途端に、光の槍が消え、安心して防御魔法を消す。

「ふう……疲れた……」

腰を地面に下ろして、ため息を付く。そして、彼女のほうをもう一度見る。

彼女は真剣な表情で地面を見下ろし、すばやい動きでこちらを見ると、叫んだ。

「そこから離れて!!」

「「っ!」」

その声に従うように、呆けている兵士を抱え、跳躍する。殿下が同じようにもう一人の兵士を抱え、同時に観客の場所まで着地する。

その瞬間、つい先ほどまでいた場所から何かが飛び出した。続くように8つほど黒い物体が飛び出してきた。それと共に辺りに広がる、あの嗅ぎ慣れたにおい。

皆がそれぞれの武器を取る中、殿下とその執事だけはいつもと変わらぬ様子で立っていた。

彼の視線は、彼女に向いたまま。

「こんな所で魔物のお出ましですか」

「殿下」

「丁度いい、彼女達がどんな力を見せてくれるのか、観客に徹する事にしましょう」

入団試験です。彼はそう言って、魔物たちの真正面に立つ彼女達を見て、笑った。

上司に当たる殿下の言葉に違和感を覚えながら、その言葉に従う。

「……了解、致しました」

その視線は彼女を見つめながら、助けに入る事のできない自分を憎んだ。

上に逆らう事の出来ない、騎士としての自分を憎んだ。

ただ、無事でいてくれと心の中で祈る。

そして、魔物が彼女達に襲い掛かった。

クロツカス村4 - 4 (後書き)

今回初の戦闘シーンです。

書いてて、ものすごく難しかったです。

次回の話は全部戦闘シーンになるので、多分、結構時間が掛かると
思います(・・:)

上手く小説が書けるようになりたいな・・・

感想・ご意見、お待ちしております!! ^^

クロツカス村 4 - 5 (前書き)

戦闘シーンの続きです。

今までで一番書くのに悪戦苦闘しました。

目の前に現れた黒い生き物の内の一匹とにらみ合いをしながら、零香の頭の中は怒りで溢れていた。

これから魔法を使って面白い物をやろうとした時に、洞窟で感じたあの嫌な空気が地面から感じて、洞窟で会ったあの変な女性を思い出したのもある。そして、自分に向かってあの女がやった事を思い出して、イラッとしたのもある。

だが、一番は零香の存在を素通りして、エリク達を襲おうとした事。

「……エリミア、シユラ、クオ」

そう呟いた瞬間、彼女の目の前の空間が歪み、そこからエリミアとシユラとクオが出てくる。

3人は彼女を守るかのように、ただ悠然と立っている。

「さて、主よ。どうするつもりだ？」

「たたかうなら、たたかうけど？」

「零香、指示を御願ひします」

普段どおりの表情で問いかけてくる彼らに零香は、魔物達に指で差しながら言った。

「被害が及ばないように、存在を消し去る」

その言葉に、3人は笑みを浮かべる。

「御心のままに」「あい!」「了解しました」

その時を待っていたかのように、魔物たちが襲い掛かってきた。一匹が零香の目の前に立っていたクオを狙う。高く飛び上がり、すばやい動作で彼を切り裂こうと、鋭い爪を振り上げた。だが、彼はそれを簡単に片手で受け止める。

「身の程をわきまえない奴だ……消えろ」

魔物の首に腕を突き刺し、腕を地面に振り落とす勢いで、腕から魔物の体を抜く。

地面がへこむほど強く打ち付けられ、数m魔物の体が浮き上がる。彼は魔物に向かって腕を横に振る。すると、魔物の体が刃物で切り裂かれたように、一瞬で肉の塊となって地面に落ちた。

次の一匹は、少年の姿のシユラを狙った。

その頭に食らいつくかのように大きく口を開いて、襲い掛かった。だが、シユラは襲い掛かってきた魔物の頭を持つと、握りつぶした。

「よわいし、もろいね」

頭が潰れ、動かなくなった魔物をシユラはクオの頭上まで高く上げた。

クオはそれをつい先ほどと同じように肉片に変え、踏み潰す。血を浴びて、笑顔を浮かべる彼らに、零香は頼もしい仲間だと思った。

敵になった時が、恐ろしいと思った。

エリミアのほうを横目で見ると、エリミアは空間の中から巨大なハンマーを取り出し、その小さな腕で振り回していた。

「はっ！！」

振り上げるたびに、魔物をハンマーで潰していく。グジョツというグロテスクな音が何度も聞こえたが、ホラーゲームで鍛えられている零香はただ普通にその光景を見ていた。

「主よ。そちらにも行ったぞ」

クオがそう言うのと同時に、目の前に魔物がいた。

唸りながら、自分の様子を見ている魔物を見ながら、どこかで見たことがあるような気がした。

あのホラーゲームの犬に似ているような気がする。今は関係ないけど。

「グルルルルルウ」

「おいで」

「グルウアツ!!!」

零香は襲い掛かってきた魔物の攻撃を横に体を動かして、かわす。顔のすぐ傍を通り抜けて、後ろに向かう魔物に手で触れながら、言う。

「燃える」

その言葉と共に、魔物の体から突然火が現れ、魔物の体を覆う。魔物は地面に転がりながら、何度も火から逃れようとするが、火は消えず魔物の体を焼き尽くす。

魔物の苦しむ声を聞きながら、その光景を見て、すぐに止めをさす。

「アイス・スピア」

魔物の体を氷の矢が貫き、魔物はピクリとも動かなくなった。その表面は、もう識別する事ができないほど焼け焦げていた。辺りに、肉の焦げた嫌な臭いが立ち込める。

手で鼻を押さえながら、次に襲い掛かってきた魔物の横腹を蹴り上げた。

一瞬、体が動かなくなった魔物に意識を集中しながら、呟く。

「ホーリー・ランス」

魔物は、地面から現れた光の剣に貫かれ、消滅した。

周りを見渡し、大体の魔物は消し去る事ができたようだ。丁度同じタイミングで、エリミアがハンマーを地面に置き、クオが肩をまわし、シュラがあくびをしたのが見えたからだ。

「何匹倒した？」

「我は2匹だ。シュラも同じく2匹」

「私は、少し最後の奴に手間取ったので同じく2匹ですね」

頭の中で、最初に見た魔物の数と、倒した魔物の数を照らし合わせる。

だが、そこで違和感を感じて、慌てて周りを見渡す。

「レイカ！怪我してない？今、そっち行くから！」

そう言つて走つてくるカミイラのほうを向くと、傍の茂みがガサツと動いたのが見えた。

最初、九匹いたはずなのに、倒したのは合計で八匹。一匹見つかつていなかった。

零香は、カミイラに駆け寄りながら、叫んだ。

「カミイラ、駄目！！」

「えっ」

カミイラが止まった瞬間、狙ったかの様に魔物が彼女に襲いかかるうと、茂みから飛び出した。

カミイラに迫る魔物を見て、零香は全力で走った。

「いやああああああああああああああああああああっ！
！……」

叫ぶカミイラと襲い掛かる魔物の間に体を割り込ませるように、彼女を抱きしめた。

その途端、背中を鋭い痛みが走る。

「主!!」「零香!!」

「くっ……!!」

「レイカ……?」

怯えた様子で見上げてくるカミイラに、微笑みながら「大丈夫?」
と声をかける。

背中が焼けるように痛いのが、今は彼女のほうが心配だ。

彼女は、目に涙を溜めながら、零香の体にしがみ付いていた。その
体は震えている。

「ワタシはいいけど、レイカが…ッ!!」

「大丈夫……少し、痛いだけだから」

「でもっ」

「大丈夫だから」

後ろでクオとエリミアの怒声が聞こえ、魔物の悲鳴のようなものが聞こえた。

どうやら、彼らが倒してくれたようだ。

カミィラをギュッと抱きしめながら、耳元で囁くように呟いた。

「無事で…よかった…」

「レイカ、レイカあ」

「泣かないで。大丈夫、もうあまり痛くないから」

嘘をついて、彼女を落ち着かせるため、背中を擦る。

背中が熱い。なのに、額から冷や汗が出ていた。

ずっと抱きしめていると、カミィラから離すように誰かが後ろに引っ張った。

簡単に腕がはずれ、力が抜けて地面に座り込んでしまった。

後ろを振り向くと、無表情のリユナミスと目が合った。

「リユナミスさん？」

「動くな」

「……はい」

彼に背を向けた状態で座っていると、彼が魔法で怪我を癒す為呪文

を唱えた。

徐々に背中の中の痛みは消えたが、体が異様にだるい。

痛みが無くなり、足に力を入れて立ち上がるうとするが、傍に来ていたエリクに支えられてようやく立つ事ができた。

「ありがとうございます」

「あれだけ魔力を消費していたら、動けなくなるのも当然ですよ」

零香は「そうですか。次回からは気をつけます」と呟く。まだ魔力の感覚がわからない。

今こうやって立っているだけでも、辛いのを隠しながら、泣きながら謝ってくるカミィラの頭を撫でる。

「ごめんね。ごめんね」

「もう良いよ。それより、カミィラが無事で本当に良かった」

「だけど、私のせいでレイカが怪我しちゃった」

「私が一匹残してたのが悪いんだから、カミィラは悪くないよ」

そう言つて、腕を支えてくれていたエリクから離れ、少し歩く。

彼らの視線を背中で受け取りながら、行く場所は魔物の肉片の集まった場所。

生々しい血の臭いに鼻が曲がりそうになるが、零香は汚れるのを気

にせず、肉片の前に座る。

「……ごめんね」

魔物とはいえ、生きるために人を襲ったのだろう。

その命が、どうか安らかに眠ってくれる事を祈りながら、零香は目を閉じ手を合わせた。

そして、後ろを振り返り、シユラを呼んだ。

シユラが心配そうに見つめてくるのを、安心させるように微笑むと、シユラに言った。

「穴を、作ってくれる？」

「…わかった」

シユラはすぐに穴を作ってくれた。

1mほどの穴に零香はそつとまだ温かい魔物の遺体を、入れて、その上から土を被せた。

土を被せ終わると、クオが手を掴んできて服の裾で拭って綺麗にしてくれた。

クオの顔を見上げると、血を浴びていたはずなのに服は白く、髪も月の光で煌いていた。

「主よ、あまり無茶をしないでくれ。心臓が止まるかと思ったぞ」

「ん、ごめん。でも、勝手に体が動いたからしょうがないよ」

「しょうがない、ですむ問題ではないぞ……」

呆れたようにため息を付いたクオに、零香は満面の笑みを見せた。

「心配してくれてありがとう」

そう言うと、何故か頬を朱に染めて顔をそらした。

だが、尻尾が横に高速で動いているからわかりやすかった。

クオを見ながら笑うと、隣でエリミアも一緒に笑った。

すると、呆れたような安心したような声でパルサーシャが言った。

「はいはい、その人達。家に帰るよ」

「あつ、その前に……」

手を合わせ、頭の中で花畑の花達を思い浮かべ手を広げる。

すると、手に白い菊の花が現れた。それをそつと土の上に置く。

そして、もう一度手を合わせてから立ち上がる。

立ち上がると近づいてきたカミィラの目の前で、手から小さいピンク色の花を咲かせて見せた。

「髪に付けてあげる」

零香は満面の笑みでカミィラの髪に、手のひらのピンクの花を挿した。

カミィラは驚いて、その花を見て、いきなり頬を真っ赤に染めた。

「……………レイカが男だったら、猛アタックするのになあっ……………」

「ん？」

「なっなんでもないよ！ありがとう、レイカ」

「どういたしまして。似合ってるよ、カミィラ」

零香の笑みとその言葉で、今度こそカミィラはノックアウトした。後ろにフラリと倒れそうになり、なんとか持ちこたえるが、耳まで真っ赤にしていた。

「カミィラ、大丈夫？」

「だっ大丈夫……」

「カミィラ、レイカに見惚れてないで帰るよお。帰ってワインを飲もうじゃないかい」

「見惚れてない……！」

カミィラをからかうパルサーシャの言葉に疑問を覚えながら、零香は自分の頭に触れる。
すると、プチツという音と共に髪をまとめていたゴムが切れ、髪の毛が広がった。

「あつ、切れた」

切れたゴムを握りながら、一度ため息をつくと、皆の視線が自分に集中しているのに気づく。

体を射抜かれるような勢いで見られ、零香はオドオドしながら首を傾げる。

すると、横に立っていたクオがいきなり肩を掴んできて、腕の中に引き込まれる。

「クオっ？」

「」

いきなり髪の毛に頬ずりされる。

訳がわからずされるがままになると、目の前にリュナミスとエリクが立っていた。

その表情は、無表情に近い。

「どうしたんですか？」と聞こえたと口を開いた瞬間、腕を引っ張られクオの腕から開放されていた。

いきなり強く引っ張られ、首がグキツと鈍い音をたてた。

首を押さえながら二人を見ると、ついさっきまで無表情だったのが嘘のように微笑んでいた。

「さあ、帰ってワインでも飲みながらゆっくり休みましょう。魔力も大量に消費していますしね」

「そうですね。それが一番かと思います」

「あの、お二人とも？」

「さあ、そこにいる狐なんて無視して行きましょう」

「先にエリミアが魔方陣を開いて待っていますからね。遅れたら彼女に怒られます」

「ちょっとあの、どうしたんですか？ 様子が先ほどと違いますか？」

その言葉に、零香を挟んで腕を掴んでいる二人は同時に

「いいえ？これが普通ですよ」

「これが普通だ」

と、満面の笑みで言われた。

零香は心の中で（絶対嘘だ）と思いながら、二人にカラ笑いを見せ、引き摺られる様にして帰路についた。

その後ろを、二人に文句を言いながらクオがついて来たが、二人は完全に無視をしていた。

家に帰り、二人が先に食堂に行くと、家の端っこで落ち込んだクオに零香は頭を撫でてあげた。

「うう、何故こんな扱いを受ける……」

「はははは……それは……私にもわからないな」

「ただ、我はかまって欲しかったから擦り寄っただけなのだがなあ」

「タイミングが悪かったんだよ。うん」

一番の原因はその姿の所為だろうな、と薄々気づいていたが、零香はクオの姿が気に入っていたので、そこは言わなかった。

一応、「男じゃなくて、女になってみたら？」と言って試してみたが

「胸の肉が邪魔。動きづらいし、肩が重くてしょうがない。やはり、男の体が良い」

とDカップ以上はありそうな豊満な胸を自分で触りながら、そう呟いた。

零香は拳を握りながら、魔法を唱えようかと思ったが理性で踏みとどまった。

クロツカス村 4 - 5 (後書き)

胸の大きい方に「胸が小さいの、うらやましい」「と言われると心から喜べないのは私だけでしょうか？」 (^ ^)

彼らの日常（前書き）

今回は長いです。他の話と比べると、ものすごく長いです。執筆中に書きたい事が増え、増やしていったらこういつ結果になりました。

それでは、どぞ。

彼らの日常

部屋に一旦戻り、背中に穴の開いたパーカーからゆったりとした水色のワンピースに着替えると、零香は食堂に向かった。

髪は何故か「結ばずにおいで」とパルサーシャに言われたため、下ろしたままだ。

本当は団子にして結んでおきたかったのだが、周りが有無を言わせない状況だったため、頷くしかなかった。

結ぶゴムは持つては来なかったが、髪が食事の邪魔にならないように留めるためのピンを、4本ほど持つてきた。

「さて、今晚の御飯は何かな」

ワクワクしながら食堂の扉を開くと、熱気と沢山の笑い声が一気に体に纏わりついてきた。

「あはははははは！弱いなえ、あんた達！こんなに弱かったかい？」

「パルサーシャさんに勝てる人なんていませんっ！」

「もう、俺飲めない……うぷっ」

「おまつ、ここで吐くなよ！？」

酒ダルの上に座り、酒瓶のようなものを持って豪快に笑うパルサー
シャ。

その周りには、彼女を盛り上げるように兵士達の一部が群がっていた。

他の兵士達は、黙々と食事しているか、それぞれの場所で話しながら、笑いあっていた。

少し呆気にとられ、入り口で立っていると、髪を一つにまとめエプロンを付けて机から机に忙しそうに歩き回っている、ユーリアの姿が見えた。

どうやらもうここに馴染んでいるらしく、歩くたびに兵士達に呼び止められている様だった。

彼女の姿を自然と目で追っていると、端のほうに座っている目立つ姿の格好の人達を発見した。

「エリミア、クオ、シュラ」

彼らの名前を呼びながら近づくと、思わず彼らの顔を見て笑ってしまった。

クオは赤ワインのような赤い飲み物を平然とした顔で飲んでいるだけなのだが、エリミアとシュラは競い合うかのように口の中に沢山料理を詰め込んでいた。

まるで、餌を口に溜め込んでいるリスが2匹いるみたいだ。

「ももひよいでひゅや、らむか」

「もふー!」

「はいはい、口の中を無くしてから喋ってね。お行儀悪いよ?」

クオの隣の空いた席に座り、クオに渡されたグラスに水を注いでエリミアに渡す。

エリミアはそれを受け取り一気に飲み干すと、一息ついた様子でナブキンで口の周りを拭いた。

そんな彼女の横には高く積み上げられた皿の山。いまだにずっと食べ続けているシュラの横にも、同じ皿の山があった。

「すごい皿の山だけど、何皿ぐらい食べたの?」

「76皿ぐらいです。シュラと合わせると173皿になります」

「凄い食べたね……」

皿の山を見ながら啞然としてみると、目の前にパスタの様な料理が出された。

横を見ると、カミィラがこの前のピンクのエプロンを付けて、笑顔で立っていた。

「ユーリリアさんと作ったんだけど、自信作だから食べてみて!」

「ありがとう、カミィラ。後、飲み物も欲しいんだけど何かオスス

メある？」

「口に合うか判らないけど、何個かあるからすぐ持ってくるね」

「うん、食べながら待ってる」

台所のほうへ走っていくカミィラに手を振り、零香は手を合わせてからパスタを一口食べてみた。

見た目はミートソースの様だったが、口に入れてみるとペペロンチーノの様なピリツとした辛さが広がった。

見た目と味のギャップに首を傾げるが、美味しいから問題は無い。食べていると、すぐにカミィラが戻ってきた。手にはお盆を持って、鮮やかな黄色や青、赤紫やピンクの液体の入ったワイングラスを持ってきた。

「お待ちせう。さて、どれから飲む？」

「そのピンク色の……」

「これ？これはアーダっていう名前なんだよ。はいどうぞ」

カミィラからピンク色の液体の入ったワイングラスを受け取る。

少しグラスの中を見て、一口含んでみる。

完熟した桃のように甘いのに、後味がミントの様にすっきりしていた。

「美味しい」

「良かった！喜んでもらえたみたいで」

「これ、カミィラみたいだね」

「えっ？」

突然何を言い出すという顔のカミィラに気づかず、零香はグラスの半分までアーダを飲んでほっと息を付く。

「カミィラの髪と同じ色で綺麗だし、カミィラに似合うなと思ったの」

「似合う……」

「うん、優しくて可愛いカミィラにピッタリだね」

「あうっ」

カミィラは突然顔を真っ赤にして、お盆で顔を隠した。

何故顔を隠したのかわからず、零香はアーダを飲みながら首を傾げた。

カミィラはお盆から少し顔を出し、ぼそぼそと囁くような声で言った。

「レイカって、普段からそんな事言うの？」

「うん、普通だと思うけど、もしかして駄目だった？」

「ううん、駄目じゃない！むしろ、あんまり褒められた事無いから嬉しくて！」

そう言いながら、花が咲くように笑ったカミィラを見て、零香も同じように笑った。

「さて、気を取り直して。次はどれにする？」

「その青いの」

「これね。これはクリティニアって言う名前のお酒。結構女性向けのお酒だよ」

今度は青い液体の入ったグラスを受け取る。

酒を飲むのに躊躇しながらも、好奇心から一口飲んだ。

柑橘系の甘さが口の中に広がり、アルコール特有の喉の焼けるような感覚は無かった。

炭酸の入ったオレンジジュースみたいな感じだ。

「ちょっと飲むのに躊躇してたけど、もしかしてお酒って初めて？」

「うん、初めて」

「どう？初めてお酒を飲んだ感想わ」

「美味しい。ジュースみたい」

零香は一気にグラスを空にすると、カミィラが次のグラスを渡した。

「それは、アエリって言う名前のお酒。綺麗な赤紫色でしょ？」

零香はグラスの中に入っている紫色の液体を見て、頷く。

「アエリという言葉には意味があつてね。『愛しい』って意味があるんだよ」

「……へえ」

アエリを光に透かして見て、どこかで見たことのある色だ、と思う。今まで会った人の中で誰かいたかな…と思い出してみると、あの領主の息子を思い出す。紫色の長い髪に赤い瞳が印象的だった人。よく思い出せば、瞳は赤ではなく赤紫だった気がした。

「そつえば、レナードさんの瞳ってこんな色だったな…」

そう言いながら、一口飲んでみた。葡萄のような味が口に広がる
だが、今度は喉が焼けるような感じがし、体の奥から熱くなる。思
わず、咽た。

「けほつ、かは」

「だ、大丈夫か？主」

クオに背中を擦られ、何度か息を吸い込んでようやく咽ていたのが
止まった。

咽ている間に涙が出ていたのか、エリミアに顔を拭かれた。

「ありがとう」と言って、零香はアエリの入ったグラスをカミィラ
に返す。

カミィラはそれを受け取って、お盆に載せ、代わりに最後のグラス
を渡した。

「それはアエリみたいに強くないよ。ラタって言うの」

零香は黄色いラタを一口飲む。

最初は葡萄の味がして、後味はレモンの様にすっきりとした甘さだ
った。

少しアルコールが強いが、先ほどのアエリと比べると断然飲みやす
い。

「今まで飲んだ奴で一番好きかも」

「意外……ラタってあんまり女性に人気じゃないんだよ？」

「そうなの？」

ラタを飲みながらパスタの最後の一口を食べる。

カミイラは零香のグラスにラタを追加して、エリミアの横の席に座る。

エリミアとシュウラはいまだに食べ続け、クオはそれをじっと見ながらアエリを飲んでいた。

「何でか解らないんだけど、人気無くてね。男性でも飲んでる人はごく僅かなんだ」

「ふん」

目線だけで周りの兵士達のグラスの中身を見ると、確かに同じような飲み物を飲んでいる人はいなかった。

クオも色々な酒を飲んでいるようだが、ラタは飲んではいなかった。グラスの中のラタを見ながら、こんな美味しいものが人気が無いなんて不自然な気がした。

不思議に思いながら、ラタを飲んでみるとカミイラが他の席に座っている兵士に呼ばれた。

「カミイラちゃん！酒の追加頼むよ。もう酒樽が空になりそうな

んだ」

「は〜い！ちよっと、行って来るね」

「頑張つてね」

カミィラは零香の言葉に頷き、席を立って台所のほうへと姿を消した。

零香はまだお腹が空いていた為、エリミアとクオが渡してきたスコーンのような物に蜂蜜をつけて食べた。

カリッと焼きあがったスコーンに甘い蜂蜜が合って、とても美味しい。

蜂蜜以外にもジャムのような物があった。が、ちよっと見た目からして付けて食べたくなかった。

虹色のジャムなんて、どんな味がするんだとちよっと気に掛かったが、誰も手を出していなかったため、諦める事にした。

4つ目になるスコーンに手を伸ばし、蜂蜜を付けて口に入れる。

その美味しさに、思わず笑みが零れる。そして、気づけなかった。

「……ものすごく幸せそうな顔をして食べてるな」

「！」

食べる事に集中していて、カミィラが座っていた席にリュナミスが座っている事に気が付かなかった。

驚いて、食べかけのスコーンを手から落としそうになった。落とすことはなかったが、手首にスコーンについていた蜂蜜が付いてしま

った。
すぐにハンカチで拭うが、まだべたついている感じがする。
食べかけのスコーンを皿に置いて、原因の人物を睨む。

「突然驚かさないでくださいよ。落としそうになったじゃないですか」

「気づかなかったお前が悪い」

「いつの間に来たんですか。エリミアもシュラもどこかに行ってる様だし……」

リユナミスに言いながらラタを飲んでいると、彼はパルサーシャがいる方を指差した。

グラスに口をつけたまま、パルサーシャのいる方へ目を凝らすと

「ほらほら、飲んでください。もっと飲めるでしょう?」

「無理無理無理無理!!もう飲めない!本当に、飲めないから!!」

エリミアが兵士に馬乗りになって、酒樽から酒を飲ませようとしている。その顔は微妙に赤く、目がキョロキョロと動き続けている。完全に酔っている。その横を見ると

「おにいさんよわしい このぐらいかんたんにのめるのに」

「精霊と人間を比べんなよ！うぷっ、叫んだら吐きそうに…」

「よし、今度は俺と勝負だ！負けねえからな」

「いいよ？どうせしゅらがかつんだから、だれでもおいで」

兵士達と酒を飲む量で勝負をしていた。周りには数名、飲みすぎて顔を真っ赤にして机に倒れている兵士の人達がいた。

その人達に、カミイラとユーリリアが交代で氷水を顔に当てたり、飲ませたりしていた。

二人のそんな様子を見ながら、パルサーシャは酒樽の上で大爆笑。その顔は、微妙に赤く行動が全てふらふらしている。

完全に、酔っ払いになっていた。

彼らから視線を外し、目の前で呆れたまま向こうを向いているリュナミスに聞いてみる。

「いつから？」

「俺がこの席に来る少し前だ。料理を向こうに取りに行くつもりだったんだろう。その途中で、酔っ払ったパルサーシャに捕まって酒を飲まされた」

「で、あんな状況に至っている。と」

「ああ。エリミアは酔ってあんな行動を起こしてる。シユラは……」

楽しんでるだけだ」

（ですよね〜。まあ、危なくなったら周りの人が止めてくれるですよ……）

零香はあまり気にせず、どうにかなるだろうと考えながら残ったスコーンを口に入れる。

それよりも、うるさい方が問題だ。さつきから周りの騒ぐ声で耳が痛い。隣に座っているクオナなんて、耳をパタンと閉じ、音が聞こえないようにして眉間に皺を寄せている。

零香は頭を片手で押さえながら、自分のグラスを指でクルリと回す。中にはもうラタは入っていない。まだ食べ足りないし、飲み足りない。だけど、うるさすぎて美味しい物も美味しくない様に感じてきた。

「静かな場所で、ゆっくり楽しみたい……」

「それなら、一緒に部屋で飲みませんか？」

頭上から聞き覚えの声が聞こえ、少し顔を上に上げると、微笑んでいるエリクが立っていた。

その後ろには、赤い髪に緑の瞳を持った、見た目は青年。しかし、生きた年数は零香の4、5倍生きているミケルが同じように立っていた。

「エリク様……と」

「自己紹介が遅れてしまい、申し訳ありません。ミケル・ロードと申します。以後、お見知りおきを」

「あ、零香・樹新と言います。こちらこそ、宜しく御願います」

改めて自己紹介をお互い済ませると、エリクに手を握られ引っ張られ、自然と席を立たされた。

「さあ、僕の部屋に行つて飲みましょう。リユナミスさんも一緒にどうぞです?」

「喜んで」一緒にさせていただきます」

「あの、殿下。クオも一緒にいいでしょうか」

「それは駄目です」

即答されてしまった。ただそれだけなのに、何故か涙がこみ上げてきた。内心驚きながら、顔をすばやく隠す。

しょうもない事で泣くなんて、初めてかもしれない。両親や妹の葬式でも泣けなかったのに、こんな事で泣くなんて、馬鹿みたいだ。

と零香はすぐに涙を拭うが、涙は止まらずさらに頬を濡らした。いきなり泣き出した事に驚いたのは、零香の周りも一緒だった。

周りにいたエリクやリユナミス、ミケルやクオは何度も顔を覗き込んで「どうしたんですか?」「大丈夫か?」と聞いてくる。

いきなり泣き声が聞こえ、異変を感じた彼らの周りの兵士達は、い

きなり無言になった。

零香自身は、涙を止めようにも止められず、笑いながら涙を流している状態だ。

「とりあえず、主を人の目から遠ざけよう」

「そんな事、お前に言われなくてもわかっている」

クオとリユナミスがそう言った瞬間、零香は浮遊感に襲われた。気づけば、リユナミスにお姫様だっこされていた。驚いて涙が止まり、叫びたくなるくらい恥ずかしくなった。

彼は気にした様子もなく、いつもの表情でそのまま食堂の出入り口に向かった。

「えっ、あの、リユナミスさん!？」

「静かにしろ。あまりうるさくすると、エリミア達に気づかれる」

その言葉に、零香はすぐに口を閉じた。

もし今こんな状態をエリミア達に見られたら、酔った勢いで何をするか解らない。パルサーシャに見つかつたらからかわれるだけだろうが、他の二人は見た瞬間、リユナミスに殴りかかりそうな気がする。

「意味、わかるな？」と小さく呟く彼に、零香は何度も首を縦に振った。

この状態は恥ずかしいが、すぐに終わると思えば気持ちは楽になっ

た。

その後、エリミアやシュラ、パルサーシャ達の視線の範囲からすぐに離脱した彼らは、エリクの部屋で飲みなおす事にしたのだが、

「……あの」

「なんですか？レイカさん」「どうしたのだ？」

「……なんでこんな状態で飲んでるんですか」

何故かエリクは零香の膝の上に、クオは肩の上に頭を置いて酒を飲んでいた。

リユナミスとミケルは「私は何も関係ない」とでも言うような顔で、ただ平然と酒を飲んでいる。

零香は、こんな状態で酒を飲んでいる二人にチョップでも入れてやるるか、と一瞬思ったが絶対阻止される事は確定だと思い、諦めてされるがままの状態で自分もラタを飲んだ。

久しぶりの大勢の人達との食事は、いつのまにか零香の中で当たり前の物になってきていた。

いつか、彼らと離れなければいけないという事を忘れかけるほどに、彼らと過ごす日々は楽しいと思えた。

そんな楽しい日々はすぐに過ぎるもので、気づくと祭りの日当日を
迎えていた。

彼らの日常（後書き）

お酒の名前は自作です。言葉の意味も考えてます。

- ・アーダ「可愛い」・クリティニア「天使」
- ・アエリ「愛しい」・ラタ「神・女神」

こんな感じですよ。アルコール度数で比べるとアーダ<クリティニア<ラタ<アエリです。

アエリは赤ワインと同じような物です。作者はそう思って書いてます。

さて、次の話から実は話を分岐させてます。

内容によっては、零香達の立ち位置が変わります。

アバウトにいうと、村から離れるか居続けるかです。

内容は投稿してからの楽しみ、というわけで^^

作者も今悩み中なんですw

意見、ご感想待ってます）・（ノ

清めの儀式（前書き）

いよいよ、1章大詰めに差し掛かってきました
さて、ここからどうなるのか・・・。。。
作者も分かりません（・・）

清めの儀式

祭りの当日は、朝から慌しかった。

零香がいつもの様に太陽が顔を出すぐらいの時刻に起きると、すでに外は人の声で賑わっていた。

ゆっくりとした動作でソファから起き上がり、毛布を畳んで鏡の前に座って櫛で髪を梳く。

梳いている途中、シユラとエリミアと狐に戻っていたクオオが眠りから覚めた。

「…おはようございます。零香」

「おはよ〜」

「おはよう。主よ」

「おはよう、皆」

朝の挨拶を交わしながら、髪をポニーテールに結び、これから服を着替えようとした時、いきなり部屋の扉が開いた。

驚いて扉のほうを見ると、ユーリリアとアミュエルが立っていた。

「ユーリリアさん、アミュエルさん。どうしたんですか？」

「ユリアと呼んでください。レイカ様、後10分ほどで清めの儀式があります」

零香は、前日に聞いた清めの儀式についての説明を思い出す。

精霊の踊り子達は最初、水の精霊によって清められ、祝福を掛けられる。

だが、水の精霊は純粹な心を持った人間を好むというらしい。邪悪な心を持つ踊り子は、祝福を受ける事ができない。

そして、祝福を受けなかった者は天から降りてくる精霊達を呼ぶ資格が無いと認められる。祝福を受けた者は、ようやくそこで精霊の踊り子として認められ、精霊達を呼ぶ資格が与えられるという。

この清めの儀式によつては、その年の農作物の収穫量が大幅に増えたり、減ったりするらしい。とても、重要な儀式だと聞いた。

でも、早過ぎないか？まだ太陽、完全に顔を出していない状態ですよ。

「すぐに踊り子の衣装を着て、広場に行かないと間に合わなくなるわよ」

そう言つて、彼女達に腕を掴まれ、すぐにドレスに着替えさせられる。

マーメイドドレスだが、背中は大きく開き、踊るために裾は所々にスリットが入っている。

胸元の水色から下にいくに連れて、青から濃紺色になり、裾の所々に銀色の糸で刺繍された様々な大きさの蝶が飛びまわっている。

「ドレスを着るだけで十分美しいのですが、髪も少し結つてもっと美しくしましょう」

「それじゃあ、私は化粧でもしますか。ちょっとその鏡の前に座つてね」

アミュエルに促され、なすがまま鏡の前の椅子に座る。

すると、髪は下ろされ、顔には化粧水のような物を塗られ始めた。目に入らないように瞼を閉じていると、今度は口にグロスのような物を塗られる感触がした。

「よし、化粧は終わったわ。素が良いだけに、少しで十分綺麗」

「こちらも終わりました。さあ、目を開けて見て下さい。レイカ様」

恐る恐る目を開けると、そこには別人のような私があった。

薄いピンク色の艶のある唇に、白い雪の様な肌。髪は横と後ろを少しだけ編みこんで、残りは下ろしただけ。

彼女達は黙って鏡を見ている私の様子を見て、まだ不満だと勘違いして、髪や化粧をやり直そうとして、私は「もうこれ以上綺麗にしてもらうのは十分です！」と言うと、微笑んだ。

ずっと鏡を覗き込んでいると、髪に青い宝石の髪飾りが付けられる。

首にも、同じ青い宝石のネックレスが掛けられる。

月をモチーフにしたそのネックレスは、以前アラトエルの所で格安で買ったネックレスの一つだ。

私はわくわくして逸る鼓動を抑えながら、エリミアが着替え終わるのを待った。

彼女は踊り子として参加せず、観客として参加する。だけど、服を作ってもらったのだから着なければいけないだろう、という訳で彼女の好きなゴスロリ風の踊り子の衣装を着る事になっているのだ。

エリミアの着替えが済むと、私は急いで広場に向かった。

踊り子は祭りの間ずっと素足で歩かなければならないのを思い出して、いつも履いているパンプスを脱ぐ。

走るたび、足の裏が石や土に当たって痛い。

痛いけど我慢しながら広場まで向かうと、すでに踊り子候補の女性達が集まっていた。

その中には、もちろんカミィラもいる。

私が走ってくるのに気づいたのか、彼女達は一斉に振り返る。

その顔は待ち望んだような、惚れ惚れしているような顔だった。

「ようやく来ましたわね。お待ちしておりましたわ、レイカ様」

「遅れちゃ駄目なのよ？」

「すみません。ライラさん、シウカさん」

双子の姉妹のライナリア・チーチェとシエウカ・チーチェ。

二人共17歳で、デザインは一緒だが色が正反対のドレスを着ている。ライラが赤、シウカが青だが、二人がもし服を入れ替えてどっちが誰か答えてみると言われると、すぐには分からないほど瓜二つの姉妹だ。さらに美人。

彼女達は、双子の創造と破壊の神、「ラル」と「メル」を称える舞を踊り、精霊達を呼ぶ。

「もう！女神様が一番最後って、駄目だよ」

「うっ、うめんなさい……」

カミィラに強く言われて、自分の役割をもう一度思い出す。

零香は何度か全ての役の舞を踊ったのだが、指導者のユーリリアいわく、

「女神以外はありませんね。他の役だと他の人の女神より目立ちすぎて、駄目ですね」

という事らしい。女神なんて自分には無理だと言ったのだが、他の踊り子達にも同じような事を言われ、渋々踊る事になったのである。

女神とは、双子の神よりも上の存在でありながら、精霊、人間、魔物、全てのモノを平等に愛し、助けを真に求めるのならば何事からも救ってくれるという女神らしい。

ただし、女神は全てのモノを愛すが、同等に全てのモノを憎んでいるという。

女神の愛から精霊が生まれ、女神の憎しみから魔物が生まれ、その

二つを混ぜ合わせて人間が生まれたのだと、ユーリリアが説明してくれた。

双子の神は女神の代わりに世界を管理し、世界を素晴らしいものにするため、創造と破壊を繰り返すのだと彼女は言った。

少し変わった神様達だな、と最初は思ったが、人間らしい神様達という事で、零香の中では結論付けた。

カミイラと残りの踊り子達は、3人で精霊・人間・魔物の舞を踊る。神達を称える舞を踊る人は先に決める事が出来るのだが、精霊・人間・魔物の舞を踊る人は清めの儀式を行う水の精霊が決めるらしい。

誰がどの舞を踊るか分からないため、カミイラたちは零香の倍以上練習しているのを見ていた。

その光景を思い出して、カミイラには精霊の舞を踊って欲しいと思う。

他の二つの舞に比べると、精霊の舞は明るくそして陽気な音楽で軽やかに踊るのだ。

カミイラがその舞を踊った時、思わず見惚れて彼女の姿をずっと目で追っていた。

似合っているのだ。彼女の笑顔に。

カミイラの頭を撫でながら、「頑張ろっね」と言つと彼女は大きく頷いた。

気合は十分なようだ。空回りしない事を祈っておこう。ふと目を周りに向けると、ライラが周りをせわしなく見回しているのに気づく。

「もうすぐ迎えが来るはずなのですが……遅いですわね」

「ね。何してるのかな、あの第一王子様達」

「え、迎え？それに第一王子って……」

「ああ、レイカは聞いてなかったんだっけ。毎年ね、水の精霊のいる場所に行くために、選ばれた人達が迎えに来てくれるの。今年は殿下達、騎士団の中から数名なんだよ」

「そうなんだ……」

村の入り口のほうへ顔を向け、目を凝らすと、遠くから馬と数名の人の姿が見えた。

どうやら来たらしい。遠くで見ても、分かりやすい人たちだ。

数分すると私達の目の前で馬を止め、優雅に下りてくる白い騎士服を着たエリク。

その隣で同じような白い騎士服を着たりユナミスが、馬の手綱を二つ持ったまま傍に控えていた。

他の兵士達は灰色の騎士服を着て、その後ろに並んでいる。

エリクは優しく微笑むと頭を大げさに下げた。それだけなのに、私とカミイラ以外は黄色い悲鳴を上げる。

(さすが王子。頭を下げただけなのに、仕草一つ一つが美人の女性より綺麗……)

「遅くなって申し訳ありません。さあ、儀式の場所へと移動しましょう」

そう言つて彼は私に手を差し出した。戸惑っていると、彼に手を握られ彼の乗っていた白馬の傍に連れて行かれる。

「少し失礼」

「えっ!?!」

いきなり体を抱きしめられたと思うと、軽くジャンプして馬の上に座らされていた。

すぐ後ろを向こうとすると、自分の顔の近くに彼の顔があつて、振り向いたらある意味私は死ぬかもしれない。

いや、確実に死ぬ。後ろを振り返ったら、天使の様な笑顔で見つめられて死ぬ。

「皆、乗りましたね。……レイカさん」

「なっなんですか？」

「馬に乗るのは初めてですか？」

「…初めてです」

そう言うと、いきなり腰に腕を回された。

腰にある腕と、彼と密着している背中が異様に熱く感じて、零香は心の中で悲鳴をあげた。

「揺れるので、しっかり僕に寄りかかって下さいね」

耳元で囁かれ、心臓が爆発しそうなくらい早くなる。顔も真っ赤になっっているかもしれない。

それを隠すように何度も首を縦に振ると、後ろで彼に小さく笑われた気がした。

零香達が乗っている馬がその場で旋回すると、村の入り口に向かってゆっくりと歩き始める。

零香は道中心を無にする事で、なんとか儀式の場所に到着するまで、平常心を保つ事ができた。

儀式は村から徒歩で30分ほど掛かる、巨大な人工池で行われる。

村人と騎士団、村の周辺に住む人達はすでに集まって、池から数m離れた場所で雑談している。

馬から下ろされ、芝生の生えた地面に降りると、「精霊が来るまで自由にしていい」と言われた。

頷くと、微笑んだエリクに一度頭を撫でられ「楽しみにしていますね」と言っつて、彼は馬を連れてどこかに行ってしまった。

他のメンバーもそれぞれで友人や家族と話をしているようで、零香は一人だけになって樹にもたれ掛って空を見上げていた。

エリミアやクオヤシユラ達は、まだ姿は見えていない。遅れているらしい。

「……暇」

そう呟いて、空から目を離すと見知った人たちの姿が見えた。向こうも気づいたようで、零香のほうへ近づいてきた。この前とは違う、正装を着た彼らに零香は一瞬誰かと思ったが、目や仕草で彼らと分かった。

「お久しぶりです。レナードさん、ミューさん、シエイドさん」

「久しぶりだな、レイカ」

そう、領主の息子とその友人達だった。もちろん、あの奴隷の子もいたが、今日は綺麗に髪も洗われ、きちんとした服を着ていた。それでも、彼の首にある首輪を見ると苦い思いになる。彼のふわふわしたピンク色の髪を撫でると、照れくさそうに彼は笑った。

「あの、僕の名前……」

「うん、ちゃんと考えたよ。フィラルード、略してフィル」

「確か、『小人』って意味だよな。それ」

「そうです。フィル君って、なんだか小人みたいな印象があつて…カミイラに教えてもらったんです」

「小人みたいな印象って何だよ」とミューが言ったが、名前を付けられた本人　フィルは嬉しそうに、何度も自分の名前を呟いた。彼の頭を、シェイドが撫で「よかったな」と小さく言ったのが聞こえた。

レナードの顔を見ると、穏やかな笑みを顔に浮かべ、じっとフィルを見つめていた。

穏やかな雰囲気の中、ふと周りが騒がしくなっているのに気付く。

村人達の視線の先を追って見ると、池の上に人が立っていた。

人々は口々に「精霊が天から降りてきた」と言っているのが聞こえ、そこでようやく水の精霊が来たという事が分かった。

「すみません。儀式が始まるようなので、ここで失礼します」

「ああ、また後で」

彼らに頭を下げ、少し早歩きで池の傍に近づく。

傍にはカミィラ達が横に一直列で並んでいる。零香は、ライラとシウカの真ん中に立ち、一斉にその場に座る。

周りの声が無くなった時、儀式が始まった。

水の精霊に頭を下げ、全員で池の中に足を伸ばす。少し冷たい水に肩まで浸かり、瞼を閉じる。

水が体を包み込むのを感じながら、ゆっくりと瞼を開ける。

目の前にいたのは、青の鱗を持った龍だった。だが、一瞬で青の瞳と青の髪を持った小さな少女に変わる。少女はかわいらしい見た目に反して、威厳のある瞳で零香達を一瞥すると、両手を広げた。

ふわりと浮き上がる体に、心の中で驚いているとゆっくりと池の傍に下ろされる。

水に入ったはずなのに、ドレスや髪は濡れていなかった。

その場に座り、精霊に頭を下げる。すると、水の精霊の声が頭の中に聞こえてくる。その声は、初めてクオと会った時の様な男でも女でも無い声だった。

『これほど純粹で清らかな心の持ち主は、そうそうおらぬな。そなた達を、舞手として認めよう』

「ありがとうございます」

『神の代理として、そなた達に祝福を捧げよう。受け取るが良い』

頭を上げじつと見つめっていると、精霊は順番に踊り子達に祝福を渡していく。

それぞれの頭に、少女の姿の精霊が口付ける。そして、舞について

一言、言っていく。
他の人の祝福を終え、零香の番になると精霊は一度零香の顔を覗き込んだ。

『ほお……初めて見る顔だ。そなた、名を何と言つ？』

「レイカ・キアラと申します」

『……ふむ、そなたは我らの女神と似ているな。生き写しのようだ』

精霊は何度も頷きながら、そう言った。

零香は（似ているかな？）と会った事の無い女神を思い浮かべつつ、精霊に礼を言った。

すると、精霊は微笑んで零香の頭に口付ける。

そして、高らかに歌うように言った。

『さあ、祭りの始まりだ！人も、精霊も、存分に楽しもう！』

その声に、歓声が沸く。

周りの人達が笑い、歌い、音楽を奏でているのを耳にしながら、零香は頭の中でこれからやる事の確認をしていた。

そして、ため息を付いた。

「そついえば……これから一人一人に祝福のお裾分けしないといけ

ないんだっただ」

女神の役をする人限定の優先事項の一つに、こんな物がある。

『女神役は、人々に精霊の祝福を分けること。やり方は、手に口付けを貰うだけでOK』

要約すると、こんな感じ。

そう、祭りに参加している全員に手に口付けしてもらわなくてはいけないのだ。

老若男女、嫌いな人も好きな人も含めて、この場にいる全員。100人以上は確実である。

「でも、やらないと！」

零香は自分を元気付けながら、自分に近い村人に話しかけ、手に口付けを貰う。

そして、他の人のほうへ向かおうとしたのだが……。

「おい、その女」

その声に振り返って相手の姿を見た瞬間、零香は背筋を撫でられたような感触に襲われた。

力の兆し

目の前にいる男に見られるだけで、零香はその場から逃げ出した衝動に駆られる。

だが、理性で押さえつけながら彼にニコリと微笑みかける。

目の前の男の容姿は、この世界で今まで出会った人の中で最低にも近い姿だと思った。

似合いもしない豪華な服に、指には大量に指輪を付け、身長は低く、お腹が大きく出ている。

その目は、品定めするようにキョロキョロと動き回り、鼻息も荒く、顔には所々ソバカスがある。

人のことを苦手に思っても、嫌いになる事が無かった零香だったが、この男は何故か生理的に嫌いだ、と頭の中で思う。

もし、向こうの世界の親友がこの男に会ったら、罵詈雑言を浴びせる事だろう。

一瞬で傲慢だと分かるほど、態度がでかいのだから。

「お前、何故俺に一番先に祝福を与えなかった」

「え……」

「領主の息子である俺に一番先に祝福を与えるのは、当然だろう」

男の上から目線の言葉に、零香はむかついたがそれは心の中で押し止め、態度にはおくび出さず、頭を下げる。

「申し訳ありません。私はまだ、この村に来て一週間ほどしか経っておりませんので、全員のお顔を覚えていないのです」

その言葉に、男は鼻で笑い、零香の右手を強引に取ると、口付けをした。

零香は、手から伝わってくる感触に鳥肌が立ち、（早く終われ、早く終われ）と心の中で呟く。

数秒経つても男の唇は離れず、「離してください」と言おうと口を開きかけ、目の前の男が誰かに鋭い視線で睨まれているのに気付く。いや、睨んでいるのは一人じゃない。大勢だ。女性も男性もほとんどの人が、この男を睨んでいる。

男は睨まれている事に気付かず、顔を上げると、そのままどこかへ消えていった。

男の姿が消えるまで零香は笑みを顔に浮かべ、姿が消えたと同時に池の中に右手を浸ける。

「……気持ち悪かった……」

「大丈夫か、レイカ」

「あつ、レナードさん」

手を池で軽く洗って立ち上がると、レナードがハンカチで拭き取られた。

優しく拭ってくれる様は、まるで年上の兄のように思った。

もし、兄がいたらこんな人みたいな感じだろうと思いつつ、お礼を言う。

「ありがとうございます。レナードさん」

「別に礼はいい。あいつが迷惑を掛けたな」

「………そういえばあの人領主の息子って言うてました。兄弟ですよ
ね」

「俺の血の繋がっていない兄の内の一人だ。父と母と一緒にいるだ
ろう？」

彼の指差すほうを見ると、両親らしい人物と今さっきの男に見た目が全く違う男達が立っている。

彼らは仲良く話している様だが、一人だけ場違いなような気がする。

あの気持ち悪い男以外、とても外見の整った方で、美人ばかりが揃

っているのだ。

レナードと似たような表情の男性は、おそらく父親だろう。その隣で豪華なドレスを纏っている女性は、彼の母親だと思う。

父親の隣にいる少しエリクに似た雰囲気の人や、母親の横にいるフイルの様な可愛い雰囲気の人はい誰なんだろう。

「近くにいる男達3人が俺の兄達だ。兄とは認めてないがな」

「え、あの、なんでですか？血が繋がってなくても、兄弟じゃないんですか？」

レナードは自分の家族を、特にあの男を睨みながら、小さく呟いた。

「俺の本当の母親は、あいつらの実験の所為で魔物にされた」

その言葉に零香は言葉を呑んだ。

「あいつらの、あいつの好奇心を満たすためだけに、騙された母上は魔物にされ、愛した父よって殺された。父はこの事を知らない。俺だけが知っている事だ」

彼は拳を震わせながら、顔に怒りや悲しみ、様々な顔を見せた。それだけ、彼が今まで苦しい思いをしてきたのが分かる。

傍に大切だった自分の母親の敵がいる。だが、自分の母親を愛していた父は知らず、敵を息子として愛している。零香は、想像するだけであの男に憎しみが湧いてきた。

零香はスタスタと歩き、レナード達の家族達に近づいた。

向こうも気付いて、頭を下げてくれたが、あの男だけは頭を下げない。

こちらも下げるつもりは毛頭無いが、他の人には頭を下げた。

頭を上げてみると、彼の父親の隣に立っていた女性が微笑んだ。

「祝福を分けに来て下さったのですね。ありがとうございます」

そう言うと、彼女から順に右手に口付けを貰った。

兄達は、零香と話しているときの彼の様子の事を聞きたがっているのが分かったので、ありのままに伝えると、耳元で重要な事を伝えてくれた。最後には二人共謝ってくれた。

最後に父親が、遠くのほうを見つめ、目を見開いて零香の顔を見て笑って口付けてくれた。

小さく言われた「息子を、宜しく頼む」という言葉に、零香は心の中が温かい気持ちになった。

「それでは、失礼致します」

そう言って微笑むと、零香は振り返りレナードの方へ戻った。

彼の驚いた表情に、少し笑いながらも零香は彼の手を握って微笑んだ。

「優しい人達でした。貴方のお父さんは、私に息子を宜しくと言ってくれました」

その言葉に、レナードは目を見開いて、頬を緩ませた。彼の視線の先には、彼の父親の姿がある。

「そう、か……」

「あの男以外は、とても優しい人達ばかりでしたよ？お兄さん達なんて、貴方の事心配してました」

「心配……？」

「そうですよ。あの男の命令を止める事が出来ず、貴方に辛い思いをさせている事を。そして今も、あの男の所為で苦しい行為を繰り返させている事を」

「どうして、それを知っている？。あれは、あいつと俺しか知らないはず……」

「お兄さん達が内緒で教えてくれました。あの男が村の人達に何をしているのか、全部教えてくれました」

レナードは頭を抑えながら「……あの、馬鹿ども」と呟いた。
だが、その顔は嬉しそうにも悲しそうにも見えた。だけど、これで
彼があ家族を憎む事はあまり無いだろうと思う。

だが、あの男だけは別だ。

あいつだけは、許せない。

そう思いながら、彼の手を離し、自分のすべき事をしようとした瞬間。

「誰か……ッ！嫌、イヤアアアアアアアアッ！！！！！」

女性の悲鳴が聞こえた。

悲鳴を上げた女性は、座り込み、自分の腕を見つめている。

彼女の腕が黒く染まり、影のように蠢いている。それを見た瞬間、
彼女の腕から出た影が彼女自身を飲み込み、徐々に人ではない形に
変形していく。

その間にも、彼女の周りにいた人間はどんどん影に取り込まれ、同
じように形が変形する。

「魔物……っ！」

隣にいた、レナードが叫んだ。
昨日の夜倒した、黒い狼の形に変わり、魔物は手当たり次第に混乱している周りの人たちを襲い始めた。
零香は、咄嗟に魔物に襲われている人達の下へ走り、引き剥がすように魔物に回し蹴りをかます。

「早く逃げて！出来るだけ遠くに、一人で逃げないで！」

「あ、ああ！」

その場から逃げ出す人を追いかけるように、魔物が向かってくるが、騎士団の兵士達が食い止める。
他の場所でも、魔物と交戦している騎士団の姿が見えた。前線には、リユナミスやエリクもいる。

「負傷者はこつち！安全な場所で治療するから！」

「カミイラ！エリミア達いなかったっ？！」

「私は見てない！」

カミイラが兵士達と一緒に負傷者を連れて行くのを一瞬見ながら、心の中で舌打ちをする。

(こんな時になんていないのよ！)

魔物に向けて氷の矢を打ち込みながら、周りの状況を確認する。

魔物の数が異様に多い。それだけ犠牲者が多いのだと、零香は手を握りながら、唇を噛んだ。

それだけではない。兵士達も猛攻撃に耐え切れず、逃げていく者もいた。

魔物を怒りに任せ、炎で燃やし続ける。それでも絶えず攻撃してく
るため、零香の体にも徐々に切り傷が付き始めた。

合間に自分で怪我を治療していると、樹の上で笑い続けている男を
見つけた。

男が座っている樹の周りには、誰もいない。魔物と交戦しているか
ら、他の人は誰も気付かなかった。

「ははははは！いいねえ、さすが僕だ！こんな素晴らしい殺戮兵器
を生み出すなんて、天才だ！！」

その男の笑い声と、言葉に、零香の中で何かが切れた。

「……………許さない」

人の命を何だと思っているんだ。

お前の好奇心を満たすために、どれだけの犠牲が出た。

今までどれだけの人が苦しんだ、悲しんだ。

彼が、どんな思いでお前に従ったと思っているんだ。

それでも、お前は楽しそうに笑うのか。

ただの自己満足のためだけに、今もこんな酷い事をするのか。

「……………」

無意識の行動である。無意識だからこそ、力を制御する事が出来ない。

邪魔をしてくる魔物たちは、全て魔法で塵も無いほど燃やしつくす。

男と視線が合うと、男は口笛を吹いて何かを呼び出す。

進路上に突如現れた巨大な影が徐々に形を作り、やがて人の形をとる。

見た瞬間、悲しみと男に対する憎しみが強くなった。

あの洞窟で会った魔物とそっくりだが、今なら分かる。

彼女は、レナードの本当の母親なのだ。

目の前の彼女が、黒い涙を流しながら男を守るように戦おうとしている姿を見て、零香も涙を零した。

せめて、一瞬で終わらせてあげよう。それが、彼女を救う事にもなるはずだ。

頭の中で思い浮かべた武器を、手でしっかりと握る。

魔力で生み出した、死神が持つ人間の魂を狩る大鎌。自分と同じぐらいの大きさのある赤黒い鎌を振りかざし、彼女の体を鋭い刃で切

り裂いた。

切り裂いたと同時に、刃から伝わってきた彼女の記憶に、零香は唇を噛み締め、体が震えた。

それでも足を止めることはせず、彼女の姿が空へ消えていくのを横目で見て、通り過ぎようとした。そして、消え逝く彼女の最後の言葉を聞いて、零香はさらに走る速度を速めた。

「はあああああっ！！」

「ひいひいっ！？」

情けない悲鳴を上げる男を睨みながら、零香は男の座っていた杖を切り落とす。

ドタツという音と共に地面に落ちた男を、零香はゆっくりと確実に逃げ場が無いように追い込む。

「どうした。もう笑わないのか？」

「ひいっ！！く、来るな、化け物！！」

「化け物？私を化け物と呼ぶなら、お前は何者なんだ。神か？それ

とも精霊か？」

恐怖で顔を染めて、後ろに逃げ続ける男を追いかけるように、樹の密集した抜け道の無い場所まで追い込む。

「も、もし俺に何かあればただじゃ済まないぞ！？それでもいいのか？！」

「それがどうした」

「お前なんて、すぐにこの世から存在が消されるさ！！あははははははっ！」

男を鋭い目で睨みながら、零香は普段とは違う氷のような表情で男の首を掴み、男の耳元で囁いた。

「その前にお前を消すから問題は無い」

「っ！？」

男を樹に背中を押し付けながら、零香は憎しみですぐにでも殺してしまいたかった。

でも、こいつにはまだ聞く事がある。まだ、殺せない。

「答える。何故、こんな事を起こした」

「何故か？実験のために決まっている！俺の研究成果を見るには今日が一番、うってつけだったからな」

「……何故、彼女を魔物に変えた」

「彼女？…ああ、あの女か」

気持ち悪い笑みを浮かべながら笑う男に、零香は首に込める力を強める。

それでも男は楽しそうに、そして見下すように零香に言った。

「あの女がいなくなつて母さんと結婚すれば、俺は無理する事無く研究が続けられる。それに、ちょうど実験動物が欲しいと思つていた所だった。消すにも利用するにも、丁度良い存在だった訳だ。まあ、あの女はそんな事知らずにまんまと俺の罠に引つ掛かったがな」

「……救い様の無い人間だ。嫌、人間以下の存在と言つた方がいいか」

零香は吐き捨てるように呟くと、女とは思えない腕力で男を片手で宙吊りにする。

男は目を見開き、首にある手を離そうと必死になって暴れるが、びくともしない。

男の首に指が食い込んで血が出始めるが、零香は全く気にしない。

血の匂いに釣られ、彼女達の周りに魔物達が集まり始める。

「ぐっ！はっ、離せ！俺はここから逃げるんだ！」

「黙れ。お前だけはこの場から逃しはしない」

「俺は、まだ研究し続けるんだっ！こんな所で死ぬわけにはいかない！」

「なら、お前の実験に使われた人達はどうなる。死んだ人達はどうなる」

「はっ、あいつらなんて、いてもいなくてもいい奴らばかりだろ！」

零香は男を持っている手に力を込め、地面に叩き落とす。

男の悲痛の声を聞き、地面でのた打ち回る姿を見下ろしながら、男の腹を足で踏む。

男が苦しそうにつめき声を上げる。男の首にピッタリと大鎌の刃をつける。

数cmでも男が首動かせば、ぱっさりと首が切れるほどの位置で。

「痛いだろ？怖いだろ？……お前はこんな思いをこの人達に与え続けてきたんだ」

「あぁっ、たす、たすけ……」

「助けて？じゃあお前は、今まで助けてと言ってきた人達を助けた事があるか？あるわけないよな」

顔が真っ青になりながらガタガタと体を震わせ、口から泡を吹く男。まだ気絶していない事が不思議である。

「お前がしてきた事はゆるっ……！！」

言葉を全て言い終える寸前、自分に向かってきた殺気の塊から遠ざけるため、男を蹴り飛ばし、大鎌で受け止める。

男が悲鳴を上げながら森の奥へ消えていくのを横目で見て、悔しいが、今は目の前にいるこの人の方を優先させる。

男を殺すことが出来なくて悔しいが、姿が消えただけで怒りは少し収まり、理性が戻ってくる。

「……どういづつもりですか？リユナミスさん」

その声を掛ければ、彼はゆっくりと剣を下ろした。

殺気も消え、うつむいたままの彼を見て不思議に思いながら持っていた大鎌を手から消す。

鎌を消すのとほぼ同時くらいタイミングで、リユナミスが顔を上げる。

「どうせあいつは、死ぬ」

その言葉に驚いて、目を見開く。

「何故？」と問いかければ、彼の方が驚いたらしく、数秒ほど固まって、突然笑い出した。

笑い出す彼に何を考えているのか分からず、首を傾げる。

すると、彼は零香の左手を指差す。そこにはめられている指輪を見て、零香も納得した。

この指輪は、精霊の契約の証であり、精霊に自分の魔力を与える物である。

そして、意思疎通をすることもでき、遠く離れていても契約した精霊は指輪の持ち主である契約者と、会話する事ができる。

と、昨日クオから説明を受けたのを思い出したのである。

エリミアには「携帯電話だと思えばいい」と言われた。

全然携帯電話と思えないけど、まあいいかとその場は納得した。

「多分、お前の気持ちを知ったあいつらが始末するだろう。それに、もうすでにあいつは王国から処刑宣告の書類が出されている。……この祭りが終わったら、処刑されるはずだった」

「それは、あの……」

「あいつの家族や村の人達は知らない、極秘で処刑されるはずだった。今回の事は一応、王に報告するが、たぶん王は手間が省けたと言っただけだろう、そんなお方だ」

「いや、そういう訳じゃなくて……」

「何故知っているのか？……騎士団の情報力とパルサーシャの力を舐めるな、とだけ言っておく」

「はぁ……？なんか、納得するには不十分ですけど……」

説明が不十分だ、と思いつながらも「わかりました」と言って頷いた。そして、男の血の匂いで集まってきた魔物たちを見て、もう一度大鎌を魔力で作り返す。

赤黒い大鎌を持ったまま、魔物を指差して、リユナミスに言う。

「こいつらに八つ当たりしてもいいですか？」

「ギャウン！？（えっ！？）」

「あ、反応した」

「お前の持つてる、その面白そうな武器を貸してくれるなら、許可する」

「ギャウ、ガウ?!ギャウン!?（俺達の意味、無視?!無視ですか!?!）」

「はい、どうぞ。というかそれ、あげます。また魔力で作るんで」

「…よく作れたな。まあ、ありがたく貰っておこう。ついでに参加させる」

という訳で、魔物たちの意思を無視した八つ当たりが始まる事になった。

ちなみに、魔物たちの抗議の声は、もちろん彼らには聞こえていない。

リユナミスに渡した大鎌と色違いの、刃まで黒い漆黒の鎌を作つて、零香とリユナミスは魔物達を倒していく。

魔物たちも反抗はしたが、焼け石に水程度だった。

途中、その様子を見ていたエリクが「面白そうだ」という事で参加

し、さらに八つ当たりという名の戦いはヒートアップしていった。

数分後には、全ての魔物は消え去り、水の精霊の好意によって魔物の血も無くなり、初めてこの場所を見た時以上に、幻想的で美しい広場が変わってしまった。

ちなみに、池の周りに花を生やしたり、水路を作って水を流したりしたのは、零香である。

案を出したのは、水の精霊と天から降りてきた精霊達だ。

楽しそうに微笑む零香を見て、同じように微笑むリユナミスとエリクだったが、彼らを遠巻きに見ていた兵士と騎士は、八つ当たりされて無残に瞬殺されていった魔物達を、初めて哀れだと思っていたのであった。

精霊の踊り子（前書き）

前回の更新から10日ほど経ってしまいました。

自分でもまさかこんなに遅くなるとは思ってもいませんでした。

……ネタが尽きてきたのかな？と少し不安です。

精霊の踊り子

魔物との戦闘から数分後、祭りは滞りなく進められていた。人達は、姿形が変わった広場を見て驚いたが、すぐに気に入り、踊り、歌い、笑っていた。

それは精霊達も同じで、つい先ほどとは比べ物にならないほど美しくなった池の上で、水の精霊は他の精霊達と酒を酌み交わしていた。その視線の先には、この広場を美しく変化させた人間を見つめていた。

確かに、自分達は「この場所を綺麗にして欲しい」とは言った。浄化してほしい、という意味で。

でも、まさか土地ごと浄化するとは思わなかった。それも強引なやり方で。

その所為で、今彼女はあんな状況になっているのだが、精霊達にとつてはただの笑い話でしか無い。

『人間とは、やはり面白いな。まさかこんな事をするとは思わなかったわ』

『いや、あの人間だけだと思いますよ？その証拠に、あの男に説教

「されているではないですか」

『まあ良いではないか。細かい事は、嫌いなんだ』

『水を司る者とは思えないセリフじゃな』

『お主には言われたくない。火を司る者とは思えぬほどの小心者め』

『こんな風になったのは、お前が原因であろうが!』

『静かに酒も楽しめないのか……』

楽しそうに話す彼らの様子は、一旦置いておいて……。この広場を浄化（作り変えた）本人は、というと

「……………」
「じめんなさい」

地面に正座して、うなだれていた。彼女の目の前には、大鎌を何度も振り回しながら満面の笑みで立っている、白い騎士団の制服を着た男が立っている。

だが、その瞳は氷のように冷え切っている。

傍から見れば「騎士団の副隊長が、女神役の女性に礼を伝えているのを、女性は静かに頭を下げたまま聞いている」と、村の人達は考

えるのだが、本当は違う。」

その証拠に、兵士達はその女性に手を合わせて何か呟いてから、逃げるように去っていくのだから。

「……………すみませんでした」

「それしか言わないつもりですか？」

彼女　　零香は、目の前の男性の普段とは違う言動にビクリッと体を震わせ、恐る恐る顔を上げた。

リユナミスと目が合い、その笑顔とは裏腹に怒っているのが良くわかった。

その目から顔をそらし、隣を見ると、そこには普通の人間から姿を見えないようにしているクオとシユラが座っていた。

精霊は、自分の魔力を強めたり弱めたりする事でその姿を消す事が出来るらしい。

実際今も精霊を見ることが出来ないリユナミスは、彼らに気付かず、ずっと零香を見ているのだけど、正直に言おう。

どこか別の場所に行ってください。

今さっきから小さくなってクルクル周りを回ったり、顔の前で手を振って見せたり、肩に手を置いてきたり……………。

シユラは何もせず、ただ横に座っているだけだから別にいい。クオは邪魔。

その気持ちが分かったのか、クオは一度私を見ると、そのままどこかへ消えていった。

シユラも同じように消えていくのを見て、ホッと息を付く。

異様に寂しそうに去っていったのは、少し気がかりだったが、これで少しは安心できるかと思っ た矢先

息を付いたと同時に、頭を叩かれた。

その痛さに頭を押さえ、目に涙を浮かべながら前を見ると、至近距離で彼の顔があつて、驚いて後ろに倒れそうになった。

「お説教の最中なのに、どこを向いてるんですかね？」

「あの、お顔が、怖いんですが。後、その言葉遣いも……」

「これが普通ですよ、ええ普通です」

「絶対、普通じゃないですよねっ?! さっきと全然違っじゃないですかっ」

「そう感じるのは貴方だけですよ」

微笑むリユナミスの表情に、何度も首を振りながらすばやく近くの

人の後ろに隠れる。

盾代わりにされた兵士は、困惑して目の前を見ると、微笑んでいたリュナミスの顔が無表情に変わって、顔を真っ青にして逃げていった。

盾の代わりが無くなり、おろおろしていると、頭を片手で捕まれて

グリグリグリと指でこめかみを押される。

「ふみやあああああああ！？痛い、痛い、痛い、痛いです！！」

「少し我慢すれば、これで許してやる」

「我慢します、我慢しますから、早く終わらせてください！！」

「暴れるともっと強くするからな」

「骨が、骨が痛い。暴れませんから、強くしないで下さいっ！！」

体を震わせながら目を閉じて、頭の痛みから必死に逃れようとするが、なかなか終わらない。

耳元でパチンツという音が聞こえ、ようやく頭から彼の手が離れた。

痛さで目から涙が零れていたのを手で拭って、彼を睨み付ける様に見ると、何故か満足そうに笑った。

そして、頭を撫でられた。

いきなり頭を優しく撫でられて、彼の行動に思考が停止しかけたが、先ほどの仕打ちを思い出して、もう一度睨むようにして彼に質問する。

「あの、何で撫でられてるんでしょうか？」

彼は少し悩み、それでも私の頭を撫で続けながら、ボソリと呟いた。

「……………撫でたかったから？」

「意味分かりません」

そう言つと何故か頭を軽く叩かれ、手に口付けをされた。突然の事で頭が追いつかず、ポカーンとした顔のまま彼を見ていると、ハツとして勢いよく立ち上がる。

「そういえば、まだ全員祝福し終わってなかった！すいません、もう行きますね？」

「あ、ああ、行って来い。女神の舞、楽しみにしてる」

「……………はい！楽しみにしてください」

元気良く返事をして笑うと、彼の顔が一瞬赤く染まったのがチラリと見えたが、あえて気付かぬ振りをしてその場から離れた。

リユナミスから見えない位置まで移動すると、思わず笑みが零れた。本当に、彼と話す楽しい。ずっと話していたいけど、自分の心臓が持たない。

この数日で、彼とはとても仲良くなれた気がする。

……苦勞人同士、仲良くなるのも当然か。

リユナミスは兵士や殿下、零香はクオオやシュラ関係で苦勞している。

例えばクオオが初めて人の姿になったその夜、零香が一人で水浴びをしようとしていた時の事だ。

いきなりクオオとシュラが「水浴びの仕方を教えてくれ」と言ってきた、シュラはカミィラが持つて行ったのだけど、クオオだけは自分が手伝うはめになって……

人間の姿のままだったら、男性陣に殺されていたかもしれない。

あの時は「狐の姿ならいいよ」と言っておいてよかったと、心から思う。

リユナミスの場合は、訓練を怠って舞の練習を覗きに来た兵士を連れ戻しに、何度も家と練習場を行き来しているのを毎日見た。

ほぼ同じぐらいエリクが乱入してきて、練習が度々中止になって、

連れ戻しに来たのも彼だった。

ミケルは「仕事をしてくれれば、後は彼の自由ですから」と笑っているだけ。

普段からこんな事ばかりしているのか？と聞くと、彼はため息を付いて頷いた。

昔から彼は苦勞してるんだろつなと思つう。

(……………何か甘い物でも作つてあげようかな……………)

この後も彼は仕事で色々な人と話をして、祭りが終わる頃には疲れて果てているだろう。

疲れた時には、癒しと甘い物がいいよね。

熊に攫われる前に作つて魔法で保存しておいたフルーツケーキは、男性も女性にも大人気だった。

多めに作つて、エリミアやカミィラ達にも食べてもらおう。どうせ舞を踊つたら自由に行動していいと言われている。

何を作るかは後で決めることにして、零香はさっさと全員に祝福をお裾分けする事に専念する事にした。

自分の耳に、見覚えのない桜の花を模ったピアスがついている事に気付いたのは、カミィラ達と舞台上上がる少し前だった。

零香にようやくあれを渡す（？）事ができたりユナミスは、舞台が良く見える場所に立って静かに彼女を見ていた。

隣には髪と瞳が黒く、燕尾服を着た男性が同じように彼女を見ながら立っていた。

その男が彼女から目を離し、自分を見ていることに気付いた彼は男の頭を叩いた。

叩かれた男は軽く頭を擦り、それでも顔に笑みを浮かべる。

「気持ち悪い笑い方だな」

「お前には言われたくないぞ。ずっと主を見ながらニヤニヤしおつて……」

「見間違いだらう。それより、お前なんでそんな姿なんだ？目だけ替えればよかつたはずだろ」

「主と一緒に良いと、前から思ってたからな。服もこの姿に合う物を選んだつもりだ」

男　クオは自分の体に触れながらそう言った。

白い髪は特に目立っていたのだが、今の黒髪も十分に目立っている。赤い瞳は魔物という認識のため、精霊とは知らぬ人間達に驚かれぬよう瞳だけは替える、とは言ったがここまで変化していると別人としか思えない。

「主……マスターも気に入ってくれてな。普段はこの姿を取る事にしたんだ。戦いの時は元の姿か、この前までの人間の姿になるつもりだ」

「そんなに魔力を消費していいのか、辛くないのか？」

「我を誰だと思っているんだ。始祖精霊だぞ？このくらい、使った内に入らん」

「そうか。なら、いい」

そう言って視線をクオから零香に戻す。

舞は舞台上で一役ずつ舞う。ちょうどこれからカミィラの番のようだ。

軽やかな音楽と共に、跳ねるように踊る彼女の姿はとても可愛らしかった。

舞うたびに衣装が羽の様に動く様は、伝承に残る様々な精霊の姿を思い出させた。

終わる頃には、彼女を取り囲むようにして様々な精霊が姿を現していた。

それでも、下級精霊と呼ばれる球の形をした精霊が多かった。

踊り終えたカミイラが村の人達から拍手を貰うと、彼女はこちらに気付いて走って近づいてきた。

「ね、リユナ兄。ワタシの舞、どうだった？」

「今年の舞は、今まで見た中で一番だった。頑張ったな」

彼女の頭を撫で、そう言うと、彼女は目を見開いて驚いた後、嬉しそうに頬を赤く染めた。

「初めて褒められた……」

「そうだったか？」

「そうだよ。今まで一度も褒められた事無いんだから……あつ、次始まるよ」

舞台のほうへ向くと、双子の姉妹が舞台上がって行った。

そして、荒々しい音楽と共に始まる舞。

赤い衣装を纏った片方が激しくもどこか愁いを持った仕草で踊り、青い衣装を纏ったもう片方が緩やかだがどこか怒りを感じさせる動作で踊る。

その姿は、まさしく破壊と創造の姿。双子の神の姿だと思えた。

その踊りには精霊も人も魅了されているのか、沢山の精霊達が舞い降り、人々は美しさからため息を何度もついていた。

彼女達の番が終わると、入れ替わるようにしてヴェールで顔を隠した最後の踊り子が舞台上立つ。

舞台上上がると、荒々しい音楽が穏やかな音楽に変わる。

ヴェールを被ったままゆったりと踊り始めた彼女の周りで、異変が起きた。

彼女の姿をかき消すほどの青い花びらが一瞬で舞い、彼女の姿を隠した。

そして、花びらが消えると同時に、音楽が明るく陽気な音楽に変わり、彼女の顔を隠していたヴェールが消え去っていた。

だが、その瞼は閉じたまま彼女は踊っていた。

気が付けば、彼女の踊る姿に夢中になっていた。
彼女の一つ一つの動作に魅了され、目が離せなくなっていた。

そして彼女の睨が開いたと同時に、音楽が重く暗い音楽へと変わる。
仕草も清楚だった物が、妖艶な物へと変わった。

一瞬で表情が別人となった彼女と視線が合つて、息が止まりかけた。
顔が熱を持ち、自分が平静を保ててないのが丸わかりだった。
何故こんなにも自分の心が乱れている原因はわからないまま、ただ
今だけは彼女の姿を見ていたい気持ちだった。

彼女の舞が終わると同時に、周りで拍手喝采が巻き起こった。
本人は少しボーとした表情でゆっくりと舞台から降りてくる。彼女
の周りには、上級精霊や下級精霊が今までで見たことが無いほどの
数で、空に飛んでいた。

精霊を普段見ることが出来ないリユナミスだったが、毎年祭りの時
だけは必ず見える。

それでも、この数は異常だと思った。
だが彼女は現れた精霊達に見向きもせず、ただ視線だけを泳がせて
いた。

彼女の目と合った時、彼女は一瞬視線を止め、一度瞼を閉じた。そして、ゆっくりと開きながら頬を染めて、微笑んだ。

その笑顔はまるで満開に咲き誇った花の様でいて、優しくそして温かく包み込んでくれるような癒しの笑顔だった。

その笑顔を見た者は、ある者は倒れ、ある者は顔を隠し、ある者は彼女に向けて微笑んでいた。

リユナミスはその光景を横目で確認しながら、自分の心に湧き上がってきた感情を殺した。

彼女の笑顔を、誰にも見せたくない。

自分だけに向けて欲しい。

彼女の全てを独占したい。

初めて湧き上がってきたその感情に、自分自身が驚き戸惑いながらも、その眼だけは今だ彼女と彼女に仕えている精霊達が消えた方向を向いていた。

精霊の踊り子（後書き）

番外編を含め、今回のお話で30話となりました。

そして、現段階でアクセス数が約20000アクセス、ユニーク数が約3500人になりました。

この作品を読んでくださって、ありがとうございます。

これからも頑張っていきますので、よろしく願いします^^

ご意見・ご感想お待ちしております。

祭りの午後（前書き）

ようやく更新する事ができました…

忙しくてなかなか小説が書けなくて、前回更新から一ヶ月も経ってしまいました。

お待たせしてしまい、申し訳ありませんorz

それでは、どうぞ。

祭りの午後

零香は興奮冷め止まぬ自分の体を抱きしめながら、居候させてもらっている家に戻ってきた。

エリミアの魔法で一瞬で戻る事が出来た。これならお菓子を沢山作る事が出来るだろう。

だけど、少しでもこの余韻に浸っていたい。

一緒に戻ってきた3人に食材などの準備を頼んで、着替えるからと言って、部屋に戻る。

自分の部屋の扉を後ろ手で閉め、寄りかかるようにして床に座る。

自分の胸に手を当てながら、深いため息を付いた。

そのため息は、満足感とほどよい疲れから自然と出ていた。

「はあ……………」

きちんと踊る事が出来たと思う。

アドリブを沢山入れすぎたかもしれないが、後悔はしていない。

青い薔薇を散らしたのも、瞳を閉じて踊っていたのも全てアドリブだ。

達成感で満たされた自分の体を一度抱きしめ、立ち上がって結んで

いた髪を解いた。
装飾品も取って、ドレスからワイシャツとジーンズに着替え、ふと耳のピアスに触れる。

「……これはいいかな？」

舞台上上がる前、舞台の端で待機していたカミイラと応援に来ていたエリミアに言われて、ようやくこのピアスの存在に気付いた。改めて鏡で見してみると、綺麗な桜の形のピアスだ。

「いつの間に付けられたんだか……」

お説教をされている時だとは気付かず、零香は髪を簡単に一つに纏めてゴムで結び、階段を下りていった。ちょうどその時、玄関の扉を開いてメイド服を着たユーリリアが戻ってきた。

その手には大きめの紙袋を抱えて、彼女は片手に持った紙を読みながら扉を器用に閉めた。

「ユーリリアさん、おかえりなさい」

「っ…あ、レイカ様。先にお戻りになっておられたのですね」

「はい、ついさっき戻ったばかりですが…その紙袋は？」

彼女は紙をポケットに入れて、紙袋の中から小ぶりの肉まんのような物を取り出した。

それは以前カミィラがくれたが、一瞬でエリミアに食べられてしまった「モルル」という物だ。

ほのかに湯気の上がったモルルを紙袋に戻しながら、ユーリリアはニコリと微笑んだ。

「外に屋台が並び始めたんですよ。それでレイカ様達の朝御飯にと思ひまして、買って参りました」

「わざわざ…ありがとうございます」

あまり空腹は感じなかったが、貰える物がありがたく貰っておく。頭を下げてお礼を言うと、彼女は驚いた様な表情を浮かべ、顔を背けた。

一瞬、苦しそうな顔をした理由は何だろうか。気になったが、彼女はすぐに食堂の方へ向かって行ったため、聞く事はできなかった。

「さてと…あつちの方はどうなってるのかな？」

先に台所へ向かったエリミア達を確認するため、食堂にある台所とは別にある、普段パルサーシャ達が生活に使っているという台所へと向かう。

来る事が分かっていたのか、台所に立っていた3人は作業を続けながら後ろを振り返った。

エリミアはカミィラの作ったピンクのエプロン、シユラは何もつけず、クオはコートを脱いでその上から白いエプロンを身につけていた。

黒髪に執事服、さらにその上からエプロンをつけているクオを見ると、よく似合っているなと思う。

ちなみに、クオに執事服という案を伝えたのはエリミアである。クオは手元のボールの中身をかき混ぜながら、小さく笑った。

「マスターが遅いからもう焼き始めてるぞ？次の生地も用意してる」

「え、早過ぎない？5分ぐらいしか経ってないはずだけど……」

「5分も、ですよ。それよりも零香は作らないのですか？」

「作るよ。でも何を作ろうかと思ってさ……エリミア何かいい案はある？」

そう問いかけると、エリミアは少し悩んで何か思いついたらしく、両手を叩いて微笑んだ。

彼女とは一度記憶を共有していたらしく、零香の知っている事や体験した感覚は覚えているらしいのだ。

「プリンなんてどうでしょうか？手軽で食べやすいですし、他の物と一緒に食べても美味しいです」

「ぷりんってなに？」

「柔らかくて甘くて、とても優しい味のデザートですよ。クリームを付けても美味しいんですよ」

「しゅらも、ぼくもぷりんたべたい！」

目をキラキラさせ、口から涎を流すシユラに微笑みながら頭を撫でて、頷く。

零香より何十倍も生きているはずなのに、ただの子供の様な表情を浮かべるシユラに、零香は満面の笑みを浮かべながら、頭を撫でる。

「大丈夫、ちゃんとシユラの方も作るから」

「マスター、私の分は無いのか？」 「私の分もありますか？」

同時に訊ねてきた二人に、おかしくて笑いながら「ちゃんと二人分も作るよ」と言つと、まるで子犬のように目をキラキラさせて微笑んだ。

思わず、三人同時に抱きしめて頭を順番に撫でまくつた。

本当に反応が可愛すぎて困る。まるで3人の母親になった気分だ。

「もっつ、ちゃんと作ってあげるから、他の作業は任せてもいい？」

「了解しました」「まかせて!」「うむ、任された」

「いい返事だね。だけど、クオ。その喋り方は見た目に合いません、喋り方も変えよう」

びしっと指差しながらそう言うと、一度たじろいで渋々言うような顔で、ボソリと呟いた。

「む…この数百年、この喋り方だからすぐには無理だ」

「すぐには無理でも徐々に変えて。お手本は…ミケルさんかな?」

「あの小僧か……分かりました。善処いたします」

一瞬で見事な紳士の礼をしたクオに、思わず拍手をしてしまった。

（だけど、ミケルさんを小僧よばわり……さすが精霊、価値観が違った零香だった。）

本人は精霊だという事を気にしていないようだが。

むしろ普通の人は価値観が違いすぎて、最初は変態だと思っていた零香だった。

今更になって、そう思っていた事に罪悪感を感じ始めた。

「どうかしましたか?マスター」

「いや、なんでもないよ。それじゃあ、プリンを作り始めますか」

「「「おーっ」「」」

息ピッタリな精霊達と人形に、零香はもう一度顔に笑みを浮かべながら、内心複雑な思いで見つめていた。

プリンやエリミア達が作っていたマフィンが完成すると、ユーリリアが昼食の準備が出来たと呼びに来た。

一瞬、顔をじっと見られて頬を染めながら顔を背けたのは、無視しておこう。うん。

とりあえず騎士団全員分のマフィンは完成した。プリンの方は一応お世話になった人達の分は作り終えてはいたのだが……

目の前の惨状を見ると、ため息と謝罪したい思いが溢れてくる。

「ああ、これも美味しい。それも美味しい。全部美味しいですっ！」

「……まあ、味は良い」

「むふおーっ！うぐっ」

食堂に来て10分も経たないうちにできた皿の山。食堂の奥では慌しく動き続けるユーリアの姿。

そして目の前の3人が、運ばれてきた皿の中身を一瞬で空にする様子。

思わずため息を付くほどの光景だ。実際、何度も付いてはいるがそれでも足りないぐらいだった。

「……遠慮を知らないというか……食料全部食べ尽くす気なの？」

「そのつもりですが」「そのつもりだったよ？」「ん？」

「二人は食料食べ尽くすつもりだったの！？ユーリアさん、作るのストップ！」

「あつ、はい。それじゃあこれで終わりますわね」

そう言いながら、彼女はテーブルに人数分のスープを置いた。

ほっと息を付きながら、目の前で不満の声を上げているエリミアとシユラの額にでこピンを食らわせる。
2人共椅子ごと後ろに倒れそうになったのを、クオが器用に片手で抑えて元に戻した。

「食料を食べ尽くそうとした罰です」

「痛いです…」

「うう、あたまがぐらぐらする」

何かボソボソ言っている2人を無視して、目の前に置かれたスープをクオに渡す。
嬉しそうに受け取ったクオを見ながら別の皿にあったモルルを一つ掴む。

最後の一つだったモルルを口に入れると、食べたことのある味が口の中に広がった。

（見た目もそうだけど、これ肉饅！？）

思わず感激してゆっくりと噛み締めながら食べた。

大好物の肉饅をまさかもう一度食べられるとは思っていなかったため、嬉しくて顔が緩んだ。

気付いた時には、その場にいた全員に加え、いつの間にか帰っていた王子やリユナミスにガン見されていた。

「…何か？」

そう言うとは故か全員が首を傾げた。何気に傷付くんですが、その反応。

ため息を付いてグラスに入っている水を一気に飲むと、横に置いておいたプリンを机の上に人数分並べていく。

それを待っていましたっ！という目で見てくるエリミア達に苦笑しながら、興味津々で見てくるユーリリアや王子とリユナミスに先に手渡す。

受け取った3人は、少し戸惑いながらも食べ方を教えると、すぐに食べ始めた。

そして、目を見開いて驚き始めた。

「とっても甘くて美味しいっ！こんな物、初めて食べましたわ」

「この前食べたあの『けいき』と同じくらい甘くて美味しいですね。気に入りました」

「……私は少々甘すぎて苦手です」

三者三様な感想だったが、反応はまあまあな様だ。

ちなみに上からユーリリア、王子、リユナミスである。

実はこの世界、甘いお菓子という概念が無かった。

お菓子といえば、モルルやパンなど、いわゆる軽食がこの世界でいう、お菓子という部類に入るらしい。

蜂蜜やジャムまで有るのになんでお菓子が無いのだろうか、と思っ

ただが、蜂蜜や果物は貴重価値が高いらしく、普通は貴族に売るのが主らしい。
で、その貴族達もそのままで食すか、料理の調味料として使用するらしい。

この家に揃っていたのは、王子が泊まるからという事で用意しておいた高級品だという。

ドレスの採寸の時に食べたクッキーは、実はクッキーではなくパンを小さく固めて焼いたものだと、パルサーシャから聞いた時には驚いた。

作ったときには、もちろん大人気だったが、一部の男性陣は苦手そうな顔をしていた。

反対に女性陣はとても生き生きしていたが。
この世界でも、やっぱり女性は甘い物が好きなんだなと思った。

微笑ましい光景に顔を緩ませながら、自分自身もプリンを食べていると、ユーリリアの手が途中で止まっているのに気が付いた。

「どうしたんですか？ユーリリアさん」

「……レイカ様、お願いがございます」

突然そう切り出してきた彼女の顔は、真剣そのものだった。だがその瞳は、悲しそうに見える。

食べる手を止め、彼女に向き直ると、周りも気が付いたのか静かになる。

「どうか、どうかわたくしを……最後までレイカ様をお守りする事ができない、わたくしをお許し下さい」

「ユーリリアさん……？突然どうしたんですか」

「わたくしは、本日で役目を終えてしまいます。終えれば、わたくしはレナード様の下へ戻ることになるでしょう」

確かに彼女は初めて会ったとき、「踊り子に仕立てるまで帰ってくるな」とレナードに言われたと聞いた。

そして祭りは無事に終わった。それならば帰るのが普通だ。

だけど、彼女は何か別の事を伝えたそうに、目を泳がせていた。

「……どうか、この村よりできるだけ遠くへとお逃げ下さいませ。できれば明日にでも」

「え、それは何故ですか。何故私は逃げなくてはならないのですか？」

「……わたくしは、レナード様の侍女です。ですが、それ以前に奥様の侍女でもあるのです」

「それがどうしたのですか？」

「……詳しい理由は言えません。ですが……」

彼女は唇を噛み締め、体を震わせながら俯いた。
そして、彼女は震える声で叫ぶように言った。

「わたくしはっ！レイカ様を死なせたくないんですっ、殺したくないんです！たとえ主人を裏切る事になろうとも、わたくしは……」

彼女は顔を上げると、綺麗な紺色の瞳から涙を零した。

唇が振るえ、いつもは大人びたユーリリアが年相応の表情を見せた。彼女は、零香と同年だ。年上に見えたのは、侍女としての彼女だからだったのだろう。

だけど、今ここにいるのはユーリリアという一人の女性だと思った。

「わたくしは…初めて仲良くなれた…友達だと、思える人を…失いたくないっ」

言い切った彼女は、限界が来たのか本格的に泣き始めた。

声を押し殺しながら泣き続ける彼女を見て、零香は椅子から立ち上がり、彼女の横に移動して、そつと優しく抱きしめた。

ビクッと驚いて泣くのを止めたユーリリアの頭を、ゆっくりと撫でる。

「ありがとう、ユーリリア。私を友達だと言ってくれて、嬉しい」
「……！」

「大丈夫、言われたとおりにするよ。だから、泣かないで」

「…レイカ様…」

「レイカって呼んで。だって私達、友達でしょ？友達に、様なんておかしいよ」

優しく言つと、ユーリリアはぎゅっと零香の胸にしがみ付いて、また泣き始めた。
零香は苦笑しながら彼女を抱きしめ、泣き止むまでこのままで居てあげようと思った。

二人の様子を見ていた他の人達はというと

（…なんだろう。あの間に挟まれたい）

（殿下、犯罪者になるおつもりですか？）

（ふむ、それなら元の姿に戻った私なら大丈夫か）

（駄目に決まってるだろ。何を言ってるんだ、馬鹿狐）

（もっとたべたい〜、たべたい〜）

(俺の分やるから静かにしろっ)

(この状況…女と女の禁断の愛みたい！)

(お前まで頭おかしくなったのかっ。何だよ、女と女の禁断の愛って?!)

零香達を邪魔しないように懸命に暴走しまくる人達を止める、リュナミスであった。

それに気付いていた零香は、心の中で頭を下げまくった。

祭りの午後（後書き）

まだ忙しいため、10月は「Dollis」の更新がこれっきりになるかもしれません。

執筆はしますが、もしかしたら次回更新は11月になるかもしれません><

申し訳ございませんが、よろしく願います。

土下座したいくらいですorz

祭りの午後 ユーリリア side (前書き)

今日一日で一氣に書き上げたので、誤字脱字があるかもしれません。
&読みズライです。すいませんorz

それでもよろしければ、どうぞ

祭りの午後 ユーリリア side

わたくし、ユーリリア・キリアメス・トリメンティアは、没落貴族の家庭の次女として、この世界に生を受けた。没落貴族と言っても、金に困っていたただけだ。それ以外は全て貴族らしい暮らしだったと思う。

両親は素晴らしい方で、孤児や職を失った人を助けるためには手を惜しまなかった。

上の兄や姉は、両親を支えるために王宮へと勤めた。素晴らしい働き振りで、いつも輝いていらっしやった。

だが、それらは全て彼らの容姿が良かったから叶っていただけだった。

本人達は気付いていない。気付くはずも無いだろう。

家族の中で平凡な容姿のわたくしは、王宮に勤める事もできず、貴族の家へ奉公に出るしかなかった。

もちろん反対はされた。でも、わたくしも家庭を支えたかった。

純粋な思いで奉公へ向かった最初の場所で、わたくしは早くも後悔した。

貴族の主には、慰め物になれと無理やり体を貪られた。

一緒に働いていた奉公人には、冷たい目で見られた。

働いていれば、ことごとく邪魔をされ、わたくしは一時、精神を病んでしまった。

病んだわたくしを、貴族は簡単に捨てた。その代わりに美しい娘を妻に迎えていた。

その娘を一目見たくて、わたくしは一度部屋を抜け出して、驚愕した。

そこにいたのは、わたくしの実の姉で、姉はわたくしを捨てた貴族の横で幸せそうに笑っていたのだ。

姉の左手の薬指には、淡く水色に光る指輪がはめられていた。

わたくしは、姉に何度も言った。「あの男は駄目だ。貴方が苦しむだけだ」と。

だけど姉は聞かず、その日から一週間後、結婚式を挙げて晴れて貴族の妻となった。

その時にはすでにわたくしの心も治っていて、わたくしは姉の存在を忘れようと、幸せを祈ろうと、次の奉公先へと向かった。

そこで出会ったのが、レナード様だった。

レナード様はわたくしを見ると、無言で頭を撫でてくださった。まるで、全て知っているというように。

その赤にも紫にも見える瞳で、わたくしを慰めてくださった。

わたくしはそれだけで、この方に一生仕えようと決意した。

だけど、わたくしはレナード様の侍女には選ばれず、まずは奥様の侍女として働いた。

奥様は見た目に反してわがままで、気に入らなければ捨ててしまえば良いと思っっている方だった。

奥様は、わたくしが最初に仕えたあの貴族の主と同じように感じた。

奥様の機嫌取りは簡単にできた。わりと、単純な頭の方なんだと思う。

だけど、金の事になると奥様は凄く頭をきかせた。

わたくしは、奥様に言われたとおり人を殺す技を身に付け、邪魔するものは排除していった。

ある時は自分の体を囮にして、人殺しをしたこともある。

奥様はそんなわたくしを褒めて可愛がつてくださった。

だけど、わたくしはそれが嫌だった。だから奥様に願い出て、レナード様に仕えることを許していただいた。

レナード様は奥様と違い、欲がなく、命令をする事は無い。

何か必要な事があれば、わたくしにはではなく、シェイド様やミュー様へと伝えた。

わたくしは、ただ周りの世話をするだけだった。だけど、それだけで心は安らいだ。

わたくしはレナード様に心から仕えながら、奥様にも仕える様になっっていた。

そんなわたくしのところに、兄が押しかけてきたのは、レナード様

に仕えて2年が経っていた頃だった。

兄が押しかけてきた理由は、姉の自殺だった。

その事を伝えるために、わざわざ王都から田舎の村まで急いで馬を走らせてきてくれた。

姉は夫である貴族に暴行され、浮気され、あげくの果てに捨てられて、夫の前で首を切って自殺したらしい。

こんな事にはなるだろうと思っていたはずなのに、わたくしは耐え切れず、その場で泣き出してしまった。

その貴族の男は称号を剥奪され、牢屋に入れられている。

そう聞いた瞬間、わたくしは部屋を飛び出し、人を何人も殺してきたその手で男を殺してやろうと思った。

だけど、レナード様に止められた。何もしなくても、あいつは死ぬと。

もうその手を汚すなど、レナード様はおっしゃった。

殺すことを諦め、兄と過ごす内に姉の夫だった男が逃げ出して、魔物に体を食いちぎられて死体になって見つかったと聞いた。

これで姉は浮かばれるだろうと、わたくしは天国の姉に手を合わせた。

そんなレナード様が、初めてわたくしに命令をしてくださった時は驚いた。

突然「村のある女を守れ。ついでに踊りの指導もしてこい。それが終わるまで帰ってこなくて良い」なんて言い出すんですもの。わたくしは言われるまま、村へと赴き、その女性の住む家を訪ねた。

レイカ様を見た時は、レナード様と出会った時以上に驚いた。

初めて見る漆黒のとても綺麗な髪に、それと同じくらい輝く黒い瞳。雪のように白い肌に、小さく熟れたリンゴの様な赤い唇。

思わず見惚れてしまった。

彼女の反応も行動も、全てが輝いているように見えた。

レナード様が興味を示すのも、無理が無いと思った。

彼女と過ごした数日は、本当に楽しかった。

食事を作ればとても美味しそうに食べ、彼女に名前を呼ばれるだけで、思わず笑みが深まる。

踊りを教えても呑み込みが早く、すぐ覚えてしまっていた。まあ、体力が無くて時々倒れていたのはしょうがないわよね？

そんな彼女を見に来ていた兵士に、彼女は疲れた顔を見せず、ずっと笑みを浮かべていた。

祭りでの彼女は凄いとしか言えなかった。
まるで女神の生まれ変わりのように踊る彼女の姿に、見惚れていたのはわたくし以外にも沢山居ただけど、寂しくも思った。

この祭りが終われば、わたくしは明日か明後日の内に帰らなければならぬ。

それが、寂しくて悲しかった。そんなわたくしを崖から突き落とすかのように、奥様からある手紙を受け取った。

その手紙の内容は、どうしても許せないものだった。

「あの娘を殺せ。そして殺した後、剥製にしなさい」など、今のわたくしができるわけない。

できるわけじゃない。したくないのだと気付いたのは、階段を下りてくる彼女を見た時だ。

一瞬、レイカ様だとは思えないほど綺麗な方が現れたと思った。

まるでどこかの物語の貴族の男性の様なその仕草に、わたくしは一瞬で虜になった。

失礼ではありますが、女性なはずなのに、どこか男らしいレイカ様に……一瞬で恋をしてしまったようです。

ですが、恋とは違う感情にも感じられました。

わたくしは胸が苦しくなって、彼女から顔を隠して食堂へ向かいました。

昼食の準備が出来たと呼びに言ったときは、初めて死ぬかと思いましたが。
ゆっくり振り返ってわたくしを見つめてくる瞳に、自然と頬が赤くなるのが自分でもわかりました。

初めて「ぷりん」という物を食べた時には、その美味しさに感激してしまいました。

そして、こんな素晴らしい物を作り出す事が出来る彼女を、死なせない。そう思いました。

わたくしは、彼女に逃げるようにと話しました。話していく内に、どんどん胸が苦しくなって、わたくしは叫びにも近い声で、彼女に懇願していました。

「わたくしはっ！レイカ様を死なせたくないんですっ、殺したくないんです！たとえ主人を裏切る事になろうとも、わたくしは……」

涙が零れ、体が震えながらも、わたくしは今気付いた自分の感情を、彼女に伝えました。

「わたくしは…初めて仲良くなれた…友達だと、思える人を…失いたくないっ」

わたくしは、今まで友達が居なかった。

仲良くなってくる人なんて、兄や姉に媚を売りたい人ばかりで、本

当にわたくしを友達だと思ってくれる人はいなかった。もちろん、わたくしも思ったことはありませんでした。

でも、彼女の接するうちに、彼女の傍にいたい。彼女と普通の日常を過ごしたい。彼女ともっと話がしたい。と思ったのです。

これは、友達になりたい、という事でしょう？

わたくしは全てを言い終えると、自分の感情がコントロールできず、涙が溢れてきました。

せめてと、声を押し殺しながら泣くわたくしを、彼女は抱きしめて頭を撫でてくださいました。

驚くわたくしの耳元で、彼女は優しくそして嬉しそうに言いました。

「私を友達だと言ってくれて、嬉しい」

「泣かないで」

「だって私達、友達でしょ？」

その言葉が、どれほどわたくしの心を満たしてくれた事が。

わたくしはもう耐えられず、嬉しさから彼女の胸にしがみ付いて、泣いてしまいました。

彼女の優しさが、温かさが、わたくしにはとても嬉しかった。

だから、わたくしはもう大丈夫。

例え命令に背こうとも、彼女のためなら、この体がどうなるうと関係ない。

だって

わたくしは、レイカの友達だから。

わたくしは彼女の友達で居られるなら、この身も惜しくは無いと思うった。

彼女は、明日の朝、騎士団と共に王都へと行く事になった。

エリク様が、彼女を騎士団の魔術師として迎えると言った時には、食堂に居た全員が驚いた。

彼女は戸惑いながらも、共に行くと言った。周りの人たちは反対したが、彼女は王都に行きたいらしく、反対を押し切って承諾していた。

これで、安心した。

わたくしは、心の中でホッと息を付き、明日の出来事へ備えるため、借りている部屋へと戻った。

絶対に、彼女は無事に出発させる。

わたくしの頭の中には、もうそれだけしか残っていなかった。

祭りの午後 ユーリリア side (後書き)

さて、ここからが正念場……

頑張って執筆しますね)・・(b

感想、アドバイスお待ちしております。

旅支度（前書き）

ようやく時間に余裕が持てるようになってきたので、更新が少し早くなります。

旅支度

昼食のあの出来事から次の日、零香は朝早くから起き上がり、荷物の準備を始めていた。

エリミア達は別の部屋で眠っているため、部屋には一人しか居なかった。

王都に付くまで、民家のある村は全く通らないらしく、ベットで寝るのは王都に付く4日後になるらしい。

だから、エリミア達はそれぞれ一人ずつ広々としたベットで寝かした。

王都に付いたら、まずは王城に行って王と謁見をして、魔術師に任命してもらう。

そうしたら、次の日から騎士団の魔術師として働く事になる。

一度、魔術師としての実力を試されるらしいが、大丈夫だろうと皆口をそろえて言った。

仕事内容を聞いてみたら、命が危険になる仕事が多いが充実した生活を送れるだろう、と王子に言われた。

零香の目的は別だったが、給料がある事と無料の部屋（キッチン、トイレ、シャワー付きの個室）を借りる事が出来る、という事で少し悩んだが承諾した。

「よしつ。荷物は全部詰め終わった」

少ない荷物を全て詰め終えて、動きやすい服装に着替える。

ワイシャツにジーンズに着替え、パルサーシャから買った皮の靴を履く。

髪はいつも通りポニーテールに結い上げる。

後が出る時に、買っておいたマントを羽織れば旅支度は万全だ。

背伸びをしながらそのままベットに倒れこむと、これからの事について、考えを簡単にまとめる。

まずは、王都で魔術師として働く。ただし、性別や容姿は偽る。女性より男性の方が何かと便利だし、この黒髪は目立つ。クオヤシユラがいるからまだマシかもしれないが、用心に越した事はない。

自分は目立ちたくない、という気持ちがある所為でもある。

そしてある程度お金が溜まってきたら、ある物を作ってみたい。

それは、人間そっくりの等身大の人形。

体は魔法で作るが、服などは自分で作りたい。

シユラの様なゴーレムの体に精霊が入っている、という物ではなく、ただの人形。

男性と女性の人形を一体ずつ作りたい。

元の世界だと、部屋が狭いし費用が掛かるので諦めていたが、こっちの世界なら大丈夫だろう。

人形を作り終えたら、この世界でお世話になった人達にお礼をして、自分は姿を消す。

エリミア達は、その時に他の人に任せようと思っている。彼らの自由にする。

自分の身辺整理が終わったら、誰も居ない場所で一人で死のう。

魔術師としての仕事の途中で危険になったら、その時は周りの人を自分の身を盾にして守る。

それだけは心の中で決めながら、体を起こすと、扉を叩く音が聞こえた。

「どなたですか？」

「……俺だ。今、入っても大丈夫か？」

声の主はリユナミスだった。いきなりの登場に驚き反応が遅れたが、ゆっくりと部屋の扉を開くと、初めて会ったときの白い騎士団の制服を着て立っていた。部屋に招き入れると、彼は窓辺に座った。

「突然どうしたんですか？まだ日も昇っていないのに…」

「お前のこれからの立場が決まった。それを伝えに来ただけだ」

その言葉に首を傾げる。すると、彼は窓からまだ暗い外を見て、ため息を付いた。

「殿下と話し合って、お前は俺達の隊に配属される。そして、俺の副官になる事になった」

「は？」

「俺の直属の部下になる、と言った方がいいか。女だろうがこき使っから覚悟しとけ」

「いや、あの、突然すぎて理解ができませんけど!？」

「……そうだろうと思った。俺でさえ意味が分からないのだから…
全く、殿下は何を考えているんだ…？」

そう言う彼は、眉間に皺を寄せながらふと視線を零香に向けた。

「…本当に良かったのか？」

「何をですか」

「騎士団に入る事だ。殿下はああ言ったが、お前が想像しているものより苦しい事は確かだ」

「他の人も苦しいなら、私だけ逃げる事は許されません。当然ですよっ?」

「……お前は女だ。とても耐えられるとは思わない」

「みくびらないで下さい。女であろうと関係はありません。それに…女だろつとこき使つと言いましたよね?」

笑みを浮かべながらそう言うと、彼は目を見開いて、次の瞬間微笑んだ。

微笑んだ彼の顔は、安心したような顔をしている。

疑問に思いながらも、同じように微笑み返すと、あの事を伝えた。

「あ、私騎士団にいる間は男として行動するので、男として扱ってくださいね?」

「…はあ？」

今度はリユナミスが問いかける方になった。

気が狂ったのか、と言われたが理由を説明すると納得してくれた。が、それ以上に嬉しそうに見えるのは勘違いだろうか。

「何でそんなに嬉しそうなんですか？」

「…いや、これで害虫が寄り付かなくなると思っとな」

…なんとなく言いたい事は分かったが、あえて言わないことにした。

苦笑しながら付けていなかった契約の指輪を指にはめると、頭の中でエリミア達に呼びかける。

(皆、起きて)

(…おはようございます、零香)

(ふあゝ…おはよう、マスター)

(…)

(おはよう、エリミア、クオ。ちょっとシユラ起こしてきて？朝御飯作るう)

反応が少し遅かったが、返事が返ってきたのを確認して、指輪の機能をオフに切り替える。頭の中でスイッチを切るように意識すると、プツンという音と共に感覚が少し鈍くなる。鈍くなった感覚を戻すために少し頭を回し、喉を意識しながら意図的に声を変える。

「少し早いですが、朝御飯にします？リユナミスさん」

零香の唯一の特技である。

親友のあの人に「零香の声って、あの声優と似てるよね！やってみて」と言われて、青年の声ぐらいは出せるようになったのだ。それでも、声だけでは女性と間違われる事がたまにあるため、体の動きも指導された。

あの時は何を考えているんだ、と親友に言ったが、こんな所で役に立つとは思わなかった。

ついでに魔法で目と髪の色も変える。少し金髪交じりの茶色の髪に、青色の目。髪を下ろして下に結びなおすと、完全に青年のように見える。

鏡を横目で見ながら、目の前にいるリユナミスに微笑むと、彼は一瞬戸惑ったが普段どおりに戻った。

「その姿の時には何と呼べばいいんだ」

「ん〜…アシユリードをお願いします」

「アシユリード」とは、零香がゲームで使っていたキャラクターの名前である。

この見た目も、そのキャラクターを真似て変えてみた。さすがに肉体その物は変わらないが、見た目はそっくりだと思う。長い髪を切ったら、さらに似てくると思う。

「アシユリードか…分かった。他の奴らにも伝えておこう」

「お願いします。リユナミスさん」

「…そのリユナミスさんって言うの、やめてくれないか？」

小さな声でそう呟いた彼に、零香　　アシユリードは首を傾げる。

「深い理由は無いんだが……そう呼ばれると、体が痒くなるんだ」

「はあ…それじゃあ、呼び捨てにしても？」

「かまわない」

その言葉に頷くと、彼は満足そうな顔で部屋の外へと出て行った。後を追うように半歩後ろを歩こうとすると、自然と早歩きになるの

ああ、なるほど。

つまりエリミアは黒い脂ぎった、世間一般で言う「ゴキブリ」を見てしまつて、あんなになつていと……。

まだ痛い顔を押さえ、指の隙間から食堂の中を見ると、確かにエリミアがハンマーを持って黒い物体に向かって振り下ろしているのが分かる。

ため息まじりに立ち上がると、近くにあつた紙の束をクルリと束ねて棒状にし、黒い物体の通る道の先に立つ。

そして、ちょうど範囲内に入ってきた黒い物体を

「ていつ」

軽い掛け声と共に、手にしている紙の束で叩き潰す。

その行動に啞然とする男性陣を気にせず、次々と黒い物体を潰していく。

時々鼻歌を歌いながらリズム良く潰していく様に、エリミアも平常心を取り戻したのか、周りの光景を見てその原因が自分だと分かる、部屋の隅で落ち込んだ。

「最後の、一匹つと」

スパーンツという音と共に、この場から黒い物体は消えうせた。

残骸を他の紙の束で包むとそのままゴミ箱に捨てて、持っていた紙も捨てる。

手を軽く叩きながら食堂の入り口で固まっていた男性陣の方へ向くと、なぜかクオとシユラに熱を含んだ目で見つめられる。

意味が分からなくて、後ろに後ずさる。

「…かつこいい」

「男らしいな、マスター」

「え、これぐらい普通じゃない？」

その言葉に首を振る2人。リュナミスの方へと向くと、顔を隠しながら横に首を振っている。

もしかして皆苦手なんだろうかと思いつながら、潰した黒い物体が張り付いた紙を近づけると、凄まじい勢いで後ろに下がった。普段とのギャップに、思わず笑みが零れる。

「はははっ、もう死んでるから大丈夫だよ。ほら」

「「ぎゃあっ！」「うっ！」

「あはははははっ、私が平気なのになんで駄目かなあ」

「「駄目な物は駄目だ」「むりむりむりっ！しゅらたちでもこわいものは、こわいよっ」

「なんだか反応が可愛い。うりゃっ」

「「「いやあああああ」」」

女性の悲鳴の様な声を上げる男性陣に、楽しんでいたこちらも少し罪悪感が湧いてきた。

が、反応が面白いため、王都に出発するギリギリまで楽しんだ。

その光景を見ていたパルサーシャや復活したエリミアが味方に加わると、さらに男性陣は悲鳴を上げた。

悲鳴を聞きつけて兵士達がすぐに起き上がってくるが、事件ではない事にホッとして、それぞれ荷物をまとめたり、武器の手入れを始める。

誰も彼らを助けようとは思わなかった。

理由、意外な一面が見れたし何より助けようとしたら、自分達が巻き添えをくうから。

あの黒い物体にだけは近づきたくない。全員が思った。

「はあっはあっ……そういえば、よく私があったね。姿変えたのに」

「魔力の匂いが同じだったからすぐ分かった。それにしても……マスター、髪の色だけは黒のままでもいいだろう」

「どうせだったら全部変えたかったんだもん。あつ、男に見せるなら髪切ったほうが良いよね？」

「……それだけは駄目」「……」

「ついでに髪も戻しておけ。目だけ変えれば良いだろう」

「……わかりました……」

結局、髪は元の黒髪に戻り、目の色だけは青のままになった。

「目立つのは嫌なのに……」と呟いた零香　アシユリードに、周りの人間は無言で首を振って否定した。

目立つのは嫌、と言いながら一番目立つ行動をしているのはアンタだ。

その場に居た全員が思ったことである。

旅支度（後書き）

意外に男らしい零香でした。

この世界でもあいつは出てきます。しかし、サイズは地球のあいつよりも3倍ほど大きいのが、この世界の普通です。

ちなみに「アシユリード」という名前は、実際に私がゲームなどで使用しているキャラクター名です。

気に入っている名前の一つです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834r/>

Dolls

2011年10月21日10時00分発行